

kindkopr ess.com  
www.kindkopr ess.com

# 地球逆転

現代文明の毒唾

3

生野以久男

## プロローグ

「夜光雲か……」

最近、美しく輝く夜光雲が北緯五〇度以南にも広がっているという。

掃木有平がこのデータを手にしたとき、突然、脳裏に地球が大洪水に襲われる光景が鮮明に浮かんだ。その瞬間、全身に戦慄が走った。

夜光雲は成層圏よりも高い中間圏（上空五〇〜八五キロメートル）に形成される氷晶雲だ。夕方の薄明時、高層にある氷晶雲が地平に没した太陽光線を斜めから受け、氷晶片（氷粒子）が絹のように淡く光ってさまざまな波模様を描く。夏季、北緯五〇度以北の北欧諸国やアラスカではよく観測されるものだ。

「……『ノアの大洪水』が再来するようなことにならない方がいいが……」

「え？ ノア？ あなた、どうかなさったの？」

ソファでミステリーを読んでいた真知が振り向いた。

不意に、ノアの時代の「大洪水」のイメージが湧き上がってきたことに戸惑いを感じながら、彼は妻の澄んだ黒い瞳をじっと見つめた。大きな黒目が透き通る肌の面長な顔を一層引立てている。

黒い瞳と「ノアの大洪水」が重なった。

旧約聖書によると、神は大洪水を起し墮落し退廃した人類を滅ぼしたという。そのとき、神はノアに大洪水を予告し、彼とその家族に事前に巨大な箱船を造くらせた。このため、ノアたちだけが洪水から逃れることができた（創世記）。

「地球温暖化を防止するための国際的な取り決めは結局どうなったんですかね。あの騒ぎした京都の取り決めは本当のところ効果があったんですか」

取材にきたA新聞社の真田という小柄な記者はエリート然とした整った目鼻立ちの顔を有平に突きつけ、はじめから詰問調だった。

一九九七年十二月、京都で開催された国連地球温暖化防止京都会議（略称：温暖化防止京都会議）で地球温暖化を防止するための国際的対策の基本的枠組みともいえるべき「京都議定書」が採択された。各国が協力して、地球温暖化の原因となる二酸化炭素などの温室効果ガスの排出量を削減しようとする地球温暖化に関する世界初の国際的試みであった。

このなかで、二〇一二年までの第一期分の削減率、対象ガス、基準年、吸収源の扱い、排出権取引、クリーン開発メカニズム、共同実施等が取り決められた。日本も二酸化炭素などの温室効果ガスを一九九〇年レベルより六パーセント削減することになった。

この議定書によって国際的地球温暖化対策が推進すると思われたが、世界最大の二酸化炭素排出国米国がこれから離脱し、実効が上がらないままずるずると過ぎ、毎年世界の二酸化炭素排出量は増え続けた。日本の二酸化炭素の排出量も毎年目標値をオーバーしていた。

記者の早口の質問を受けたとき、有平の脳裏に一年もまえの「未来の光景」がふたたび鮮明に蘇ってきた。

「このままでは、ふたたび『ノアの大洪水』に見舞われ、やがて寒冷化して氷河期を迎えることになるでしょう」

真田は一瞬、間の抜けた表情をして有平を見たが、すぐ小馬鹿にしたような目付きにもどった。

「先生、何千年、何万年先のことは別の機会にお願いします。きょうは当面の地球温暖化対策に限定して、ご意見をお伺いしたいのですが……」

「わたしが言っていることはそんな遠い未来の話ではありませんよ。今世紀中、いや、もしかしたら、わたしが生きている間に『ノアの大洪水』が再来することになるにちがいありません」

「……………」

真田は沈黙したまま、じつと有平を見つめた。なにを考え込んでいるのか、目の焦点が次第にぼけていった。

数日後、夕刊の学芸欄に、論文ともエッセイともつかない有平の「未来の光景」と題した短文が掲載された。

「叔母から電話があったわ」

大学の研究室から戻ったばかりの有平に真知が影を宿した目を向けた。

叔母の清子は真知の父大田洪一郎の妹で、結婚に破れて実家に戻ったとき、気の強い清子は何度もあった再婚話には一切耳をかさず、離れて一人のんきに暮らしていた。両親が相次いで亡くなり、洪一郎が実家を継いでからも離れ暮らしをつづけた。

突然、洪一郎の妻和子が生まれたばかりの真知を残して逝った。清子は母親の代わりになって真知を育て、彼女が成人になるまでずっと面倒を見た。彼女が有平と結婚してからは、清子はもっぱら兄洪一郎の世話を焼いているらしい。

「うん……………」

いつものように黙ったまま、つぎを促すように、彼は目を上げて透き通る肌をした妻の顔を見た。彼女は大きな目を伏せたまま黙っている。

「なにか、特別の用事でも？」

こう言いかけて、テーブルのうえの夕刊に気付き、彼は口をつぐんだ。妻は清子から電話で知らされ、彼の書いた短文を読んでいたのだろう。

「……相変わらずよ。いつもの調子だったわ……。ねえ、『ノアの大洪水』が来るって、本当？」

「そりゃ、『大洪水』なんか来ないほうがいいに決まっている」

「じゃ、来ないかもしれないのね」

「さあ……、そうなればいいが……」

「作り話なの」

「単なる作り話ではない。一種の理論モデルと言っているいいものだよ」

「父がスタンドプレイだと言って怒っているらしいから、一度……」

「お父さんは偉い学者かもしれないが、それはひどい誤解だよ」

真知の父、大田洪一郎は丁大工学部の教授で、万年学長候補のボス的存在だった。真知が理学部の助手だった有平と交際していることを知ったとき、彼はただちに止めさせようとした。彼にとって、理学部の教授連中には一風変わった者が多く、いつもわけの分からない理屈をこねる理解し難き存在という思いが強かった。理学部の助手であればその同類項で、屁理屈をこねるにちがいない。

見た目は大人しそうな背の高い好男子でも、個性が人一倍強く、意固地で一風変わった性格、これは強い自信に裏付けられたものであったが、こんな偏屈な個性をもつ有平は人付き合いもわるく、天才と噂されていたものの変人視されており、理学部内でも評価が必ずしもいいものではなかった。

彼にはこんな男が娘の聲となるかもしれないと考えるだけで虫酔が走り、たとえ一人娘が選んだ男でも我慢ならなかった。

だが、真知が父洪一郎の反対を押し切って有平と結婚することが決まると、一人手で育てたわが娘の相手が万年助手で終わることを恐れたのか、彼は陰で理学部の教授連中に愛想を振り撒き、有平の講師昇格を働きかけた。

そんな小細工をしながらも、彼は有平と顔を合わせても決した自分から口をきこうとしなかった。有平や真知から軽蔑されることを恐れたのか、自分の小細工を知られまいとひたすら気を配った。

「父の誤解かもしれないけど……。でも清子叔母さまが心配して電話してきたのよ……」

有平には妻の気持ち痛いように分かる。彼としても、頑固な洪一郎を説得して真知と有平の結婚を認めさせた清子にあまり心配を掛けたくなかった。かといって、いつまでも洪一郎の言いなりになっていることもできなかった。若い彼には気負いがあった。

「われわれサイエンティストには、社会に対して警告を発する責任があるんだ」

彼は常々楽観的な態度で科学に接することを自ら戒めていた。科学はまだ不完全なもので、科学ですべてを解明できると考えるはならない。彼が研究対象とする自然現象においても解明できないものは限りなくあるのだ。こう自制しながらも、彼は研究過程で、社会に対し、多大な危害をおよぼすような事象の発生が予知されたときには、躊躇することなく、社会に知らせるべきであると信じていた。これは自然科学者としての社会的責任であり、人間として当然の行為だった。

それゆえ、彼は夜光雲の増加傾向のデータを見て、直ぐ、社会に対して「ノアの大洪水」の警告を発しようとしたのだ。彼には予知の公表から生

じるパニックよりも取返しの付かない危険発生を回避するほうが重要という信念があった。たとえその発生可能性についての検証が不十分でも、いたずらに検証に時間を費やすより、まず、被害発生を最小限に食い止めるために最大限の努力を傾注すべきなのだ。その危険が人類の存続にもかかわるものであればなおのことだった。

「……人類が享受している現代文明をここまで巨大化高度化大量化したのには、科学が与って力があつた。というより、科学技術が現代文明の推進役となり、これをリードしてきたといつていい。問題は現代文明の巨大化高度化大量化にともない、現代文明の『プラス』のみならず、その『マイナス』もまた巨大化高度化大量化してきていることだ。だから現代科学にともなう危険（『マイナス』）に対しては、当然、科学者に未然に防止する社会的責任があるんだ。こんどの夜光雲のこともこれに関係していることなんだよ」

地球温暖化などさまざまな地球環境問題に見られるように、現在われわれが享受している現代文明の「負」の部分が、この二、三十年の間に、極端に肥大化してきている。これらは際限ない人間の欲望のままに現代文明の巨大化高度化大量化を図り、現世人が甘い汁だけをとことん吸い尽し、不要なものや厄介物を環境へ吐き捨てた結果にすぎない。現代文明に浸る現世人の排泄物ともいべき地球環境問題を未来への遺産（負の遺産）とすることは、倫理的に到底許されることではなかった。

有平は真知の手を取って「これから生まれて来る新しい生命のためにも、地球上に『負』の遺産を決して残してはならないのだ」と言った。

真知の大きな目が一瞬潤んだ。

彼はこの際、洪一郎よりも真知に対して、夜光雲と「ノアの大洪水」の

ことについて詳しく話して聞かせておきたいと思った。だが彼は臨月の妻の体に気づかって、口をつぐんでしまうのだった。

妻の心配に応え、有平は義父洪一郎と一度話し合ってみようかと思うこともあった。だが本当のところ、彼には洪一郎に対して「ノアの大洪水」再来の可能性についてうまく話せる自信がなかった。

有平には直感的にももの本質を捉える才能があった。というより、夢中になって考えごとをしていると、ひとりでに解決策の全体像がぱっと浮かんでくるのだ。これに対して、洪一郎は、どちらかといえば、理詰めでものを考えるタイプだった。

ひらめきタイプは理詰めでものをいうタイプが苦手なのか、彼には洪一郎と話しているといつのまにか話が噛み合わなくなることが何度かあった。

一般に、ひらめきタイプよりも理詰めタイプのひとの話のほうが説得力がある。ひらめきタイプは口より頭の回転が早いのか、話し方に独り善がりなところがあって、どうしても飛躍が続きまとう。ときどき大きく飛躍する彼の話には独特な魅力があったが、理詰めタイプの話に慣れた真知を悩ませることもあった。話が飛躍し過ぎていて理解できないところを聞き糺すと、彼には全然そんな気がないのだが、こんなことも分からないのかといった顔をするのだ。

有平はどうとう、洪一郎と話し合うこともなかったし、また真知に夜光雲のことを詳しく話して聞かせることもできなかった。

その年の暮れ、妻は難産のすえ、一人娘の真有を生むと、「ごめんない。この子をお願いします」と言い残して、一生の仕事を終えたかのような安らかな顔をして息を引き取った。

翌年の春、有平は生まれて間もない真有を連れて、追われるような格好

で、北海道の大学に移った。真知のいない東京に、彼はなんの未練もなかった。

# 第一章

1

「あれは……、夜光雲じゃないか」

掃木有平は思わず強くブレーキを踏んだ。

前のめりになった身体を起こして、彼は助手席にちらっと目を走らせた。小さな暗い影がチャイルドシートでかすかに寝息を立てている。

真有が目を醒ましていないことを確かめると、彼は車を道路端に寄せた。ドアをそっと開ける。心地よい夜の冷気が肌を撫でた。

薄明かりの空に淡く青白く光る小さな細長い断片が帯状に連なり、果てしなく広がっていた。

「やはり、夜光雲だ」

しばらく、有平は空を見上げ、淡い光の広がりに見とれていた。

次第に打ちのめされたような気分が陥っていく。

「真知、あれがああの夜光雲だよ」

有平は低い声で呟くと、深いため息をついた。

なぜ真知にもっと詳しく説明しておかなかったのだろうか。彼はあのとき、妻の大きな澄んだ目が涙で潤んだのを見て、怯んでしまい、口を閉じてしまった。彼はいまでもそれきりになったあのときが気になって仕方がなかった。

夕暮れの空に光る夜光雲に目を釘付けにしたまま、彼はここから悔いた。真知に理解できるように説明することもせず、なぜあるとき、黙っ

たまま、話を途中で止めてしまったのだろうか。

真知には詳しく話しておこうと何度も思った。

だが一方に、新しい生命を身ごもっている妻をまえにして、ここらどこかに、夜光雲が日本の空に出現するようなことが起こるはずがない、新しい生命が誕生するのにそんなことが起きてたまるか、という思いもあった。

有平は夜光雲にじっと目を据え、空を見上げた。日本列島の北端でも北緯四三度そこそこにすぎない札幌上空にこんな早く夜光雲が現れるとは、彼にとって全く予想外のことだった。

地球を取り巻く大気圏が予想を超えるかに速いスピードで変化しはじめているのだろうか。彼はとらえどころのない得体の知れない不安を感じた。

夜光雲をカメラにおさめると、彼は足早に車に戻り、エンジンをかけた。

真有は寝息を立てて、気持ちよさそうに眠っている。彼はフロントガラス越しに、淡く青白い光を放っている雲に目を向けたまま、車を静かに発進させた。

有平は次第にスピードを上げた。

彼は一直線に走る道の彼方に浮かぶ夜光雲に吸い寄せられるように車を走らせていく。

ふと、真知の優しい視線を感じたような気がして、一瞬、彼は身を震わせた。

有平はおそろおそろ助手席に目を移した。真有が丸い大きな目を開いて、じっと彼を見ている。

「おお、マユ、お起きたの」

ふたたび車を道端に停めると、チャイルドシートのベルトをはずして真有を抱きかかえ、彼は外に出た。

「お空に光っているあれが夜光雲だよ。マユに分かるかな」

有平は真知に話し掛けるように、首にしがみついている真有に話かける。

生まれたとき、手のなかにおさまるほどの小さな存在に過ぎなかつた真有が、彼に首もとで「話すことはなんでも分かりますよ」といったげな円らな目をして、じっと彼を見た。

## 2

北海道上空に夜光雲が出現したことが知れ渡ると、まだ有平の論文を記憶していたマスコミがまず騒ぎだした。

「お話をお聞きしたい」

A紙の真田だった。

「一体、なんのことです?」

有平は受話器を持ちかえると、わざと興味なさそうな声で言った。

「夜光雲のことですよ」

「あれはもう済んだことです」

「まえの話の続編を書いていただけませんか。是非、書いて下さい」

「べつに新しいことはなにもありません」

「まえの繰り返しでもかまいません。このまえは日本で夜光雲が観測されるようになる、早ければ二十年後に、遅くとも数十年以内に『ノアの洪水』が再来すると警告していましたが……、その夜光雲が出現したのです

よ、このたび観測された夜光雲のことを簡単に付け加えていただければ十分なのですが……」

真田の上ずった声を聞きながら、有平は洪一郎を思い浮かべた。別れの挨拶に行ったとき、玄関先で彼に冷たい一瞥をくれただけだった。

清子の話によると、有平の論文を見て「あんなものを書かせるために、真田君を紹介したんじゃない」と訳の分からない怒り方をしたという。だが、面と向かつては有平になにひとつ言わなかつた。

有平は洪一郎が真田にどんな風に紹介したのか、一度確かめたかった。だがいつのまにかそれきりになってしまった。

「ところで、最初のとき、わたしのところに取材にいらした目的はなんでしたかね」

「え? あのとときですか。それは……その……」

エリート然と澄ました顔の真田が面を食らって、顔をゆがめ、赤面している感じが感じられた。

「誰かの紹介だったとか……。確か、あのととき、そんなことをおっしゃっていらしたようでしたが……」

有平はカマをかけた。

「ああ、思い出しましたよ。なんでも、先生は温暖化について変わった見解をお持ちだと聞いたので、一度どんなものか伺いたかったのですが、全然意図しないことになってしまって……。でもわたしにとっては、まあ、失礼ですが、今回の夜光雲出現で、先生の前回の論説が俄然脚光を浴びるような結果となりました……」

真田は口ごもる。

「変わった見解の持ち主だなんて、一体、誰がそんなことを言ったんです?」

「いや、誰でしたかね……。でも先生は温暖化の果てに、地球が寒冷化していくと主張していると耳にしたものですから……」

「あなたがたマスコミは結果のことにしか関心が向かないようですね。地球温暖化では気温が平均何度上昇するという結果よりも、それにいたるまでにいろいろながあつて、そのプロセスのほうが重大なですよ。地球が温暖化の果てに寒冷化するといっても、それにいたるまでのプロセスには人類の生き残りに関わるような大変なことが待ち受けているものです。」

地球気候システムのような巨大なシステムが一度揺れだすと、次第に揺れも大きくなって、思わぬことが起きたり、出現する個々の現象も極端なものになるのです。最近では異常気象も珍しくなくなりましたが、これからはさらに激的な気候異変が頻発することになるでしょう。それは超異常気象、気候大異変といつていいものすごいものとなるにちがいない。わたしが指摘した寒冷化もその延長に出現する一現象に過ぎません。もしかしたらいまのシステムそのものをも変えることになるかもしれないのです」

温暖化の果てに寒冷化が到来するのは、前世紀末、グリーンランド氷床から採取されたアイスコアの分析から見出された「急激な気候変動」のパターンにおいてもみられるものであった。

「先生、そんな調子で書いていただければいいのですが……」

有平は受話器の奥から伝わってくる真田の声を聞きながら、洪一郎のあの冷やかな一瞥を思い出していた。洪一郎の表情を殺した冷たい視線に彼は真知を奪った自分に対する怒りがまだ消えていないことを知った。真有のためにも、これ以上、洪一郎を刺激したくなかった。真田が何と言おうと、じっとしていたほうがいい。いまさら北海道から夜光雲のことについて発信することもあるまい、と思った。

だが結局、彼は真田のねばりに屈するようなかたちで、電話を切った。というより、真田の一言が彼のところに新たな火種を点した。

「先生は北海道にいつまで燻っているつもりですか」

あのとき、突然、教官公募の話が舞い込んで、有平はそれに乗ったかたちで北海道行きを決めたのだったが、あとで聞かされた噂話によると、洪一郎の工作があつたらしいという。娘を奪って殺してしまった男の顔など見たくなかつたのだろう。

「べつに燻っているわけではないよ」

有平は胸のなかざわつき出しているのを感じた。と同時に、頭のなかに、もう一度社会に対して警告を発しておくべきかもしれない、という思いが突然頭をもたげた。

三年前、東京を離れるとき、有平はこれまでの生活をすべて精算し、北海道で真有と二人きりで、新しい生活を始めようところを決めた。だが彼のこのころのなかには、ずっと彼を捉えて離さない得体の知れないものから逃れたいという気持ちがあつた。

彼は東京を離れることによって、無意識のうちに、どうしても馴染めなところがある老大家然とした義父洪一郎の態度や講座の教授らとの切るに切れないしがらみから逃れようとしていたのかもしれない。

それに彼には、時とともにポルテージを加速的に高め、暴力と退廃のなかに埋もれていく東京という大都会で、大学というアカデミック・サークルのなかの小さな殻に閉じこもり、権力におもね、羨望や嫉みだけを募らせ、ひとと争い、抜け目なく勝ちを拾おうとする集団のなかに呑み込まれそうになる自分を拒否したい思いがあつた。

こんな思いが尾を引いて、無意識のうちに、彼は真田の要請に対して素

直に従おうとしなかったのかもしれない。だがそれも真田の粘っこい話し方に押し切られ、結局、彼の言いなりになってしまった。

また、洪一郎との間に新しい火種を蒔くことになるかもしれない。そんな予感があったにもかかわらず、むらむらと湧き出てきた感情に抗しきれず、あえて真田の説得を受け入れた自分に、有平は戸惑いを感じた。いやそれは戸惑いというより、自分の新しい側面をはじめて見た驚きだったかもしれない。

こころのどこかに権威の塊のような洪一郎への反発があったのだろうか。有平は漠然と得体の知れない苛立ちが育っているのを感じた。

真有とのふたりだけの生活には、なにか地中に埋もれていくような部分があった。彼はいつのまにか、知らず知らずのうちに、新しい刺激を求めるころを育てていたのかもしれない。

こんどはどんな反響を呼ぶだろうか。有平は身体のなかに、なにかしら新しいものへの挑戦とでもいうような戦慄きに似た気分が漲ってくるのを感じた。

### 3

数日後、A紙夕刊に、有平の論文が掲載された。その要旨はつぎのようなものであった。

この夏、日本列島の北端北海道の上空に夜光雲が出現した。

夜光雲は薄い巻雲状の絹雲に似た氷晶雲で、地平に没した太陽の光線を

受け、光を散乱させて耀くときに見られる。

これまでの観測によると、夜光雲は夏の間、北緯五〇ないし七五度、南緯四〇ないし六〇度の中・高緯度地方の高度七五ないし九〇キロメートルの上空で、ごく稀に見られるものであった。

ではなぜ、北緯四五度以南の北海道で夜光雲が見られるようになったのか。

それは大気上層に広く氷晶雲が広がっているからだ。氷晶雲が広がったひとつの原因は、地球温暖化にともない、海水温が高まり、海水の蒸発量が極端に増えているからではないだろうか。

水蒸気には温室効果があるので、二酸化炭素など他の温室効果ガスと相加して温暖化を加速しさらに水蒸気を量産することになる。こうして過剰に増えた水蒸気は上昇気流に乗り、対流圏を突き破って成層圏に入り、さらに上層の中間層に上る。八〇キロメートル上空の中間層界面付近に達して氷結し、氷晶雲を形成する氷晶片や氷粒子となるのだ。

もし氷晶片や氷粒子の供給源である水蒸気が増えつづけるとどうなるか。氷晶雲が無限に増えつづけることになるのか、その辺のところはわからない。だが、現在のペースで進めば、遅くとも数十年以内に超過密に集中集積し、まさに臨界を超えるような状況にいたるかもしれない。

「真田君に繋いでくれ」

洪一郎は見ていた夕刊を放り出すと、受話器を取って秘書を呼び、不機嫌な声で言った。彼は電話を待つ間、夕刊をたぐり寄せ、もう一度有平の論文が載っているページを開いた。

「あのやつ……」

洪一郎は口のなかでつぶやき、有平の面長でどこなくクセのある目をした白い顔を思い浮かべた。

いやに白く見える顔と細い目は真知が連れてきたときから気に食わなかった。角張った大きな四角面の洪一郎には面長の色白男に対する独特の先入観があった。なぜそう感じるのか分からなかった。ただどこなく妖し気な雰囲気を感じて、男でない別の人種のように思ってしまうのだ。妻が赤ん坊の真知を残して逝ってから男やもめを長く続けていたせいかとも考えてみるが、こんなことはいくら娘でも言うことはできない。こんなことを言い出せば、頭から軽蔑されるにちがいないかった。

「有平は理想家肌だけど、お父さまは現実主義者なのよね」

「夕刊を見て怒っている」と清子が電話してきたとき、真知はまるで人種が違うんだといわんばかりのことを言ってしまった。それを洩れ聞いて、洪一郎は娘まで有平の言いなりになってしまったのか、と怒り狂ったという。だが彼女は有平のそんなところに魅かれたのだ。彼の発想にはどんでん返しのような意外性があった。

洪一郎は有平とは肉体と精神の両面で対極に位置しているというべきかもしれない。真知が亡くなったいま、二人は無理して理解し合う必要もなかった。

時折、洪一郎は真知が産んだ真有という女の子が気になった。両腕に抱くことができれば、と思うこともあったが、有平はこれまで一度も真有の様子を知らせてこなかった。あの男は、真知を略奪して殺したうえ、ろくな別れの挨拶もせず、真知が生命と引き換えに産んだ形見の真有を連れ、まるでおれから逃れるように、さっさと北の果ての北海道に行ってしまった。いまさらそんな男がひとに笑われようとどうしようと、どうでもよかつた。

た。おれの知ったことではない。洪一郎は自分が仕組んだことも忘れ、有平をこころのなかでこき下ろす。

「先生、真田さんですが……」

「ふむ、ありがとう。……やあ、真田君、元気かね」

真田は洪一郎の教え子の一人である。といっても、工学部を出てさっさと新聞記者になった一風変わった男で、どちらかといえば、洪一郎に反抗し、手を焼かせた口の学生だった。

「今度の掃木有平の論文もきみが書かせたのかね」

洪一郎は高圧的に言う。

「はい」

真田は不快感を滲ませた洪一郎の言い方にも一切頓着しない透明な声を出した。

一瞬、洪一郎は言葉を失った。

「ところで、なにかご用でしょうか」

真田は沈黙に耐えられないように言う。

「A紙ともあるうものが、あんなキワものを載せていいのかね」

「キワもの？　そうでしょうか。わたしはそう思いませんが……」

「きみは大洪水が二十年后に起きると信じているのかね。大体、その大洪水とやらも本当に起こるかどうかも分からないんだ」

「それはわたしに関係のないことです。あれは掃木有平先生の理論モデルのひとつの結果に過ぎません」

「でもきみが納得しているから、あれを書かせようとしたのじゃないのかね」

「納得するかしないかは関係ないのです。面白そうだから書いてもらった

だけです。読者も続編を読みたがっていますから」

「読者が？ マスコミは世論を形成する力をもっているんだ。それならそれらしく、きみ、もつと責任を持たなくてはならないのじゃないかね。面白そうだから書かせるなんていうことは三文ジャーナリストのやることだ。一流のジャーナリストなら世論に方向性を与え、これをリードするような真つ当なものを選ぶべきだろう」

「お説は一理ありますが、その真つ当なものとはどんなものですか。真つ当なものとしてでないものをどうやって区別するのですか。これらを区別する基準のようなものが考えられると思いますか」

「それを探すのがきみたち記者の仕事じゃないのか」

「ぼくにはこれまでの規範や価値観といったものが信用できないのです。人間は結局、みなその場限りで、結局、自分に都合いいように生きてきたと思えて仕方がないのです。それにマスコミが世論をリードするということにも問題があります」

「それでは社会が成り立たない。人間は社会的動物だ。人間のつくった社会があつてはじめて人間が人間らしい生活ができるのではないかね」

「でも社会がつくられるまえに規範や価値観といったものがあるわけではないでしょう。つくられた社会が維持されるためにはなんらかの規範や共通の価値観といったものがあつたほうがいいということ、そういったものが意識されて社会的なコンセンサスへと固まっていくのではないでしょうか。はじめからこうだと押し付けるのではなくて……」

「とすると、きみはいま、古い社会が減び、新しい社会がつくられつつある状況だという認識にとらわれているわけか」

「そんな大袈裟なことではなくて、社会が変わりつつあるということでしょう

うか。このような時期にはいろいろな考え方をあるだけすべて提示することのほうが重要だと……」

「掃木有平の説もそのひとつというわけかね」

「まあ、もしあのようないことが本当に起るとすれば、それは将来の人間社会を規定する極めて重要な外的条件のひとつにちがひありませんからね」

「馬鹿々々しい……、人騒がせにもほどがある……」

「そうおっしゃらずに……、あの説は十分検討してみる必要があるんじゃないですか。先生、一度、学会で取り上げて、掃木説の妥当性を追及してみてはどうですか」

受話器を置きかけていた洪一郎に、真田は噓けるように囁いた。

#### 4

日本では、各地で熱波に見舞われ、三八度を超す日が増えた。

今年も、十月になったというのに、全国的に暑い日が続いた。同月の平均気温は全国百四十九観測点すべてで平均を上回った。そのうち、百十六地点で過去の最高記録を更新したという。東日本がことに酷かった。

今年はまだ、大雨も多かった。日本列島にかかった梅雨前線が二つに分かれ、なかなか北上せず、梅雨明けが遅れ気味だった。

台風が近づくと、西日本では決まって集中豪雨となる。短時間で半年分とか、一年分の降雨量となって洪水をもたらす。その影響か、今年の降水量も全国的に平均を上回り、日照時間は平均を下回った。

雨の日でも、風の日でも、三〇度を超すことが珍しくなかった。十月に

なってもその傾向は止まず、月末には台風が発生し、本土上陸を窺う気配だった。

このような異常気象は日本だけではなく、世界のいたるところで発生した。そのせいか「ノアの洪水」再来がにわかに現実味を帯びてきたらしい。

有平の論文は前回のもの比べてかなり地味なたちでまとめられ、それはまるで解説に近いものだったのにもかかわらず、大きな反響を呼んだ。

前の予測的論文のことを憶えていたマスコミの取材攻勢は凄まじかった。いくつものテレビ局から生番組への出演が求められた。これがきっかけとなって、Aテレビから夜光雲についての特集番組を組む話が出た。

「今回の特集は『ノアの大洪水』再来をメインテーマに組みたいのです。

どうしてこのようなことが考えられるのか、そのときに起こるか、といったことを中心に映像化していきたいと考えているところです。解説を先生には是非お願いしたいのです」

A テレビ局科学情報担当ディレクター 曲木羊一だ。

有平は受け取った名刺をしげしげと見た。それから徐に顔を上げた。長い頭髪を後ろに束ねた不精ひげの男の威圧するような三角に尖った目とぶつかった。

「マスコミはいつも結果だけを取り上げたがるんですね」

有平はテレビの生番組にでたとき、何度も「いつ『ノアの大洪水』がくるのですか」と訊ねられたことを思い出しながら、不満をぶつける。

「……………」

曲木は口を固く結んだまま、尖った非難するような目で有平の目をじっと見ている。

「地球の現象を見るときは、分野別に地球を細かく分けて見るのではなく、

地球を宇宙のなかで諸々の関係のもとに存在する時間の流れのなかで、ひとつの全体として見ることがとくに重要なのです。一つの結果と考えられることでも、それは綿々と繋がる現象のその一つの局面にすぎないということですよ」

「それは物理現象としてはそうでしょうが……、われわれにはどのようなことが起こり、それによってどのような影響を被るかということに関心があるわけです。聴視者の関心がありそうな問題をテレビ映像としてそれをいかに表現できるか、それによって視聴者の関心をどのようにして引き留めるかが問題のすべてです。この点を考えると、どうしても結果本位の映像を重ねることになってしまうわけですよ」

「映像表現の方法論はそれとして、『ノアの大洪水』の再来をテーマにするにしても、再来した『ノアの大洪水』を問題にするのではなく、再来するまでのプロセスもそれにおとらず重要な問題なのです。たとえば地球温暖化のような問題でも、社会の関心は何年後に地球上の平均気温が何度上昇するといったことに目がいきがちで、それにいたるプロセスについてはあまり関心もたれない。実際には、温暖化の過程において発生する異常気象のほうがかつては重大な影響をおよぼすというのに……。それにプロセスを理解できなければ、それを防止するための対策に対する理解も進まないはずですよ。現在、対策に対して社会がほとんど関心を持たないのも、マスコミの取り上げ方に大いに関係があると思うのです」

「なぜ科学者ははっきりものを言おうとしないのですか。いつも曖昧な言い方……、というより、個々の出来事を科学的に詳しく予測できないからでは……」

「まだまだ分からないことが沢山あることは事実です。でも最近、地球に

ついでの研究が強力に進められて、以前に比べ、かなりのことが分かってきています。といっても、一般に、実証的な研究よりも予測ということに対して冷淡なことも事実ですね。とにかく、結果だけを唐突の取り上げて、恐怖心を煽ろうとするマスコミ流のやり方は問題の把握に役立たないばかりでなく、問題の本質を誤解させることになりかねない」

「……………」

無精髭が半信半疑といった妙な目つきをして、有平を一瞥した。

「温暖化によって、ある地域の気候帯が温帯から亜熱帯に変わると、それに応じて植物生態系も温帯のものから亜熱帯のものへと変遷することになるわけですが、その過程で温帯の植物の多くが枯れ、生態系そのものが崩壊してしまい、そのあとで亜熱帯の植生に生まれ変わっていくのです。これには長い時間が必要です。ですから、極端なことを言えば、まへの植生がダメになって、新しい植生に変わるまでの間、人間の手を加えないかぎり、これといった緑の樹木や植物が見当たらない、枯れた木々が林立する荒れた土地のまままで放置されることになるでしょう。それに温暖化だけが独立しているわけではありません。温暖化とオゾン層破壊が密接に関係しているのに、これを切り離している。これはオゾン層破壊に限ったことではなく、その他の地球環境問題とも直接間接関係しているのです。この辺のところを無視しているようで気になるところですが……………」

「分かりました。それではできるだけ個々の面にも触れることにして、夜光雲と関連させて『ノアの大洪水』にいたるプロセスをシミュレートする構成でいかがですか」

「どんなシナリオを描くかですね」

「先生の書かれたものを参考にして作ってみます。それに手を入れていた

だいて完成させることにしてはどうでしょう」

腕時計を見ながら、無精髭は返事も待たず、肩まで伸びた黒い長い髪を翻すようにして出ていった。

テレビの特集番組作りは結構時間のかかるものであった。テレビ局の人が有平のもとに忘れたころにやってくるといった調子で番組作りがつづけられていた。なんでも来年の正月に放映を予定しているという話だった。

「ノアの大洪水」が再来するとしても今日明日といったことでないし、学会は相変わらず際もの扱いしてそっぽを向いていた。そのせいか、時が経つにつれて、他のテレビや新聞などのマスコミの動きも鈍くなり、当のテレビ局にも急いで放映しなければ他に先きを越されるという心配がなかったのだ。

## 5

年が明けて、テレビの特集が放映されても、なぜか日本国内では意外なほど反響がなかった。景気の回復がまだ本調子でなく、どこかに不安材料が潜んでいそうな感じがしているのか、人びとの多くは今日明日のことしか念頭になく、十年先や二十年先にどうなるという問題には全く関心がないらしい。

しかし、地球温暖化は予想を超えて急激に進んでいたし、大気中にオゾン層を破壊する塩素を含むフロン濃度が減りはじめても、オゾン層におけるオゾン層の破壊が止まらなかつた。これらの影響を受けてか、社会システムは誰も気づかない深いところで変化しはじめていた。

また、誰も明確に気づいていなかったが、なかなか回復しない景気もとを糺せば、人びとの社会行動に対する意識構造が微妙に変化しはじめたことと無関係ではなかった。

こんなとき、有平の「ノアの大洪水」再来論が、アメリカで編集されている週刊誌の国際版で紹介された。このことが意外な展開を見せた。彼の予測が国際的に反響を呼び、多くの人びとの注目を浴びるようになったのだ。

「ノアの大洪水」再来論に関する論文が国際的な専門誌にも登場するようになって、彼のもとにも国際学会での講演依頼や招聘が相次ぎ、国際的規模で論争が巻き起こった。こうなるといまままで無関心を粧っていた日本の学会や行政に動きが出た。

実のところ、週刊誌の国際版や専門誌を読んだ若手官僚が動きの鈍い学会や大学教授に業を煮やして問い合わせてきたのだった。

気象学会など専門の学会の腰は重かったが、大洪水で影響を受ける農業や河川などに関係する学会がこの問題を取り上げた。だが洪一郎が会長している学会はいまなお「ノアの大洪水」再来論を無視していた。

「先生、大田先生」

振り向くと、見覚えのある若い男が人なつっこい笑顔を浮かべて急ぎ足で近づいた。男は開放されているドアから廊下を通りすぎていく洪一郎の姿を見つけて、執務室を飛び出してきたらしい。

「えーと、きみか……」

名前が出てこない。洪一郎は男を知っているふうには振る舞いながら、目のまえに突っ立っているワイシャツの袖を無造作に捲り上げた男の名前を思い出そうと焦った。

「ダムや堤防の基準の見直しが必要になるでしょうか」

若い男は相変わらず、全く屈託ない。洪一郎の気持ちなど一切お構いなしだ。彼はふと、この男は自分と有平との関係を本当に知らないのかもしれないと思った。それにしても、馴れ馴れしく声を掛けてくるところを見ると、ゼミの学生だったのか。それとも……。

「基準？ なんの基準をどう見直すというんだね？」

「最近では異常気象が頻発していますし、それに『ノアの大洪水』の再来も近いとかいわれているようですから……」

「きみまでがそんなふうにいるのか……」

「ええ……、それで先生の委員会一度検討していただくのか、と課長と話していたところでした……」

洪一郎の目の前のワイシャツの男が、突然し省の委員会で事務局の席に座っている背広姿の草壁課長補佐と二重写しになった。

「それで省内の方針は……」

各省庁は政策を推進するために外部の学識経験者で構成する委員会を多用する。といっても委員会を開催するときにはすでにその政策に対する省庁内の方針が決まっており、委員会の開催は儀礼にもた形式にすぎないことが多い。

ことに省庁間や担当課間で事前の調整が必要な案件ではこの傾向がとくに強い。強いて委員会の役割を上げるとすれば、当該政策にいわばお墨付を与えることといってよい。これはまた政策の失敗の際の責任逃れのためでもある。

「詳しい打ち合わせは研究室にお訪ねしてやらせてもらいますが、お時間をいただければ、いまちょっとお耳に入れて置きたいことがあるのですが

……」

草壁は洪一郎の顔色を窺うような目をした。

「いいですよ、短時間であれば」

「では、上の会議室で課長からお話しさせていただきます」

草壁は洪一郎を一階上に会議室に案内すると、室の隅にある電話に近づき、受話器を取った。

「只今、課長が参りますが、実は、まだ省内の調整がまだ済んでいないのです。これを済ませてから委員会を開催するようにすればいいのですが、そのまえに先生にお願いしておきたいことがあるのです」

6

「もしもし……、マユちゃんは元気？」

一瞬、有平は間違い電話かと思った。

「今度上京するときは、是非連れてきてね。兄もとても会いたがっているよ」

「あ、叔母さん……、ですね」

洪一郎の妹清子だった。兄そっくりの大きく角張った顔付きで、彼女の言い方にはどことなくひとを突き放すようなところがあった。それがわざわざいしたのか、夫や姑との折り合いがしっくりいかず、結婚早々、自分から婚家を飛び出したのだった。

清子が実家に戻っていたとき、洪一郎の妻和子が生まれたばかりの真知を残して亡くなった。彼女は自然に真知の世話をすることになった。

清子は真知に対して生まれたときから母親代わりのつもりだったが、子を産んだことも育てたこともない彼女は真知に対して親というより姉妹のように接した。このような清子の態度が真知にいつも母親がいなくても思い知らせた。このことが、洪一郎が留守がちで、まるで孤児のような家庭にあつて、真知を忍耐強い芯の強い子に育てた。

「近々上京するんでしょう」

「え？」

「兄がそんなことを誰かに電話していたそうよ。有平さん、いつ上京なさるの」

清子はぼんぼんと言う。彼女はいまも親が残した本郷の大きな古い屋敷に洪一郎と一緒に住んでいるが、二人はめったに話すこともないらしい。

「なにも聞いていませんが……」

「なんでも学術会議で招聘するとかという話のようよ、まだ先のことかしら。でもこんどは、どうしても真有を連れてくるんですよ。いいですね。会議中はわたしが預かってあげるから」

有平は清子の押し付けるような言い方にむっとしたが、ふと、彼女の言う通りにしてみようかとも思った。

彼は何年もの間、真有を一度も洪一郎のところに連れていかないでいることになんとなく後ろめたさを感じていた。真知が生きていたなら、こんなこともなかっただろうが、彼一人では真有を連れていくといってもなんとなく抵抗があつて、なかなかそんな気にならなかった。

「そうですね。まあ、こんど機会があつたら、そうさせていただきますしよ」

「そうするのですよ」

清子は何度も念を押してから、電話を切った。

真有を清子に預けて本当に大丈夫だろうか。彼は受話器をもったまま、電話台の側にしばらく佇んでいた。

有平は哺乳ビンとミルクと魔法瓶のお湯を抱え、紙おむつとお尻を拭くナプキンをもって、どこへいくにも真有を連れていった。米国に出かけたときも真有を連れて飛行機に乗った。

四才になった真有はもう哺乳ビンやミルクもいらぬ。紙おむつとお尻を拭くナプキンもなくて済む。

清子に預けて大丈夫だろうか。真知はどう思うだろうか。

突然、彼は真有を奪われ、唯ひとり人気がない陽が落ちた荒野を彷徨う自分の姿を見たような気がした。

有平は不安に駆られた。胸が締め付けられ、いいようのない寂しさが彼を襲った。

7

「真有が来るわよ」

朝食を終え、新聞を広げていた洪一郎は、一瞬、短い太い首をねじ曲げ、大きな顔を清子に向けたが、口を閉ざしたまま、すぐ紙面に目を戻す。

清子は軀つきや顔かたちが洪一郎と似ていて、大きな顔もそっくりだった。だが、二人の考え方は全然違った。洪一郎は権力指向の現実家であるが、清子は曲がったことが嫌いで、一度言い出したら決して後に引かない頑固さと気の強いところがあった。

洪一郎はそんな清子が大の苦手だった。大体、顔の大きい女は彼の好みでなかった。それに清子の話し方は決して理路整然としているわけでもないのに、一方的に喋る話がいつのまにかもつともらしく聞こえ出し、いつもなんとなく丸め込まれてしまうのだった。真知が有平と結婚するといつたときも、次第に清子のペースに巻き込まれ、いつのまにかふたりの結婚を黙認した格好になってしまった。

その結果が有平に最愛のひとり娘真知を略奪されたうえに生命を奪われ、たったひとり残された真知の形見の真有までが連れ去られてしまったのだ。

それ以来、洪一郎は清子が話し出すと、早々に耳に栓をしてしまう。清子の声が高まると、一層強く耳栓を押し込む。

「こんど上京するとき、連れてくるそうよ」

「……………」

一瞬、ドキツとした。洪一郎は聞こえないふりをする。

「会議はいつですか」

清子は追い討ちを掛けるように言う。

「なんの会議のことだ」

「有平さん呼び出す会議のことですよ」

洪一郎はまた通いの家政婦が電話を立ち聞きしていたにちがいないと思っ

た。

「お茂さんから聞いたんじゃないやありませんよ」

清子は決して洪一郎の顔を見ようとしぬ。見なくとも彼女には洪一郎の心のなかが読めるらしい。

「有平さんとは顔を合わせないようにしてくださいね。顔を合わせたら、兄さんのことだから、ただでは済まないでしょうから」

そんなことは言われなくとも、会うもんか。あんな奴の顔なんか見たくもない。誰がなんと言おうと、有平と顔を合わせるものか、と洪一郎は心中深く誓う。

「真有を預かうことができたらいいわね……、ねえ、兄さん。有平さんが遠いところに長期間出張することはないのかしら。アラスカとか北欧とか。寒いところだったら、真有を連れていくとはいわないでしょう。でも北海道とそう変わらないかしらね」

そのとき、洪一郎は悪魔の声を聞いたような気がした。

清子の声を聞き流しながら、彼は家を離れるまで真知の席だった隣の椅子に目をやり、心のなかでしきりにプランを練った。有平を南極か北極に缶詰にすることができないだろうか。南極か北極だったら、たとえ短期間でもよもや真有を連れていくとは言えない。

洪一郎はいまでも隣の椅子に真知が座っているような気がする。その椅子に真有が座るのだ。

真有とは生まれて間もなく別れて以来、彼は四年近くも会っていない。彼の心のなかで、真有が真知そっくりに育っていた。今度は真有を有平の手から奪う番だ。

洪一郎は自分の隣の椅子に座っている真知そっくりな真有を思い浮かべた。なんとなく心のなかを満たされていくような気がした。

「真有を取り戻そう」

突然、洪一郎の口から飛び出した。

一瞬、目を見張った清子は、やがて顔一面に笑みを浮かべ大きく頷いた。

「掃木君、柿本です」

受話器の奥から響いてくる同じ研究室仲間だった男の改まった声を耳にした瞬間、有平は柿本が彼の後釜を狙っているという噂を思い出した。

有平が講座を引き継ぐことが決まったとき、柿本は研究室を出た。いま私学の教授をしているが、有平が研究室を去ったあと、しきりに母校に戻る運動をしているという。だがまだ実現していなかった。

「久しぶり、お元気？」

「相変わらず……」

柿本も調子を合わせるように言う。だがあとの言葉が続かない。

「で、なにか特別のことでも……」

有平は縁無ししの眼鏡の奥で目をそらし、言いくそうにしている柿本の姿を思い浮かべた。そのとき、ふと、有平はもしかすると、清子が言っていた学術会議の件かもしれないと感じた。

「実は、いま、気象学会の幹事をやらされているんだ。そこで当学会の会員であるきみへの連絡係を仰せつかったんだが……。実は、学術会議の環境連合部会がきみのお説を拝聴したい、と言っている」

「そお、でもなぜ学術会議の環境連合部会なんだね」

「きみの話は学術的だから、関係する学会が集まっているほうが都合だということらしい」

学術会議の環境連合部会は学術会議に所属する環境に関する学会が横の連絡を密にするためにつくられた組織だった。

「そうかね。ちょっと怪しいが、まあいいか」

「受けるんだな。断わらないんだね」

「おい、断われというのか」

「いや、あとで恨まれるのも厭だからさ。なにしろ……」

「なんだ、それは」

「実は……、こう言っってはなんだが、この会はきみのお説をおとなしく拝聴しようというものではないらしい……」

「……………」

「とにかく、きみの説に異論をもつ論客を集めて議論させようとしている。社会に不安を与えるような言説をこの際徹底的に糾弾しようと構えている感じだ」

「いままで見向きもしなかったのに、どうした風の吹き回しかね。一体、誰が策動しているんだ」

「さあ、ねえ……、おれから言うのも……」

「奥歯に物を挟んだようなことを言わずに、知っているならばはっきり言ってくれ」

「とにかく言い難いな……」

「まあ、いい。受けて立とうじゃないか。学術会議なら、不足はない」

「ほんとにいいのか。勝っても負けても、どっちにしろ、学界には居ずらくなるかもしれないぞ」

有平は縁無し眼鏡のレンズの奥で陰険に光る柿本の小さな目を思い浮かべながら、「おれに会議出席を断わってほしいのか」と言おうとして、口を抑えた。

もしおれが学術会議の要請を断われれば、自ら自分の説の非を認めてそうしたと言ひ広められることだろう。そうすれば誰も傷つかずにおれを学界

から葬り去ることが出来るからな。柿本にしてもおれに恨まれずに済むし、またおれを邪魔扱いして葬り去ろうと策動している学界のお偉方の顔を立てることもできるというわけだ。

「そうかね。かといって、断わればどうなる。あの説はデタラメだったということになるのじゃないの」

「……………」

「公開でやるんだらうから、いいチャンスだよ。受けて立つよ。インターネットで全世界に向けてやってもいいよ」

「……ほんとに受けるのか」

「いいよ。お安いご用だ」

「……実は、大田教授もこの件の提案者のひとりなんだが……。むしろ主発案者といっている。こんなことをおれの口から言いたくなかったが、まあ、はじめから何事もはっきりしておいたほうがいいだらうからな」

「……………」

清子の話からなんとなく予想できないことではなかったが、柿本の口からはっきり言われてみると、なんともいえずシヨックだった。

「じゃ、明日、学術会議の事務局に正式の招聘状を送るように手続きをするけど、それまで気が変わったら電話してくれ」

有平は柿本の声を上の空で聞いた。

洪一郎が自分を葬り去ろうと策動しているとは、にわかに信じることが

できなかった。真知が死んだとはいえ、真知の子真有が育っており、洪一郎はまがりなりにも真有の祖父ではないか。

確信をもてぬまま、有平はとつくに切れてしまっている受話器を耳から放して、そっと返した。

有平は机に肘を付き、腕を立て、そのうえで顎を乗せ、もう一度、柿本の電話を思い浮かべた。しかし、いくら考えても、いい考えが浮かばなかった。彼はどう対応したらいいのか、迷った。

もし学会の招聘を断れば、自ら自説に対する自信なさを認めることになりかねない。かといって招聘を受けて出なければ、柿本が案じていたように、嫌がらせや中傷に満ちた質問や言い掛かりが待っていることは分かり切っていた。

にっちもさっちもいかないとは、こんなことかと思った。まさに「前門の虎、後門の狼」といったところか。それにしてもうまく仕組んだものだ。

攻めようにも攻められないし、かいつて、逃げようにも逃げられない。有平は自嘲気味に顔をゆがめ、自分の置かれている立場を想像した。

それにしても、こんな策動を洪一郎がしているのだろうか。もしそうなら、清子がなぜわざわざあんな電話をしてきたのだろうか。彼にはこの点も分からないことだった。

有平は議論を避けたいとは思っていなかった。大いに議論を闘わせ、自説をさらに深めたかった。だが日本の多くの学会は研究成果の発表の場であっても、議論の場ではなかった。というより、まともな議論が一切できないところだった。

公開の研究発表会場では学問的な討論はおろか、ろくな質問さえおこなわれることがない。老大家には間違いの指摘すらなされない。発表者に公

開の場で恥をかかせてはならないし、もしそんなことをしたら仕返しを覚悟しなければならぬ。なにこともフランクにはいかないのだ。たとえ事実の発見を対象とする科学理論でさえ、発見者から離れて理論だけが議論の対象とされることは滅多にない。発見者の肩書きや経歴がものをいい、日頃の言動や行いすらチェックされてしまう。

こんな学会の実情を熟知している洪一郎は、学会会議の場を借り、いくつかの関連学会を集めて合同の討論会を開けば、有平の説に対する他の学会から徹底的な批判が期待できると踏んでいるのだろうか。同じ学会の会員でなければ、批判し易いし、専門が違えば、中傷まがいでお門違いの質問でも発言者は恥をかかないで済むというのか。

とにかく、関連学会の合同討論会は目障りな説や反対説をいびり、やつつけ、葬り去るには格好な場だということか。

有平はできれば招聘を断わりたかった。真有を連れて、わざわざそんなところに出たくなかった。

建設的なことはなにひとつ期待できない会合におめおめと出かける気がしなかったし、また洪一郎とさらに争うことになることも好まなかった。かといって、学会会議の招聘を断れば、すべての学会が彼の説をまとも扱わなくなるだろう。

いや、彼の説だけではなく、彼自身を誰も相手にしなくなるにちがいない。考えれば考えれるほど、彼はジレンマに落ち込み、がんじがらめになっていく自分を感じた。

ふと、有平は真知ならどう考えるだろうかと思った。父想いの真知は有平が洪一郎と対立することは望まなかった。とはいっても、見かけよりも芯の強い彼女なら、多分、父親であろうと、著明な大学教授の洪一郎と言

えども、理が通らなければ敢然と立ち向かうことだろう。

ふと彼は、洪一郎が掛けた毘に自らわが身を投じてみようかと思った。

10

「只今、ご紹介にあずかりました気象学会の掃木有平です。最初に、小生の拙い研究についてお話しする機会を与えてくださった学術会議に感謝いたしますとともに、はなはだ光栄に存じます」

有平は中央のスクリーンを挟んで、同じ壇上の反対側にある司会席に座っている眼鏡を掛けた小柄な男に顔を向け、軽く会釈すると、ポケットからハンカチを取りだし、額の汗と口の回りを拭いた。

古垣というごま塩頭の司会者ははじめて見る顔だった。大手新聞社の現役の論説委員だという。

いつもなら講演者が所属する学会の幹事役が司会をすることが多かった。今日の司会者もどうせ顔見知りの仲間のひとりかやるのだろうと勝手に思い、有平は午後一時からはじまる講演会の会場である学術会議の建物にぎりぎりに滑り込んだ。控え室の隅で小さくなって、いまだき珍しくタバコを吸っているごま塩頭の男を見たが、彼はろくに挨拶も交わさなかった。有平には講演がはじまるまえにやっておくべきことがあった。彼は真有の手を引いてトイレに入った。トイレを済ませてから、受付の女子のところに連れていき、講演中に世話になるかもしれないことを告げて、真有のことをお願いしなければならなかった。

真有は有平の講演中、大概会場で一人でおとなしくしていた。生後三ヶ

月を過ぎたころから保育園の世話になっていたので、人見知りすることもなかったし、ひとりりで遊ぶことにも慣れていた。でも万が一、ひとりで遊ぶことに飽きて、大声を出すようなことがないともかぎらない。

「マユ、座っているのが厭になったら、このドアから外に出て、お姉さんのところでパパを待っているんだよ。マユが席を立ったら、パパもお話を終わりにして、すぐ迎えに行くからね」

有平はよく見えるように、最前列の端の席に真有を座らせた。

「うん。マユ、椅子でパパを待っている」

真有は両手でアームをしっかりと掴み、小さな足をちょこんと伸ばして偉そうな格好で座っている。彼は真有に笑顔を向けて、話を続けた。

「只今、司会者から『ノアの大洪水』が再来するというが、夜光雲が現れるとなぜ大洪水となるのか詳しく説明せよというリクエストがありました」  
講堂は演壇を底にして階段席が半円の播り鉢状の周りに馬蹄形に広がっている。いつもなら最前列の席に座る聴講者は疎らで、そこには主催側の関係者が二、三の席を占めているにすぎない。だが今回は違っていた。各学会の幹事役や代表的なうさ型の論客が迫り出すように最前列に顔を並べ、まるで査問委員会のような雰囲気をもたらし出している。

真有の席とは反対の端のほうの座席に、柿本の顔があった。彼の目はこれから起きることをなにとつ見逃すまいとしているかのように、好奇心に満ちて光っている。

有平はもう一度最前列の席の真正面に視線を返し、ふたたび一人ひとりに目を移していく。だがそこにはこの会の仕掛け人だという洪一郎の顔はなかった。

ふと洪一郎がまるで播り鉢の底を覗き込むように、階段席の最上段から

演壇の自分を覗き込んでいるような気がした。彼は顔を上げ、そそり立つ階段席を見上げた。

「『ノアの洪水』のことについては、これまで方々で書いたり、何度も話してきたことですので、ここでは省略させていただきたいと考えていたところですが、でも只今、司会者から強いリクエストがありましたので、最初に、ごく簡単に、そのメカニズムについて話すことにいたします」

大学教授や研究者のなかには、ひとの説の受け売りや二番煎じにすぎないものをあたかも自分が言い出したかのように臆面もなく吹聴するものもいれば、毎年同じ講義を繰り返しても苦にならない人もいる。だが有平にはそんなことは能力がない者のやることだという思いが強かった。たとえ自分で考えたことでも同じことを繰り返して話すのは苦手だった。同じことを繰り返すのは退屈で、耐え難いことだった。この点でも彼は大学教授向きではなかった。

司会者はさらに難しい注文をした。専門分野の異なるひとや一般の方も大勢参加しているので、夜光雲がなぜ「ノアの洪水」を招くことになるのか、専門外の人々にも分かるように話してほしいとも言う。こんなことは聞いていなかった。合同学会とはいえ、学会ではないか。いやしくも学会である以上、専門用語で話してどこがわるい。それもだめというなら、どうすればいいんだ。

有平はどんなふうにも切り出せばいいのか迷った。彼は照明をおとした階段講堂のなかで、ひとりスポットライトを浴び、まるで播り鉢の底から出ようともかくように狭い演壇を這えすり回る。

「夜光雲 (noctilucent cloud) は……」と言いかけて、有平は真有のほうに顔を向けた。それに気づいて、真有が胸元で小さな手を小刻みに振った。

「……これまでの観測記録によると……、上空八〇キロメートルから八五キロメートル付近に集中して二キロメートルほどの厚さに形成される薄い巻雲状の雲で、緯度五〇度から六五度にかけて夏季に見られるものです」

地球の半径は約六三七〇キロメートルである。表面は陸地と海洋で覆われているが、その地球をさらに大気を取り巻いている。これが大気圏で、上層大気、中層大気、下層大気の三層に分かれ、上層大気は高度八〇キロメートル以上で、熱圏と呼ばれる。中層大気は高度一〇キロメートル前後から八〇キロメートルの範囲をいい、ここは二つに区分され、低いほうが成層圏（一〇から五〇キロメートル）、高いほうが中間圏（五〇から八〇キロメートル）という。下層大気は高度ゼロから約一〇キロメートルの範囲で、ここは対流圏と呼ばれる。対流圏、成層圏、中間圏、熱圏の順で、高度が増すほど大気密度が減少し、次第に大気が薄くなっていくが、それぞれの境には圏界面が形成されている。すなわち、対流圏と成層圏の境に対流圏界面があり、成層圏と中間圏の境に成層圏界面がある。中間圏と熱圏の境に中間圏界面があって、それぞれが独自の動きや構造をもつ。たとえば、対流圏には大気の質量のほとんどが集中して存在し、大気がつねに対流しているが、一方、成層圏ではオゾン層、エアロゾル層など水平方向に広がる層構造ができています。

対流圏を通り抜け、成層圏に上昇してきた水蒸気が、さらに上昇して中間圏の上層部で氷結して氷晶化し、粒子状の氷片になり、氷の雲が形成される。この氷の雲が薄明時に地平線に没した太陽の光線を斜めから受け、光り輝くのだ。これが夜光雲である。

「このようにして形成される夜光雲が『ノアの大洪水』をもたらすことになるのですが、どうしてそのように考えられるのかについてお話しするま

えに、ノアが直面した『(ノアの)大洪水』について簡単に触れておきましょう」

旧約聖書の創世記によると、西暦前三三七〇年に凄まじい大洪水が起きて翌年の西暦前三三六九年までつづき、大洪水が全地球を覆い尽くしたという。人類と動物が壊滅する被害を受けた。

「四十日四十夜」絶え間なく奔流のような豪雨が降り、大洪水となって百五十日間「水は地にみなぎっていました」(創世記七：四、十一、十二、二十四)。「水は地に大いに漲って、全天下の高い山々がことごとく覆われるようになった。水はそれらの上一五キュビット(約六・五メートル)にまで漲り、山々は覆われた」(創世記 七：十九、二十)というのだ。

ノア (Noah) は西暦前二九七〇年生まれた。神から大洪水襲来の警告を受け、彼は五〇年から六〇年を費やして、自分の家の者たちを大洪水から救うために箱船を建造する。

洪水を引き起す豪雨が降り始める七日前に、神の指示に従い、動物を集めて箱船に入れる。大洪水の直前、ノアたちが箱船に入り、神(エホバ)が後ろの戸を閉めた。ノアは箱船のなかで、重要な出来事を航海日誌に正確に書き留めたという。

豪雨が降り始めてから五ヶ月後に、箱船は「アララトの山にとどまった」。「山々の頂きが現われた」のは、それから二ヶ月半近く経ったときであり、ノアが箱船の覆いを取りのけ、地面から水が引けているかどうか見たのは、それからさらに三ヶ月後であった(創世記 八：十三)。生き残った人びとが再び乾いた地面を踏んだのは、それからさらに二ヶ月近く経ったときだった(創世記 八：十四〜十八)。要するに、ノアとその家族が箱船を出たのは箱船に入ってから丁度二年後であった。

「ノアの大洪水」発生メカニズムについては、創世記には「神が天空を造り、そして神が天空の水門を開き、大洪水を起こされた」が書かれているだけで、どのようにして天空に大量の水が運ばれたのか、そして水門とはどんなものか、その開閉のメカニズムはどのようものかに関しては何にも触れていない。

「まあ、聖書では『天空の水門』が突然開かれて『ノアの大洪水』が発生したようですが、では、全世界を水浸しにするような大量の水をどのようにして天空へ運び、そこに溜められたというのでしょうか」

有平は目上げて、階段席を見回した。

11

「清子か。有平が真有を連れてきている」

「どこにいるの、真有ちゃんは……」

「ここにいる」

「お兄さんのどこにいるの」

「そうじゃない。学術会議の講堂にいるんだ。有平が講演している会場だ」

「まあ、真有がひとりで……」

「一番前の席で、おとなしく話を聞いている」

「そお、わたしがこれから迎えに行くわ」

「おい……」

洪一郎は血相を変えて飛び込んでくるにちがいない清子を思い浮かべた。いささか後悔の念に囚われながら、彼は切れてしまった携帯を耳に付けた

まま、しばらく廊下の片隅に立ち尽くしていた。

洪一郎はこのまま会館の玄関で清子を待たたほうがいいのか、それとも彼女が到着するところを見計らって玄関に出たほうがいいのか、迷った。彼は考えあぐねて、玄関ホールを歩きつ戻りつした。彼は講演会の受付係の女子事務員のもの珍しそうな目に気付いて、近づいていった。

「すまんが……」

若い受付係りが洪一郎に笑顔を向けた。

「年配の女の人が訪ねてきたら、呼んでくれませんか。わたしはその扉のすぐ近くの席にいますから」

「はい、分かりました。失礼ですが……」

「丁大の大田です」

「土木工学会の大田先生ですね。承知しました」

洪一郎は空いている席に腰を下ろすと、虚ろな目で挿り鉢の底を見下ろした。有平がしきりに口を動かしているが、彼の耳にはなにも入らなかった。彼は清子が小走りで大通りに出て、タクシーに乗り込む姿を想像した。

清子はきつと、運転手に「急いで頂戴」と全力疾走を命じることだろう。

三十分が過ぎた。清子はまだ姿を現わさない。洪滞に巻き込まれているのだろうか。車の中でいらいらしてる清子が浮かぶ。

清子よりも洪一郎のほうが苛々していた。

洪一郎は身を乗り出して真有の席を覗く。小さな後頭部しか見えず、真有が眠っているのか、それとも起きて有平を見ているのか、よく分からなかった。

ふと戸惑いを覚えた。

一体、清子がここに来てどうするつもりなのだろうか。有平に黙って真

有を連れ出すつもりなのか。真有ははじめて会う清子におとなしくついていくだろうか。真有が泣き出したり、嫌々したら、どうする気か。

洪一郎は落ち着かなかった。何度も振り返り、出入れ口の扉が開かれな

いか、じつと見守っていた。

洪一郎は待ちくたびれてうとうとしていると、不意に肩を叩かれた。振り返ると、清子の顔が耳元にあった。

「真有はどこ？」

洪一郎は目だけ動かし、真有が座っている席のほうを指差した。

「まあ、あんなところに座らせて……、眠っているのかしら」

清子は身を屈めたまま、通路の階段を下りていく。

「おい、どこへ行く」と言い掛けて、洪一郎は言葉を飲み込んだ。彼が立ち上がって声を掛けようとしたとき、清子はすでに階段を途中まで下りていた。

1 2

突然、天から舞下りるように現われた清子が眠っている真有を軽々と抱きかかえた。いつものように、真有は眠ったまま大きな伸びをすると、今度は清子の腕のなかで身体を小さく丸めた。

清子は大きな顔を寄せ、いとおしそうに腕のなかの真有に頼ずりすると、演壇で呆然としている有平に軽く会釈して近くの出口に向かう。

一瞬の出来事だった。

有平は話に夢中になっていて、清子が講堂に入ってきたことも、通路の

階段を下りて真有の席に近づいてきたことさえも気付かなかった。彼女に気付いたときには真有が抱えられていた。彼は啞然として清子の後ろ姿を見送った。

有平は急いで話を終り、一方的に、司会者に休憩を求めた。古垣は一瞬呆気にとられた顔をしたが、すぐ事情を飲み込んだようだった。

「掃木先生に急用が出来たようですので、ここで十分間休憩します。三時に再開して、先生につづきがあればお話ししていただきますが、時間の関係上、すぐ質疑に入らせていただくことになるかもしれません。質疑応答を効率良く進めるために、質問のある方は事前に質問の要旨をお配りした用紙にご記入のうえ……」

司会者は事前の打ち合わせがあったように、質問者とおぼしきひとを確認するように、フロアーをゆっくり見回す。

有平は司会者が話し終えるのをもどかし気に待っていたが、とうとう待切れなくなつて、司会者が話し終えるまえに出口に向かった。廊下には真有の姿はなかった。彼は玄関ホールへの階段を駆け上がった。

受付の女子事務員が有平の姿を見付け、「掃木先生、これをお預かりしています」と言つて、小さなメモ用紙を手渡した。

「その方はお嬢ちゃんを連れて、待たせていたタクシーに乗って行かれました」

受付の女子事務員はメモを見てどうしようか迷っている有平に追い討ちをかけるように言う。彼は礼を言つて離れ、時計を見た。もうすぐ休憩時間が終わるところだ。

一瞬、このままタクシーを拾つて清子を追い掛けようかと思った。だが、なぜか一瞬躊躇い、ついに思い止まってしまった。

このときが運命の分かれ道だった。後で、有平はあの躊躇いはなんだったのか、何度も自分に問い糺した。講演者としての義務感が途中放棄を許さなかったのだろうか。だが必死の思いで育て上げたひとり娘の真有が奪われるというとき、そんな悠長なことを言つておられるだろうか。ここらどこかに、真有を清子に託してもいいという思いがあったのではないか。彼はどうしても自分を責めずにいることができなかった。

## 13

有平が遅れて講演会場に戻ると、照明が戻り、階段講堂の雰囲気が一変していた。

小柄な司会者が大きなジェスチャーを交えて話している。これからはじまるであろう激しい論争を楽しんでいるような雰囲気さえあった。

「質疑に入る前に、誤解がないように、ここでもう一度、只今お話し頂いた『ノアの大洪水』再来のメカニズムを整理しておきましょう」

司会者は以下のように、有平の話した内容をまとめた。

- ・対流圏に人間活動による二酸化炭素等の大量放出などにより二酸化炭素やメタンなどの温室効果ガスが増加しており、その影響で地球が急激に温暖化しつつある。

- ・温暖化によって海水温が上昇すると、海水の蒸発量が増えるとともに、温室効果ガスの一つである二酸化炭素の海水への溶解（吸収）が減り、逆に、海水に溶解していた二酸化炭素が大気中に放出してくるようになる。

また降水量の増加によって湿地帯が広がり、有機物の腐敗が進み、温室効果ガスであるメタンが大量に大気中に放出される。

・こうして大気中に、二酸化炭素、メタン、水蒸気等が増えると、これらの温室効果によって対流圏がさらに温暖化（温暖化の暴走）し、これを繰り返す（温暖化激化の悪循環）。

・対流圏が温暖化すると、それに応じて成層圏やそのうえの中間圏が寒冷化していく。

・海からの蒸発が増え、熱エネルギーを持つ暖かい大量の水蒸気が上昇をつづけ、対流圏界面を破り、成層圏を通り中間圏へと上昇していく。こうして成層圏や中間圏の水蒸気量が増加する。

・成層圏や中間圏に上った水蒸気は、寒冷化している成層圏下部や中間圏上部で氷の雲となって広がっていく。

・成層圏の氷の雲は塩素と接触して広い範囲でオゾン層のオゾンを破壊する。オゾン層のオゾン量減少に応じて、その分、温室効果が減じ、成層圏ではさらに寒冷化が進む。成層圏が寒冷化すれば、逆に、その分、対流圏が温暖化する（温暖化とオゾン層破壊の悪循環）。

・一方、オゾン層の破壊が進めば、地上での有害紫外線が強まり、森林、農作物、植物性プランクトンなどが打撃を受ける。これによって二酸化炭素の吸収が減じる。また枯死した樹木や農作物などが山火事で燃えたり、あるいは腐敗して、二酸化炭素やメタンを放出する。（紫外線の増加によってメタンを分解する化学物質が増えるケースもある）。

・温室効果ガスが増え、温暖化が暴走をつづける一方で、海水温の上昇と植物性プランクトンの壊滅的被害によって海の二酸化炭素吸収能力が大幅に衰える。

・オゾン層の破壊がさら進むと、オゾンホールが地球上空を広く覆い尽くし、地球上に強力な有害紫外線が降り注ぎ、地表の生物生態系が広く破壊される。これによって森林（陸地）やプランクトン（海面）などが大ダメージを受け、二酸化炭素の吸収が決定的に妨げられ、さらに大気中の二酸化炭素などの濃度が高まり、地球の温暖化が急展開していく。こうしてさらに海水温が上昇し、海水の蒸発が一段と進む。

・増加した大量の水蒸気は成層圏からさらに中間圏へと押し上げられて上昇する。その結果、中間圏に氷の雲が次第に増えていく。

・一方、北半球では高緯度での気温上昇が著しく、極地の氷が大量に融け出す。また凍土も溶け、封じ込められていたメタンが大気中へ大量に放出され、温暖化を加速する。

・極地の氷が融けて海面が広がれば、その分、海面からの海水の蒸発量が増える。このため、対流圏を超えて上昇する水蒸気が増え、中間圏に厚い氷の雲が広がっていく。また高緯度での氷の溶融によって淡水が大量に増え、海洋の大循環に影響をおよぼす。これによって低緯度での海水高温化が進み、ここでの海水の蒸発量がさらに増える。

・厚い氷の雲によって太陽光線が極度に散乱し、地上への日照量が減る。それに応じて次第に温暖化が緩和され、じわじわと対流圏が寒冷化していく。

・対流圏の寒冷化が進むと、逆に、成層圏が温暖化していく。ことに成層圏と中間圏の間の成層圏界面付近は比較的気温が高いところであるが、水蒸気の温室効果も手伝って成層圏（上部）の温暖化を進める。

・成層圏（上部）が温暖化すると、中間圏も温暖化して、氷の雲の一部が融け出す。これが引き金となって中間圏全体の氷の雲が引きつられ、雨

粒となって降水に取り込まれていく。あるいは臨界を超えて増えた水の雲はちよつとした衝撃で大きな水滴の塊となり、地上に落下していく。

・この降水は対流圏で雨を降らす雨雲と無関係に生ずるもので、大陸奥地の砂漠にも突然の大雨をもたらし、各地に大洪水を招くことになる。

「掃木先生、このように整理してよろしいですか」

戻ったばかりの有平に向けられた司会者の笑顔に彼は反射的に大きく頷いた。彼は早く講演を終りたかった。初めて会った清子に真有がどんな反応を示しているか、気掛かりだった。真有はおとなしくしているだろうか。

真有は母親ゆずりの芯の強い子であった。滅多に泣くことはなかったが、泣き出したら容易に泣き止まない。我慢に我慢を重ねているのか、堰を切ったように、真有は身体を震わせて激しく泣き続ける。

「現在進行中の気候変動は、アレーとベンダーらが発見した『亜間氷期』におけるものと同様なものと考えておられるのですね」

有平は司会者の説明を上の方で聞いていた。

米国の研究グループが一九九〇年代の初め、グリーンランド中央部の氷床を対象に大深度ボーリングを行った。そのメンバーであったアレーとベンダーらはアイスコアの分析から、過去の気候変動の歴史にみられた氷期と間氷期のほかに、亜氷期と亜間氷期と名づける気候の激変現象を発見した。アレーはペンシルバニア州立大学、ベンダーはプリンストン大学の地球科学の教授で「グリーンランドのアイスコア」に関する論文を「サイエンス」に発表していた。

これによると、亜間氷期は一回が数百年から数千年で終わるごく短期間の現象で、過去一〇万年間では、気温が間氷期と氷期の間あたり

に最も多く出現しているという。そのパターンは、最初急激な温暖化が始まり、気温がピークを迎えると、初めのうちはゆっくりとそして終りに近づくと急激に寒冷化していつて終期をむかえるのだ。

亜間氷期は「突発的」に始まり、「わずか数十年間、ときにはたった数年間で、気温が五℃から一〇℃か、それ以上も上昇する」という。

「『ノアの大洪水』再来のメカニズムを要約すると以上のようになりますが、掃木先生はこのようなメカニズムのもとに、『ノアの大洪水』が早ければ一五年から二〇年先に再来すると予測しております。本日のお話のポイントは『ノアの大洪水』のメカニズムと予測、この二点です」

司会者の古垣は発言中小柄な身体をせわしく動かしていたが、話し終えると顔を有平に向けた。

「先生、なにか補足することはありますか。ありましたらお話し下さい」「とくにありません。補足が必要であれば、ご質問に答えるときに合わせてさせていただきます」

「では質疑に入ることにいたします。段取りよく進めるために、質問者には事前に質問の要旨を提出頂いておりますので、こちらから順番を指定させていただきます。まず、メカニズムについてのものから始めます。それでは不大の青田先生からお願いします」

「わたしがトップバッターですか……」

血の気のない細い顔を上げて、青田はぶつぶつ言うような口調で続ける。

「……べつにメカニズムについてどうこう言うつもりはありませんが、どうもなんとなくもたもたした感じで……。まあ、『ノアの大洪水』再来のメカニズムというが、地球の温暖化をオゾン層破壊が加速し、海水温が上昇して蒸発量が増える、その一部が成層圏を通り中間層に達し、水の雲を

形成する、水の雲が満杯になって溢れてこぼれ落ちる、というだけの話でしよう。『ノアの大洪水』が引き金となって地球の寒冷化がはじまるのは付け足しですかね。とにかく、地球温暖化によって『ノアの大洪水』が引き起こされるかもしれないというだけの話……」

「と言うことは……」

司会者が先を促す。

「……なぜこんなことを『ノアの大洪水』再来だと大袈裟にいうのか……」

「問題提起にもなっていないということですか」

「まあ、それも言えないことはないが……」

「では、掃木先生」

司会者は有平のほうに顔の向きを変える。

「極端に要約してしまうと、そうなるでしょう。『ノアの大洪水』も四六億年にわたる地球の歴史においては取るに足りないひとつのエピソードに過ぎませんから」

有平は早くここから解放されたいという思いでいっぱいだった。日本の学会では質問と称して自分の意見や見解を披瀝したいだけの者が多い。ことに大学教授という種族となると、ひとの意見に耳を傾けることは滅多にない。沽券に関わるとでも思っているのだろうか。こんな種族をまともに相手しては時間がいくらあってもきりが無い。

青田の顯かみがぴゅくと動いた。有平はかまわず続けた。

「ひとつのエピソードに過ぎないものであっても、人類にとって危機的なものもあります。それから……」

有平はふと青田の仕掛けた罠にはまっている自分を感じた。余計なことば言っまいと決めていたのに、ほとぼる感情を断つことができなかった。

「……オゾン層破壊が温暖化を加速すると言われましたが、温暖化とオゾン層破壊が相互に影響し合うので、一方的に、オゾン層破壊が温暖化を加速するものではありません」

地球上に生起するもろもろの事象は単独で独立しているものはひとつもなく、それぞれが相互に依存し影響し合って全体を形づくっているものである。それにもかかわらず、これまでの科学は個々の事象を独立しているものとして扱い、対象ごとに分析を行い、これらを総合すれば全体を表現できると考えてきた。このような考えのもとでは、一方に温暖化という事象があつて、もう一方にオゾン層破壊という事象があるというふうには両者が独立して別々に存在するものと仮定する。両者が関係する場合には、オゾン層破壊が温暖化を加速させるという具合に表現してしまう。だが現実には、温暖化もオゾン層破壊も同じ地球上で同時に混在して生起している事象であり、両者は互いに密接に影響し合い、いわば事象群として存在し、全体を形づくっているのだ。

ここではたまたま温暖化とオゾン層破壊が取り上げられているが、いま地球環境問題といわれているその他の事象、たとえば、酸性雨、海洋汚染、砂漠化、森林破壊、生物種絶滅など、さらに、人類社会の異常現象である人口爆発、食糧不足など、これらはすべて相互に依存し影響し合って全体を形成しているのである。

とにかく、全体を全体としてあるがままの姿を捉えることこそが重要なのだ。全体を個々に分解して、分析し易いようにばらばらに細分化し、これらを対象ごとに個々の精密な分析をおこなうが、一度分析してしまつてから、これらを総合しようとしても、全体を捉えたことにはならない。

有平はこれまで行われてきた近代科学の方法論とは異なる方法論で、も

のごとをできる限り、全体的に捉えるようにしてきた。この思いが彼に青田の発言に対する修正を迫ることになったのだ。だがこれが紛糾のもととなった。

「そんなことより、大体、いまもって、二酸化炭素が二倍になったケースで、地上の気温が平均何度上昇するかについて、一致した解がでていない。これはどういうことか。予測にもちいる気候モデルがまちまちだということでしょう。何十年も研究を続けてきた結果がこのようなことであるとすれば、これらのモデルもまだ単なる仮説の域を出ていないということになるのではないですか。気候変動研究がまだこんな状況なのに、さらに『ノアの大洪水』という異常気象を取り上げるとは仮説のうえに仮説を重ねるようなものだ。まず、さきのケースで平均気温が何度上昇するのか、これをはっきりしてもらいたい。これがはっきりしない以上、『ノアの大洪水』がどうのこうのといわれても俄に信じがたい」

有平は青田がいきり立って捲し立てる様子を興味深げに見ていたが、なにも聞いていなかった。彼には青田が頭から『ノアの大洪水』説を否定しようとしていることが感じられた。彼は返事すらせずに、ただ苦笑を返した。だがこのような彼の態度が火にさらに油を注ぐ結果となった。

「こんな仮説に立って、一五年後に『ノアの大洪水』が再来するとは、これはまさに投機的科学『予言の科学』のなにもでもない。それは危機感を売ものにする売名行為にほかならない」

司会者は手を挙げ、発言者を制してから、「掃木先生、なにかありませんか」と発言を促す。

有平は口を開く気がしなかった。

「掃木先生……」

司会者はしつこく有平に返答を求める。

「……とくに答えることもないと思いますが……、とにかく、気候変動研究が現在どのような状況にあるかということ、わたしの研究とはなんら関係はありませんが、地上の気温が平均何度上昇するかが確定できなければ、異常気象に関する研究が無意味だとは思いません。たとえば、記録的な異常寒波が三日間続いても、その後、記録的な異常熱波が三日間続くと、月や年の平均の記述や記録では、その間の凄まじい個々の気温変化が現れず、なにこともなかったことになってしまうことでしょう。たった一日の現象であっても人類社会に大打撃を与える可能性があるわけです。わたしたちにとっては、このような特異な異常気象に関する研究は決してないがしろにすべきではないでしょう。ここでわたしの見解を披瀝させていただくなら、人類社会に大打撃を与えるような問題の研究においては、打撃を受ける側の被害を考えて、打撃の最大値を予測することこそ優先すべき重要な課題だと思っているということです」

有平には地球温暖化による気温上昇予測が平均で表現されていること自体、あまり意味があるとは思えなかった。

「とはいっても、『ノアの大洪水』は度が外れている。予測が外れるときのことを考えないのか。予測が外れたときは人騒がせではすまない。こんな研究は投機のようなものにすぎない……」

青田は顔を紅潮させて捲し立てる。

「予測に関しては、後程まとめて議論させていただきます。つぎの質問に移らせていただきます……」

司会者は青田を制するように大声で言いながら、同意を求めるように会場を見渡した。

「……では、丁大の白木先生、どうぞ」

メモ用紙を片手に、黒枠の丸い眼鏡を掛けた白髪の瘦身の男が立ち上がった。彼は有平の指導教官池田の生涯のライバルといわれている男だった。偏屈なところがあって、人付き合いも下手で、誰からも敬遠されていた。

「なかなか壮大な理論モデルで感心しました。正直申しまして、壮大過ぎてわたしの理解を超えるところがあります。そこで、二、三、教えていただきたいのですが、第一点は急激な温暖化に関してです。つまり、二酸化炭素やメタンがどの程度の濃度になると急激に温暖化が進むのか、ということ。第二点は、水蒸気がどのようにして成層圏や中間層に上昇するのか。第三点は、氷雲が降水となる条件についてです」

「掃木先生、お願いします」  
司会者は同情するような目つきで有平を見た。

「正確には、温室効果ガスの総計ですが、二酸化炭素の大気中濃度が四〇〇ppmを超えるあたりから温暖化が極端に進むと考えています」

二酸化炭素は地球上における温室効果ガスのひとつである。大気中の二酸化炭素は太陽光線を通すが、日射を受けて熱せられた物体が放射する赤外線（熱エネルギー）を吸収する。このため、大気中の二酸化炭素は地球から熱が逃げていくのを防ぎ、まるで温室のように地球を温める。このような性質を持つガスを温室効果ガスといい、これには二酸化炭素のほかに、メタン、フロン、オゾンなどがある。水蒸気にもこのような性質がある。

もっとも、地球上が温和な気温を保つためには、熱エネルギーを捉えて温室のような効果をもたらすこの種の温室効果ガスが欠かせない。だがこれは適度な量でなければならぬ。多すぎても少なすぎても困る。二酸化炭素は大気中に三〇〇ppmもあればいいのだ。多すぎれば温暖化するし、

少なすぎれば寒冷化が待っている。

グリーンランドのアイスコアを分析したアレーとベンダーらは「氷期から間氷期へ移行する際、二酸化炭素の大気中濃度は五〇パーセントの幅で大きく変動する」ことを突き止めた。もうひとつの温室効果ガスであるメタンの変動幅は七五パーセントだったという。

人間活動による温室効果ガスの放出が少なかった産業革命前の二酸化炭素やメタンの大気中濃度は、それぞれ多くても二八〇ppmと容量比一〇〇万分の一と七〇〇ppm（一〇億分の一）であった。現在では、それぞれがすでに四〇〇ppm、二五〇〇ppmを超えているのだ。

「ではすでに温暖化がかなり進んでいるということですか」

「はい。わたしは現在、温暖化が暴走し、ますます加速されつつあるような気がします」

「そのことは実証されている……」

有平は白木教授の顔に目を向けた。教授は一体なにを考えているのだろうか。ふと彼の脳裏に得体の知れない不安が過った。

「……このところ、二酸化炭素の年間の増加率が急速に増えてきているので、そんな気がしているわけです」

「すると、そう感じたということね……」

「温暖化が進み、海面温度が上昇すると海水が温まり、蒸発量が増え、大気中の水蒸気量が増える。水蒸気が増せば、その温室効果によってさらに海面温度が上昇する。これに応じて、さらに大気中の水蒸気量が増える。この悪循環が始まると、気温の上昇がどこまでもつづくことになりかねない。かといって、海面温度や海水温の上昇にも限度があるでしょうが……」

「理論的にはそのようなことが起こりうるということですか」

「そのとおりです」

「まあ、いいでしょう。じゃ、第二の問題はどうですかね。対流圏を上昇するように、水蒸気が成層圏や中間層を昇っていくのですか」

「確かに、成層圏や中間層に水蒸気が達するにはいくつかの障害があると思います」

有平は慎重に言葉を選んで話し出す。

地球を覆う大気圏は地上から上空数千メートル以上にも及ぶが、気象学で扱うのは約一〇〇キロメートル（一〇〇〇〇メートル）までである。大気の鉛直方向での温度分布は単純ではない。約一〇〇〇メートルまでの高さまでは上空にいくほど温度は低くなるが、そこから五〇〇〇メートルほどまでは逆に上に行くほど気温が高くなる。その上になると、反対に、気温が下がる。この傾向は八〇〇〇メートルほどの高さまでつづく。そのさきはまた逆になる。このような大気の温度分布は太陽放射と大気中の熱源との関係で形づくられるが、これにもとづいた大気層の区分が対流圏、成層圏、中間圏、そして熱圏で、それぞれ間の境界に界面が形成されている。

問題は対流圏と成層圏の間の圏界面だ。対流圏界面には暖かく軽い気体が蓋をするように存在する。対流圏の対流現象はここまでで、この気体を貫けずに止まるのだ。海面や地上から立ち上る水蒸気が対流圏から成層圏に入っていくには、なにかの力を借りてこの対流圏界面にある気体層を突破しなければならぬ。ではどういうメカニズムでそれが可能となるのか、というのが白木教授の質問だ。

「これについては、こんなふうに考えています。端的に言いますと、強い上昇気流によって対流圏界面を突き破って上昇していくのだと思っています

す。これとオゾン層破壊によって、成層圏のオゾンが減少し、オゾンの温室効果による熱源も弱まり、成層圏下部の温度も低下傾向にあつて、対流圏界面そのものが弱まってきていると考えられることです。このような条件のもとで、上昇する水蒸気の対流圏界面突破が可能になっていると考えられています」

「ほおう、対流圏界面が弱まっているというのですか……」

「これも推測で、実際に観測してみないとなんともいえないことですが……、とにかく、対流圏、成層圏、中間圏における鉛直温度分布が最近若干変化しているように思えるのです」

有平は下手に出て、白木の出方を窺う。

「そうかもしれませんね」

白木は一旦手綱を緩めた風だった。だがそれで終りではなかった。

「ところで、先程『強い上昇気流が云々』といわれましたね。成層圏界面を突破するようなそんな強い上昇気流がどこで発生するのですか」

「これも推測ですが、その一つはチベット高原あたりではないかと思えます。ヒマラヤ山脈を超えたモンスーンがチベット高原の上昇気流に後押しされるような形で上昇していくのではないかと考えています」

「なるほど。チベット高原ね。では、第三番目の問題はどうかでしょうか」

「第三番目ですか……」

有平はもう一度白木を窺う。彼にとって三番目の問題が一番厄介だった。夜光雲は中間圏の上層部に形成する氷の雲だ。これが中間圏一杯に広がり、さらに成層圏界面におよぶ。これらが融けて落下し、地上に大雨をもたらす、と彼は直感的に感じた。だが彼はなんとかそのメカニズムを解明しようと何度も試みたが、まだ完全に解明していなかった。やはり、神さ

までなければ、「天の水門」を開くことができないのだろうか、と思うことさえあった。

「現在のところ、容量といえますか、その限界を超えて形成された夜光雲が、成層圏の急速な温暖化や上空に舞い上がった火山灰などの衝撃によって、氷の雲が融け出し、これらのあるものが凝結核となって大粒の水滴を形成して落下すると考えているところですね」

「そうですか。これも推測ということですね」

「はい」

白木は有平の答えに満足そうに大きく頷いた。

「白木先生、つぎに進めてよろしいですか……」と言いながら、司会者はテーブルの上の時計に目をやった。

「そろそろ予定の時間も少なくなりましたので、メカニズムに関する質問は打ち切りにして、予測に関する質問に入りたいと思います。では、赤谷先生、お待たせいたしました」

赤谷は洪一郎の親しい友人のひとりだ。なぜこんなところでわざわざ質問しようとするのだろうか。有平は複雑な気持ちに襲われ、結婚式で一度会ったことがある、およそ学者らしくないゴルフ焼けた大きな顔のずんぐりした体躯の赤谷を上目遣いに一瞥した。

「その今度の『ノアの大洪水』が一五年から二〇年後に来襲するということですが、その根拠をもう少し詳しくお話しただけませんか。また、その規模はどうか」

有平はうんざりした。これまで何度同じ質問を受けたことだろう。彼はちよっとした軽い気持ちで新聞記者の真田に話してしまったことが思わぬ反響を生んだことを苦々しく思い浮かべた。そうは思っても、掃木有平の

予測として一五年から二〇年後に『ノアの大洪水』が再来するということが広く知れ渡り、一人歩きしていることに変わりなかった。

「あの予測は極めて大雑把のものです。北海道上空で夜光雲が観測されたことから計算したものです。洪水の規模は分かりません。ただこの数百年にわたしたちが経験したものをはるかに超える規模になると思われます。これもこれからさらに研究して明らかにしていきたいと思っています」

「そうですか。その程度のことですか。日本だけでなく、世界的に『ノアの大洪水』再来問題が関心を呼んでいるようですが、これにはなんらこれといった根拠がないというわけですかね」

有平は怒りがこみ上げてくるのを感じた。だが赤谷のことさら煽り立てようない方に、彼はじつと耐えた。

司会者の古垣が反論もせず立っている有平に応答を促すように、じつと彼を見守っている。だが彼は階段講堂の最上階の一点を見つめたまま、視線を動かさずにじつと立っていた。

「掃木先生、……ありませんか……」

古垣は再度、有平を促す。

「……………」

「予定の時間となりましたので、今日の講演会はこれで終わりますが、最後に、司会者としての感想を述べさせていただきます。『ノアの大洪水』の再來說に対して、いち早く実証的研究を行うべくプロジェクトを立ち上げた米国籍チームの研究活動を傍観するのではなく、日本においても、掃木先生の壮大な問題提起に応える研究活動が組織的になされるべきでないかということ。掃木先生、有難うございました。質問等にご協力を頂きました関係各位と最後までご静聴くださいました皆様に対して、心から感

謝いたします……」

有平は司会者の声を上の空で聞いた。

まばらな拍手があつて、座席がざわつき出した。気の早い聴衆が立ち上がりはじめていた。

そのとき、彼はふと、真有の笑顔が脳裏を過つたような気がした。これから生きていく真有たちの世界が、われわれの過去の行為によってこんなに破滅に満ちたものになってしまうことがどうして許されるのだろうか。

「あのう……」

突然、発言をもとめた有平に古垣は怪訝そうな目を向けた。

「是非、一言発言させていただきたいのですが、よろしいですか」

返事を待たず、有平はかまわず続けた。

「ただいま、司会者から好意あるご指摘がございましたが、最後に、あえて申し上げたいことがあります……。わたくしの問題提起にはまだ詰めるべきところが多々あることは重々承知しておりますが、われわれには残されている時間があまりないのです。二酸化炭素の吸収源である海洋が海水温の急激な上昇によって逆に二酸化炭素の排出源と化しつつあります。温暖化が温暖化を呼ぶ事態にまさに突入しようとしているのです。こうなれば、もはや手の下しようがなくなってしまうです。地球の気候システムのような巨大なシステムは一度揺らぎ出すと破局へ向かつて突っ走るものです。途中でこれを制御することは到底不可能なことであるといつていいでしょう……」

地球の気候システムはいま、まさに『ノアの大洪水』という破局に向かって走り出そうとしているのです。大波乱の破局が過ぎれば、地球の気候シ

ステムは安定化を目指して長い道のりを歩みだし、寒冷化へと向かうことでしょうか……

でも気候システムの破局は人類にも破局をもたらすに違いありません。いまずぐ対策を徹底すれば、まだ破局を回避することが可能でしょう。わたくしが研究者としての生命を投げ打って、あえて『ノアの大洪水』再来説を唱えたのはこのためです……

いまずぐ、破局回避の対策を実施することです。いまずぐ二酸化炭素の吸収源の容量を超える二酸化炭素の放出を抑えることです。これと並行して、二酸化炭素の吸収源を増やすことです。これができなければ、われわれ人類は一〇年も待たずに『ノアの大洪水』を迎えることになるでしょう。運がよくても何年か遅れるだけで、『ノアの大洪水』は必ず発生するのです……

科学的実証とは一体なんでしょうか。自己満足ともいえる科学的実証を求めるために時間を浪費しては、救える未来をも破滅に追いやることになるでしょう。その責任を誰が負うのですか。それともわたしたち科学者には人類の未来を奪う権利があるのでしょうか……」

有平は聴衆と司会者に向かって謝辞を述べ、頭を深々と下げた。彼は演壇をおりると、座席の間の階段を急いで上った。だが最上階の席にはすでに洪一郎の姿がなかった。

彼はあたりを見回した。座席を立ち、通路をゆく聴衆は彼を避けるようにして離れていく。

聴衆が去り、人影が消えて空っぽになっていく講堂を彼はぼんやりと見下ろした。彼は明確に反論もせずに演壇に立ち尽くしていた自分の姿を思い浮かべた。なぜあのとき、急にどうでもいいような気持ちになったのだ

ろうか。最上階の席からじっと演壇を見下ろしている洪一郎の視線を感じたからだろうか。日焼けした大きな顔を突きだし、まるで洪一郎を代弁するように振舞う赤谷をまえにして、反論する意欲が急に萎えていったのも事実だった。

ではなぜ最後になって、また急に、どうして火に油を注ぐようなことを言い出して、さらに学会の反発を買う行為に出る気になったのか。

あれは有平の日本の学会に対する決別の辞だった。これで日本の学会は間違いなく、彼に対して「科学者にあるまじき予言者」というレッテルを貼ることだろう。彼はレッテルを背に、居場所を探してあてもなく彷徨う自分の姿を思った。

14

「池田教授がきみを探していたよ」

振り返ると、柿本がそばに立っている。

有平は池田の後を継いで講座を受け持つことになっていた。だが真知が亡くなると、それを蹴って、彼は真有を連れてさっさと北海道へ去った。柿本は彼の後釜をねらって運動していたが、池田はまだ彼が帰ってくるのを待っていた。

「そう……」

「反論もせずに、どうして急に態度を変えたんだ。そうするんだったら、最初から講演を断ればよかったんじゃないのか。あれじゃ、わざわざ公の場で自分から自説の不備を認めたようなものじゃないの。なにかあった

のか。教授が心配してたが……」

「ああ……」

有平は柿本の目に好奇の色が浮いているのを感じた。すでに有平が再起不能のダメージを受けたことを知ってか、いつもなら、彼に対するねたみやそねみを決して隠そうとしない柿本がむしろ同情すら感じているらしい。

「ACAR（大気研究センター）がきみのことを照会してきているそうだ。なんでも新しいプロジェクトを計画中だとか。リーダー探しをしているのかな」

柿本は呟くように言う。

「ACARか……」

有平はふとこのまま米国に行ってしまうかと思った。ACARはコロラド州のボルダー市にある非営利の研究機関である。彼はこれまで会議や研究集会で二、三度訪問したことがあった。

ボルダーはロッキー山脈の東側に位置し、市街は海拔千数百メートルの高地に広がる。研究センターの建物は市街から離れて、山麓に突き出した小高い台地にあった。三階建のビルは、自然に溶け込むように近くの山肌と同じピンクがかかった砂岩を切り出して造られ、すぐ近くまで親子連れの鹿がやってくる。

「……真有を育てるには絶好の場所かもしれない」

有平は柿本と別れると、その足で教授を研究室に訪ねた。

彼はいつものようにドアを軽くノックして研究室のなかを覗く。

研究室の奥の窓を背に置かれた机のうちは乱雑に山積みされた資料に埋まり、うっかりすると資料の山に埋もれた小柄な教授の姿に気づかず、留守と見間違ふ。彼は資料の山の間ワイシャツ姿の教授を見つけると、も

う一度ドアを強くノックした。

池田は顔を上げ、黒枠の眼鏡の奥の目をしょぼつかせて、有平をじっと見た。

「当分の間、アメリカで研究したらどうかね」

「はい」

「ACARが成層圏と中間圏における水蒸気の挙動などについて詳細な観測を始めるそうだ。きみの問題提起に刺激を受けたらしい。近いうちに、きみのもとにACARから招聘状が届くだろう。きみの大胆な仮説を実証するデータが見つかるかもしれない」

「はあ」

有平は池田のつぎの言葉を待ったが、教授は机のうえのパソコンの画面に視線を戻すと、それきり顔を上げようとしなかった。

## 第二章

15

「マユ？ 元気かい。急に、真有の声が聞きたくなくて……、」  
「コメンネ」

研究室の窓ガラス越しに山腹を下りてくる子鹿を見とれていると、不意に幼いころの真有が浮かんだ。毎日連れ歩いたころの真有は手を繋ぐと小さな手で有平の人指し指をぎゅっと強く握ってなかなか離そうとしなかった。突然、そのときの感触が生々しく蘇り、彼は反射的に受話器を取り上げたのだった。

「……………」

返事がない。受話器の奥で、真有がじっと息を詰めているようだった。

「……真有だよね」

有平は不安に駆られ、もう一度確かめた。

「はあ、はい」

「パパだよ。いよいよ中学卒業だね。いつ迎えに行こうか」

「いつでも……、都合のいいときに……」

真有はなかなかパパと呼んでくれない。声もどことなく冷やかで、よそよそしかった。十年も放置した報いかもしれないと思い、自ら慰めていたものの、有平は不満だった。だがずっとひとり置き去りされたように感じていたにちがいない真有の気持ちを思うと、どうしようもなかった。一緒に住むようになれば、真有のほうから自然にパパと呼び出すにちがいない。こう思っ、彼は自ら慰め、気にしながらもそのままにしていた。

「パパア、パパア」と言っ、有平のそばから一時も離れようとしなかった二、三才頃の真有が義務教育の中学を終えて、高校入学を迎えようとしているのだ。

十年はあっという間に過ぎたように感じる。どうしようもなく長く思えたこともあった。小さな真有を思い出しては、何度日本に帰ろうかと思ったことか。

この十年の間、真有に会いたくなくて、有平は何度か航空券を手配した。だがその都度用事ができて果たせなかった。というより、いざ出発の日になると、いつのまにか自分で用事をつくっていたのかもしれない。真有に会うのがなんとなく怖かった。真有に会わずにいればいるほど、ますます会うのが怖くなっていく。

日本を離れたときから、日本には彼の帰るところがなかった。それに日本よりも米国にいるほうが「ノアの大洪水」再来の警告を世界へ発信し、対策を促すことがやり易く、効果が期待できるように思えたのだ。

彼にはひとつの思惑があった。

世界最大の二酸化炭素排出国である米国に留まり、地球温暖化対策に後ろ向きなこの国に対して、なんとかして大幅な二酸化炭素排出削減の対策を実現させたかったのだ。この思いが彼に日本に引き返すことを押し止め、慣れない異国での毎日の不自由な生活に耐え、真有を一日も早く手許に引き取りたいという思いを抑えていた。それになにかと不自由な生活を小さな真有にまで強いることはしたくなかった。

それに加え、簡単に集まると考えていた「ノアの大洪水」関連のデータが思うように集まらなかった。予測モデルのモデリングにも新たな問題が生じていた。

渡米当座、彼は真有を早く引き取りたいと思い、早く異国の生活に慣れようともがいた。だが思うようにいかず「有平さんがアメリカでの生活に慣れるまで預かるわ」と言ってくれた清子に甘え、彼は研究に打ち込み、真有のいない寂しさを紛らわした。

これがいけなかった。

六ヶ月後、有平が真有を迎えにいくと言ったとき、清子は幼稚園が終わるまでと、一方的に引き取りを延ばした。幼稚園が終わると、小学校が終わるまでと言う。

小学校を終えたとき、清子がなんと言おうと、こんどこそ、真有を米国に連れて来ようと言はるころに決めた。だが清子は義務教育だけは日本で修めるべきだと言いつつ出た。なかなか首を振らない有平に、清子は泣き落しに出た。まわりの同情をかおうとする大袈裟な振る舞いに、有平は中学を終えるまでとしぶしぶ承知した。

彼は毎日、真有と一緒に過ごす親子水いらずの生活を夢み、なんとか一日を過ごしたが、もう一日も延ばせなかった。彼の神経にとって、これが限界だった。

こんどというこんどは、どんなことがあっても娘との生活を実現しなければならぬ。彼は強く自分に言い聞かせた。

「そちらの都合は……」

有平は不安だった。それとなく清子や洪一郎の様子を訊ねた。

土壇場でまた、清子がなにを言い出すか分からなかった。高校も日本がいいと言いつつも出さずかもしれない。それに真有の気持ちも確かめておきたい。中学を終えるまでと言いつつ出たとき、清子がふと「女の子には女親にしか言えないことがある」と言ったことが、いまま彼のところにひかかって離

れなかった。

「……あとでメールする……」

「そお。パパは迎えにいくのはいつでもいいからね」

彼は念を押す。

「ひとりで行ける」

「叔母さんたちにもお礼を言わなければならないから、迎えに行くよ」

「……うん」

それきり真有はなにもいわずに電話が切れた。未練がましくしばらく受話器を持ったまま、有平は窓ガラス越しに子鹿に目を向けていた。

新たな不安が脳裏を掠めた。彼は不安を醸し出す源を探そうと、娘とのやり取りを反芻した。だがなぜか不安が新たな不安を呼ぶように、胸のなかでとらえどころのない不安が勝手に膨らんでいく。

彼は大きな溜息をついた。

子鹿はぴよこんぴよこんと跳ね、石ころの多い斜面を下りて近づいてきた。大きな岩の間を縫い、建物のガラス張り壁のままで急に立ち止まると、頭を傾げ、好奇の目をしてじっとなかを窺う。

少し離れたところで、親鹿らしい大きな躯の鹿が子鹿の様子をじっと見守っている。

有平は子鹿に目を向けたまま、ぼんやりと真有のことを思った。

16

二十一世紀に入ったから、有平が危惧していたとおり、年々激しさを加

え、温暖化が温暖化を呼ぶようになった。前世紀の終わりにも、わずかにその兆しかと思われる現象があったが、いまや温暖化はすでに暴走状態にあった。

大気中の二酸化炭素は温暖化をもたらす主要な原因物質（温室効果ガス）であるが、それまで数十年間にわたり、その大気中濃度が年間ほぼ一・五ppmの割合でコンスタントに上昇していた。ところが、一九九八年頃から急に増え出した。

それが前触れだった。以後、二酸化炭素は年々これまでの割合を超える増加を示すようになった。それに呼応して、地上の気温が急速に上昇しはじめた。海水温も上昇した。

北極圏の温暖化が急激に進み、北極海から氷は消え、一度大崩落したグリーンランドの氷床では、その後も大小の崩壊が続いていた。

南極の棚氷も予想をはるかに上回るスピードで崩壊し続けた。

棚氷は大陸を覆う氷床が自らの重みで押し流されて先端の一部が海上に突き出した不安定な状態の氷の塊であるが、南極の棚氷は厚さが平均二〇〇メートルもあり、大きさも日本の全面積の約四〇倍にもなっていた。

これまでも何度か、海上に突き出している氷床から分離した氷の塊が淡路島ほどの巨大な氷山となって海上を漂流することがあった。

南米に近い南極半島にあるラーセン棚氷は比較的小規模な棚氷のひとつであるが、最北部にあって温暖化の影響を一番受け易い。年々崩壊しつづけ、遠からず棚氷全体が消失するおそれがあったが、一九九八年、棚氷から約二百平方キロメートルの氷塊が分離した。同じ年、近くのウエッデル海に張り出している南極第二の規模のフェルヒナー・ロンネ棚氷から一部が分離し、巨大な氷山となって流出した。縦五〇キロメートル、横一五〇

キロメートルの大きさで、東京都の三倍以上あった。

年々南極大陸では氷床の融解が加速していった。グリーンランドや南極の氷床の崩落によって年々海面が上昇し、海岸を侵食し、海が広がって行く。

海水温上昇はさらにさまざまな方面に影響をおよぼしていた。

世界の珊瑚礁に異変が生じた。サンゴの生息範囲は低緯度地域の温かい浅海に限られているが、色とりどりのサンゴが白く変色して、死んでしまいう白化現象がいたるところで発生した。白化はサンゴと共生関係にある褐虫藻という植物プランクトンが、水温や塩分濃度の異常あるいは化学有害物質汚染などによってサンゴから抜け出るために起こる。褐虫藻はサンゴが出す二酸化炭素を利用して光合成を行う一方、サンゴに脂質などの栄養を与える。このため、褐虫藻がいなくなると、サンゴは饑餓状態となる。白化が始まったサンゴでも一ヶ月程度で褐虫藻が戻れば生き返るが、それ以上に及ぶと、回復しないままサンゴは死滅する。

サンゴの白化現象は大規模なもので、日本近海、インド洋、紅海、カブリ海など世界各地で見られた。エルニーニョとの関係が取り糺されたが、これと直接関係のないインド洋などで発生していることから、むしろ気候変動が関係していると指摘された。

珊瑚礁は多くの海の生物が集まる複雑な生態系をつくっている。

サンゴが二酸化炭素を放出するため、長い間、珊瑚礁は温暖化を促進する二酸化炭素の放出源だと思われていた。だが珊瑚礁には二酸化炭素を吸収する褐虫藻、海草、海藻、光合成細菌、植物プランクトンなどが集まっているので、全体ではむしろ、熱帯雨林なみの二酸化炭素の吸収源だったのだ。

温暖化の防波堤ともいえる珊瑚礁が絶滅寸前だった。

南米ペルー沖の海面温度が高くなるエルニーニョ現象が頻発した。年々規模も大きくなった。

これまで経験したことのない異常気象などの気候異変が世界各地を襲った。秋から翌年にかけてインドネシアやマレーシアで大規模な森林火災が発生した。いつもなら高温・多湿となる時期に、エルニーニョによってもたらされた異常乾燥に襲われたせいだった。

エルニーニョはこのほかにもさまざまな異常気象を引き起こす。アフリカや北米に異常気象が襲い、干ばつと大雨・洪水が交互に発生した。

ペルーでは大雨で洪水や土砂崩れが多発した。ブラジルのアマゾン地域で大規模な森林火災が発生した。メキシコでは、南部の山地で自然発火の山火事が相次ぎ、北部の町で摂氏四五度を記録した。アルゼンチンでは大洪水に襲われた。北米では、西海岸を高波が襲い、東南部を巨大な竜巻が襲った。南部は記録的な大雨に見舞われた。

とにかく、異常な天候が世界中を支配していた。何十日もじりじりと強烈な太陽が照り続き、熱波が襲うかと思うと、「ノアの大洪水」のはじまりを思わせるような大豪雨が一週間以上も降り続き、日照不足を招く。また真夏に突然大雪が降り、樹木の大枝をへし折るかと思うと、熱帯性低気圧が強暴化し、台風やサイクロトロンが暴れ回る。また超巨大化したハリケーンや激烈な竜巻が矢継ぎ早に襲う。

日本でも気温が高く、各地で平均気温が平年に比べ、一度から三度も上回った。干害や熱波が各都市を襲い、首都圏では雨の降らない日が続き、東京では「無降水連続日数」の記録を更新し続けた。最高気温が四〇度を超す酷暑の日が激増し、最低気温が三〇度を超える超熱帯夜の日数も大幅

に増えた。超巨大化した台風が毎年決まったように襲い来る。また降水量も平年の二、三倍を記録する凄まじい集中豪雨がゲリラのように各地を襲い、洪水や土砂崩れを引き起こした。

またアジア各地も豪雨に見舞われ、洪水が広がった。中国では長江が湖北省宜昌より下流の全域で警戒水位を超えた。洪水は江西、湖南、湖北、福建省に広がった。韓国を襲った集中豪雨は一晩で数百ミリを記録し、各地で浸水や山崩れを引き起こした。

オゾン層破壊もピークを迎え、地上に降り注ぐ有害紫外線が急増した。温暖化とオゾン層破壊の相互促進作用がはじまっているのか、気温上昇と有害紫外線の増加によって、いたるところで森林生態系や海洋のプランクトン類が壊滅的な打撃を受け出した。

豪雨と正反対の干ばつが激しさを加えた。インドやアフリカの一部では、数カ月から一年を超えて、一滴の雨も降らなず、牛、ヒツジやヤギがつぎつぎに死んでいった。干ばつは家畜から人間へと被害を広げていく。

有平には予期していたことであつたが、彼は世界の異常気象の報告を暗澹たる気持ちで聞いた。世界が「ノアの大洪水」再来の警告に耳を傾けようとしなかつた当然の酬いといえればそれまでだが、彼には傍観しているゆとりがなかつた。

真有のEメールがそんな彼の気持ちを一層暗くした。

お父さま

こんなことをお訊ねして気分を損ねないか心配ですが、あの「ノアの大洪水」は本当に来るのですか。お祖父さまはいつも「テララメだ」と言っています。本当のことを教えてください。もし来るのなら、それは何時こ

るですか。

もし「ノアの大洪水」が襲って来たとき、東京はどうなるのでしょうか。たとえ「ノアの大洪水」が襲って来てもここ（本郷）は大丈夫だ、心配ないとお祖父さまが言いますが、清子おばさまは心配そうです。

「ノアの大洪水」が突然襲って来たら、年老いた二人はどうなるのでしょうか。このことを考えると、わたしにはお祖父さまと清子おばさまを残してここを離れることはできません。

お父さまのもとにすぐにでも旅立ちたいのですが、わたしにはどうしてもそれができません。分かって下さい。

「ノアの大洪水」が来ないことが分ければ、明日にもお二人に別れを告げることができましょう。お父さま、本当のことを教えてください。

「ノアの大洪水」が来ないように祈りながら

真有

「ああ……」

有平は深い溜息を吐いた。

ひたすら真有との親子水入らずの生活を夢見ながら闇雲に過ごした歳月が、やり場ない寂寥感を伴って思い返された。彼は一人ぼっちだった。信賴していた友に裏切られ、砂漠にひとり置き去りにされたような気がした。

何年も放置した竹籠返しだった。真有が一〇年間育ててくれた年老いた二人を残して旅立せずにいる。有平には真有の気持ちがよく分かる。彼が真有なら彼女を同じように思うだろう。

だが彼にはなにも分かっていなかった。真有がどんなに苦しんでいるのか分かって、彼にはその苦しみを感じることができなかった。

17

「対策はまだ間に合う。現在、大気中の二酸化炭素濃度は約三九〇ppmだから年間一ppm増加するとしても、四〇〇ppmまでには十年の余裕がある」米国に来たばかりのころ、有平はこう指摘して、何度も「取り返しのつかない被害を回避するために、研究よりも対策を急ぐべきだ」と言って回った。

だがいつも同じ返事が返ってくるだけだった。

「石油にどっぷり浸かったこの国には、誰もが頭から二酸化炭素の排出量を減らす気はない。国民に不人気な政策を強いようとする勇氣ある政治家もいないしね。いまのこのエネルギー浪費システムは行き着くところまで行くほか、止めようがないのだ。現代文明は麻薬だよ」

米国では人々がもっとフランクに自分の言い分を受け入れてくれるのではないかと有平は思っていた。だがそれは彼の買い被りに過ぎなかった。一〇年経つてもなにも変わらなかった。

石油や石炭など化石燃料の巨大な消費国であり、最大の二酸化炭素排出国である米国には、生活水準を多少落としても温暖化の原因となる二酸化炭素の排出を抑制しようとする考えははじめからなまなかった。また大量生産大量消費大量廃棄によって経済的繁栄を維持している米国にとって、大体、二酸化炭素の排出を大幅に削減することが簡単にできるはずはなかった。ことに市場原理主義のもと、現世主義者で、競争社会に揉まれ、欲望のまま自分さえよければいいというエゴイスト社会にとって、いまの生活

を捨てることはできない相談だった。

もつとも、有平もいまの状態をそう簡単に変えようとは思っていないかった。でもこのまま放置しておくわけにはいかないのだ。なにかをはじめなければ、なにも成し遂げることはできない。彼はこの危機を回避する仕事をしたかった。だが彼の期待は裏切られた。彼の「ノアの大洪水」説に関心を示したのは、ごく一部に過ぎなかった。

有平は次第に苛立ちを覚えていった。

年間ほぼ1 ppm前後で増加し続けていた大気中の二酸化炭素濃度が急激に増加傾向を示すようになった。二酸化炭素の年間増加量が毎年大きく変動し、3 ppmを超える年がたびたび現れた。それにメタンの増加が酷かった。

温暖化が温暖化を呼ぶ事態に陥入りつつあった。

有平は一層危機意識を募らせていたが、どうすることもできなかった。彼の危機意識に同情を示して「政治家を動かすにはかなりしっかりしたデータを用意しなければならぬんだ」と助言するものもいたが、それでも米社会全体にはどこか成り行きまかせなところがあった。

なんとか対策を間に合わせたいと思う有平は、同僚の指摘に従い、一日も早く実証データを揃える努力をするほかなかった。出口のない迷路を彷徨うような思いで、彼はただひたすら「ノアの大洪水」についての実証データを追い求めた。

夜光雲が出現する高度八〇から八五キロメートル付近は水分が対流圏における通常の大気の一〇〇万分の一から一〇万分の一程度で、きわめて乾いた状態である。それでも気温が氷点下一三〇℃以下になることもあって、そのときわずかな水分から夜光雲をつくる氷粒子である氷晶片が形成されるのだ。彼はその通常の大気の一〇〇万分の一から一〇万分の一程度の水

分をチエックしつづけた。

地球観測衛星が収集した成層圏と中間圏を含む中層大気の微量成分観測データから水蒸気量のデータを集め、彼は解析を進めた。なんとかして夜光雲を形成する水分が中層大気に大幅に増加していることを突き止めたかった。

衛星から送られた一五キロメートル付近から八五キロメートルにわたる水蒸気量のデータをチエックしているとき、彼は奇妙なことに気付いた。

18

「以上が中層大気における水蒸気量についての最近の変動傾向です。結論的に申しますと、変動幅が次第に大きくなってきているということです。これともうひとつのファクトは、中間圏上層の高緯度の方にかけて夜光雲を形成する氷粒子の氷晶片の密度の著しい増加が見られるということです」

ピアレビューのための報告を締めくくると、有平は会議に参加しているテーブルの面々に軽く会釈してから、説明に使用したデータを片付け始めた。彼はときどき出席者に目をやり、質問を待った。

研究センターのミーティングルームにはホワイトボードを嵌め込んだ壁に向かって、中央に細長いテーブルが馬蹄形に配置され、プロジェクトのピアレビューを担当する五人のメンバーを中心に、プロジェクト関係者のほか、所長や研究部長をはじめ、研究に関心を寄せるさまざまな分野の研究者が顔を揃えていた。周りの壁際にも椅子が並べてあって、テーブルからはみだした研究員らの傍聴者で埋まっている。

「夜光雲を形成する氷粒子密度が増えているということは、事態が掃木理論通りに進展しているということになるのですか」

突然、声がした。壁際の席で長い足を組んでいるTシャツの背だけがひよるひよると伸びた感じの若い男だった。

報告の途中でも何度か質問があった。それは方法論やデータ処理についてのテクニカルな質問であった。その都度、有平はそれに答えるかたちで報告を進めてきたが、今度の質問はあまりに単刀直入な質問であった。彼は一瞬戸惑った。

「……まあ、そうとも言えるかもしれませんが」

有平は断言することを避けた。データはまだ不足しており、まだ不確かなところが残っていた。彼はこれ以上深入りしたくなかった。だが質問者は彼の気持ちを無視するように続ける。

「氷粒子密度はどこまで増え続けるのですか」

「さあ……、臨界一杯まで増え続ける……」

「氷粒子密度が臨界に達したらどうなるのですか」

「なんらかの刺激で、個々の氷粒子が結合して大きな氷塊を形成することになるか、それとも融解して大粒の水滴となるか……、そのへんのところはまだ推測の域を脱しませんか……」

有平はそのときまで曖昧にししか理解できなかった「天の水門」の開閉のメカニズムが、突然、ひとつのイメージとなって彼の脳裏に閃いた。

空一杯に広がった部厚い氷晶片の層が瞬時に凝結して水面を形成し、天空一面を覆い尽くした瞬間、さっと全面にひび割れが走り、無数の小氷塊となって崩れるように落下していく……。

「……多分、それは過飽和溶液で起こる急激な析出作用に似た現象かと……」

……

と言いかけて、有平は口を噤んだ。いくらなんでも、このイメージは突飛過ぎる。だが彼の脳裡でイメージが急膨張し出していた。

中間圏で冷却された水蒸気が氷晶片となって高緯度上空を覆い、低緯度へと広がり、地球全体を覆い尽くす。集中集積して過飽和状態となった氷晶片群は一瞬の衝撃で氷塊となり、落下していくのだ。

彼はまえにもこんな光景を見たような気がした。

質問者は大きく見開いた目を向けたまま、立ち尽くしているが、もはやこれに感じる気がなかった。

彼には気になることがあった。地球が急激に気温上昇する大ジャンプの時期が迫って来ているような気がしてならないのだ。

グリーンランドのアイスコアを分析したマ・アレソラのいう、急激な地球温暖化現象では、気温の揺らぎが繰り返されたあと、数年から数十年の間で平均気温が五度、ときには一〇度以上も上昇する。急激な勢いで上昇し出した気温が地球温暖化のピークを目指すのだ。

この数年、地球の気候がときには大きく、ときには目立たない程度の揺らぎを何度も繰り返していた。彼にはこの揺らぎが急激な気温上昇の前触れのように思えてならない。いまにもジャンプしようと身構えているような気がした。

彼は毎日、固唾を呑んで、気温の変化を見守った。

気温が大ジャンプしたら、と想像して身を震わせた。それは「天の水門」開放の合図なのだ。急激な気温上昇によって海面から蒸発した大量の水蒸気が天空に昇ると同時に、中間圏の気温が変化して「天の水門」の扉を激しくノックする。そして「ノアの大洪水」の幕が切って下ろされるにちが

いないと思った。

彼は口を噤んだまま、データを片づけた。早く終わりにしたかった。突然困いた「天の水門」開閉のメカニズムについてさらに詰めて見たかった。だがつづいてなされた質問とも意見ともつかぬ質問が思わぬ方向に議論を導いていった。

「『ノアの大洪水』が起こるとして、そのあとはどうなるのですかね。

『ノアの大洪水』発生後のことですが……」

黒い顎ひげをはやしたピアレビュウのひとりのメンバーが悪戯っぽい目をして有平のほうを見ている。彼は一瞬、こころのなかを見透かされたかと思った。

米国に来てから、有平は「ノアの大洪水」再来までで議論を打ち切っていた。それから先のことは考えなかった。考える必要がなかったというより、考えてはならないと決めて意識的に避けていた。

「ノアの大洪水」が悲惨な結果を招くことは明白だった。それゆえに、彼にとつては、とにかく「ノアの大洪水」を発生させてはならないことが最重要課題なのだ。「ノアの大洪水」後のことを科学的に分析し出すと、それに溺れて、「ノアの大洪水」を回避しようとするよりも、それを避けえない事実かのように受け入れてしまい、つぎのステージへ関心が移ってしまうおそれがあった。こうなることを彼は極端に恐れていた。

有平には、人間が自らの生存基盤である地球環境を台無しにして、これを省みないでいることが我慢ならなかった。人と人との争いや殺し合いには原因や理由があり、誰もが原因や理由の解明に関心をもつのに、エネルギーを大量に消費する現代文明からもたらされる地球温暖化は人々の関心を呼ぶ前に知らず知らずのうちに進み、いつのまにか生存基盤そのものを

喪失してしまうのだ。だがこんなことは許されることではない。エネルギー大量消費（浪費）文明である現代文明が引き起こす温暖化は、現代文明を総決算するほかないのか。

「さあ、どうなりますか」

彼は学会での夜光雲をめぐるやりとりのなかで「やがて地球が寒冷化する」と言ったことをおぼろげに思い浮かべながら、曖昧に応える。

「多分、それは『ノアの大洪水』がどんな形態のものかによるでしょうね。どの程度の規模の洪水か、それが地球全体を覆うものか、それとも一部の地域だけなのか、もし一部の地域のものであれば、それがどこでいつ起こるか、まあ、それぞれのケースで結果が異なることになるでしょう」

研究者に似つかわしくない精悍な顔立ちのアイトキンソン所長が代弁するように言い、同意を求めて有平のほうに顔を向けた。

「一時に大量の淡水が海に流入すると、表層海水の塩分濃度が大幅に低下することになりますな。すると……」

アイトキンソンの隣のラップ教授が赤茶けた鬚に覆われた顎を押さえ、興味深そうな目で有平を見た。

「もし北大西洋へ大量の淡水が流れ込むことになると、深層水生成メカニズムが影響を受け、深層大循環の大西洋コンベヤーベルトがおかしくなる」

地球の表面の七割を占める海洋は、深いところでは水深一万メートルを超すが、平均水深は約四〇〇〇メートルほどであって、海洋の大量の水が地球の蓄熱器となっているのだ。

海洋では表層だけではなく、深層においても海水は流れをつくり、大きなコンベヤーベルトのような循環流を形成している。主に風で引き起こされる表層循環と異なり、深層循環は主に海水の密度差によって起こる。海

水の密度は水温（熱）と塩分濃度によって変化するが、水温降下と高塩分とが重なる時、海水はとりわけ重くなって、海底深く沈んでいく。深層水となる。これが駆動力となって深層における海水循環が起きる。だが深層水が形成されるところは世界中でも北大西洋のグリーンランド沖と南極のウェッデル海付近などに限られているのだ。

北大西洋のグリーンランド沖では塩分濃度の濃い暖かい海水が急激に冷却されて密度を増し、深層深く潜っていく。深層水となった密度の大きい海水は南下してアフリカ大陸の外縁を回り、インド洋から南極海へと世界の海洋の深層を縫うように流れ、ふたたびゆっくり表層に戻る。これが深層海洋における大循環流で、大西洋にはじまるこの大循環を別名大西洋コンベヤーベルトというが、地球上において大量の熱を分配するのに欠かせない役割をになっている。

氷河期にはコンベヤーベルトが止まっていたらしい。グリーンランドで過去一〇万年間に二〇回以上発生した急激な気候変動にもこれが関係していると考えられているのだ。

「大西洋コンベヤーベルトがストップするとすると、北米の東北部、北欧、西ヨーロッパが広い範囲にわたり寒冷化することになる。いや、地球全体が寒冷化することになるだろう」

北大西洋ではアイスランドの近くまで比較的水温が高い高塩分の海水が八〇〇メートルほどの深さを北上しているが、このうえを覆う表層の海水が風で流されると、これに引きずられて浮き上がり、高水温で高塩分の海水が表面に顔を出す。そこで冷たい大気に曝され、熱を奪われ、冬には一〇℃の水温が二℃まで冷却される。このとき、海水が持っている膨大な量の熱が放出され、大気を暖めるのだ。大西洋コンベヤーベルトが止まると、

この熱の供給も途絶え、このため北米の東北部、北欧、西ヨーロッパの広い範囲が冷却化することになる。

「この種の研究はさらに発展させる必要がある。『ノアの大洪水』後のシミュレーションはやってみる価値があるな」

ラップ教授は宣言するような調子で言って、赤茶けた顎髭を撫でた。

有平は戸惑いを感じた。ラップ教授の発言は彼の研究に対する好意からなされたものらしいが、もしかしたら、寒冷化を温暖化の対策にできるかもしれないと考えているのかもしれない。

だが大西洋コンベヤーの問題はそう単純なことではない。大西洋コンベヤーベルトが簡単にストップするとも思えないし、まして大西洋コンベヤーベルトのストップと地球寒冷化が直線的に結びついているとも思えなかった。もし「天の水門」が開けば、地球が寒冷化するまえに、水が地球を覆い尽くし、地球システム全体が不安定化し、気候の激変ばかりでなく、地殻にも影響をおよぼし、地震や火山噴火を誘発するにちがいない。あるいは水浸しになった地球に寒冷化が襲い、地球が氷の惑星と化すかもしれない。

とにかく、大西洋コンベヤーがストップするまでの過程とそれから寒冷化へいたる過程を解明するとすると、これまで以上に長期間の研究が必要なことだろう。それは彼にとってさらに長い期間研究に拘束されることを意味する。

彼は真有を思い浮かべ、口を嚙んだ。

「『ノアの大洪水』の対策の重要性を訴えるためには、そこまで研究を展開することが必要だね」

アイトキンソンは有平に笑顔を向け、念を押すように言った。

反射的に笑顔を返したが、彼は複雑な思いに駆られた。

彼自身研究がまだ完結していないことは分かっていたが、このたびの報告で会議に出席したメンバーから「ノアの大洪水」防止対策を促す意見が出るものと期待していた。

だが対策を促す意見はおろか、事態の重大さを指摘する発言すらなかった。かえってさらに研究を延長するような新たな研究課題が提示されたのだ。

彼は失望を超えて怒りすら感じた。新たな研究を展開するとすると、結論を得るまでさらにかかりの時間が必要となる。これは対策が先送りされることを意味する。先送りされれば、それだけ対策の効果が限定されてしまう。その結果「ノアの大洪水」を未然に防ぐことがますます難しくなるではないか。

彼は意識的に避けていたところへ無理やり引きずり込まれていくような気がしてならなかった。なんとか引きずり込まれまいとあれこれ頭を巡らせていると、突然「天の水門」の扉を激しくノックする男の後ろ姿が浮かんだ。

一瞬、彼は目を疑い、目を凝らした。男の姿は二度と現れなかった。

19

毎日、真有はひとりで悶々として過ごした。父有平にあんなメールを送ったことを後悔した。心にもないことを書いてしまったことが彼女を苦しめ、落ち込み、激しい自己嫌悪に悩まされた。

真有に有平から電話があったことを知った清子は、それ以来、纏まりつくような目で彼女を見る。年を取るにつれ猜疑心を募らせてきた清子は、ますます執拗さを加えた目つきで、まるでこのころの底を探るように彼女を監視した。そのことが彼女を苛立たせ、一層悩ませた。

真有はじっと耐えた。自分から清子になにか言い出そうものなら、収まりつかない事態に陥るのが目に見えていた。

真有が父のこと言い出すと、清子はいつも激しく言い返し、そして長い間落ち込んだ。気の強い清子は父親である有平とも張り合い、真有のころを独り占めしていたかったのかもしれない。そんな清子に父のいる米国へ行きたいと言い出すことは、いまの真有にはとてもできなかった。といっても父に会いたかった。父を忘れていた訳ではなかった。ただわが子以上に可愛がってくれる清子や洪一郎を前にして、彼女には父のことを言い出すことがなんとなく憚れるのだった。

だが我慢にも限度があった。真有はひとりで父に会いに行く計画を立てた。

「お祖父さま、真有、アメリカに行ってきます。清子おばさまにはわたしが出かけたあとでお祖父さまから話して頂けない？ 来月のはじめまでに帰ってくるわ」

頭髮も眉もすっかり白くなった洪一郎は口を閉じたまま、しばらく真有の顔をまじまじと見た。

彼は真有がはじめて連れてこられたときのことを思い出した。真有は「おじいちゃまよ」という清子の声にも全然反応せずに、ひたすら飽きもせずに眼鏡を掛けた洪一郎の顔を珍しそうに観察していた。レンズに写っ

ている自分の顔に気が付き、おそろおそろ小さな手で眼鏡のガラスに触った。

あの小さな真有がすっかり大きくなって一人でアメリカへ行く。洪一郎は感慨深そうに目を細め、もう一度真有に目をやる。

「清子おばさまには真有から言ったほうがいいんじゃないかね」

「でもおばさまは許してくださいさらないわ」

「わしも反対だよ。真有が一人で行くなんて……」

「おばさまには内緒にしているね、出かけるまでは」

洪一郎は軽く頷いたが、別に真有と口止めの約束をしたと思っていなかった。

真有は自分の部屋に戻ると、パソコンの電源を入れ、メール用のソフトを起した。マウスを動かし、マウスをクイックしたとき、彼女は一瞬、父を思い浮かべた。

期待していた父からの返事はなかった。真有はうつろな目でしばらくディスプレイの画面を見るとはなしに見ていた。

真有は気を取り直すと、キーボードに向かった。

――三月二三日、U A 一六一八便でデンバー空港に着きます……

真有はディスプレイに打ち出された文字を見ながら、発信しようか迷った。

「真有が有平を訪ねたいらしい」

清子は箸を持ったまま、開けた口を震わせ、しばらく洪一郎の顔を見て

いた。

「……真有が……、一体なにをにアメリカへ行くというの」「すぐ戻ってくるらしいが……」

洪一郎は感情を高ぶらせている清子をなだめるように言う。

20

有平は研究室に戻ると、机の上に足を投げ出し、会議室で突然湧くように現れた氷晶片群が凝結するイメージを思い浮かべた。何度か思い返えすがなにかが足りない。なんとなく違和感を覚え、それが徐々に深まっていくのを感じた。どこから違和感が生じてくるのだろうか。彼はひとつひとつその源らしいものをつぶしていく。だが容易に原因を探り当てることができなかった。

彼はもう一度あのイメージを思い浮かべる。イメージは静止画面のようになって動こうとしない。どうしようもなかった。彼は思いあぐね、見知らぬ土地にひとり置き去れされたような戸惑いを感じた。

「失礼、一寸お邪魔していいですか……」

開けたままにしてあるドアのところに、ひよろひよると背の伸びた細い華奢な体躯の男が笑みを浮かべて立っている。

有平は相変わらず足を投げたまま、笑みを浮かべて立っている男を見上げた。彼の頭の回路が記憶を求めてゆっくり動き始める。会議室で質問した若い男だった。

そのとき、ひとつのイメージが現れた。

「臨界を超えて氷粒子の氷晶片が増えていくと……」

口のなかで呟きながら、有平は机から足を引いて、立ち上がった。

「なにかご用ですか」

若い男は机の椅子から不意に立ち上がった有平のつぎの動きを待っているのか、ドアのところに佇んだまま、口を動かした。

「ハンソンと言います。……実は……、『ノアの大洪水』プロジェクトに参加したいのですが……」

有平はハンソンに椅子をすすめ、自分は机に向かい、メモ用紙にさっきふと湧いた新しいイメージの問題点をメモしはじめる。

「氷晶片が限りなく増えつづけるのか、それとも限度（臨界）があつて途中で増えるのをストップするのか。」

「もし限度無しにどこまでも増えつづけていくとなると、氷晶片が地球を覆い尽くすことになるのか。そうなれば地球システムはどうなるか、地球システムにどんな影響をおよぼし、地球にどんなことが起こるか。」

有平はこれまで夜光雲を形成する氷晶片が臨界を超えて集中集積するよ  
うなことを考えていなかった。というより「ノアの大洪水」のことが頭に  
あつて、大洪水をもたらす大雨のみを無意識のうちに想定してしまつてい  
たのだ。そのため、集中集積した氷晶片がある段階で大雨に変わる臨界が  
あるものとあらかじめ決めていたらしい。氷晶片の集中集積が臨界に達す  
れば当然「天の水門」が自動的に開かれると考えていたのだ。だが氷晶片  
の集中集積に限度がなく、そこに大雨を降らすような臨界が存在しないと  
すればどうなるか。中間層に限りなく氷晶片が集中すると一体どんなこと

が起こるのか。いつかは「ノアの大洪水」をもたらす大雨が降るとしても、  
その間にさまざまなことが起こるのではないか。

だが大気圏である中間層に臨界を超えて氷晶片が限りなく集中集積する  
ということが考えられるのか。氷晶片にも重力が働くことを考えれば、  
中間層に氷晶片が限度を超えて増大し、集中集積し続けることはありうる  
のか……

彼は突然湧いたイメージをふたたび思い浮かべる。

中間層に夜光雲が広がって、氷晶片がガラス球のように地球を覆うのか。  
夜光雲が地球全体を覆うとしても、その過程はどうか。氷晶片が均一に拡  
がっていくのか。それとも最初は南北の極を中心とする高緯度上空に氷晶  
片が極端に集中集積していくのだろうか。もし、片方の極上空に氷晶片や  
氷粒子が集中集積することになれば、地球システムのバランスが崩れ、自  
転軸（地軸）が揺らぎだすかもしれない。地軸が大きく揺らぐと、地球の  
回転速度に変化が生じるのか。地球の地軸そのものが回転し出し……、や  
がて、極をも移動していくことになるのか……。 *possint* か……。

不意に、有平の目の前に逆立ちゴマが現れた。回転している途中で逆立  
ちしてそのまま回り続けるゴマだ。彼は激しく頭を振った。

「こんなことはありません。いや、あるはずがない」

有平は口のなかで同じことを繰り返しながら、ハンソンと名乗る若い男  
を振り返った。突然漏れた呟きに、若い男が目を丸くして彼を見ている。

「あ、失礼。ところで、なにかご用ですか」

「はあ？」

ハンソンは有平がなにも聞いていなかったことに気付いたらしく、同じ  
ことをもう一度繰り返した。

「新しいプロジェクトに加わりたいということですか。それであなたはなにをやりたいのですか」

「あのう、新しいプロジェクトではまず『ノアの大洪水』がいつどこで起きるかを予測するではありませんか」

ハンソンは不審そうな目を向けた。

「そうでしたね。それで『ノアの大洪水』の予測をしてみたいということですか」

有平はさつき頭に浮かんだ閃きを目の前の若者に話してみたい誘惑に駆られた。だが地軸が揺らぎ、その果てに地軸が回転するというイメージはあまりにも突飛過ぎる。こんなことはありえないことだ、と自分に言い聞かせ、彼はもう一度この突飛なアイデアに嚴重な封印を施す。

しかし若者のどことなくあどけない顔を見ているうちに、有平はこの若者に彼の頭に突然閃いたイメージをシミュレーションさせてみたい気がした。

「それでは試しにこのケースのシミュレーションをやってみてくれませんか」

「よろこんで……、で、どんなケースですか……」

「それは夜光雲を形成する氷晶片（氷粒子）が中間層に臨界を超えて集中集積するケースですよ」

「え？ そんなことがありうるのですか。臨界に達したら氷晶片が落下しはじめ『ノアの大洪水』が発生するんじゃないんですか」

「これまでわたしもそう考えていたので、こんなケースを考える必要がないと思っていましたよ。それもいい今し方まで……。でもそれは独断だったのかもしれないと、突然そんな気がしたのです。もしかしたら、氷晶片

は中間層に臨界を超えて集中集積することもあるかもしれない。いや、臨界そのものが存在しないということもあるかもしれないのだ。そこで念のために、一体、なにが起こるか、氷晶片が限りなく集中集積するケースについて簡単なプレシミュレーションをしてみたいのです」

「もしかすると『ノアの大洪水』をもたらすような大量の降水現象が起らないということになるのですか」

「その可能性がないことはない。そうであれば一番いいのだが、氷晶片が地球上空に大量に集中集積してもいかなる事象も生じないとは考えられない。そこで、そのときのケースについて一応極く単純なシミュレーションをしておきたいというわけですよ」

有平は南北の極から高緯度上空にまるで巨大な帽子のような氷晶雲の冠を被りふらふらつきながら自転する地球を想像しながら、半ばからかうような気持ちでハンソンの反応を待った。

「シミュレーションの結果ができました……」

あの日、キツネにつままれたような顔で去っていったハンソンが、数日してふたたび有平の研究室に訪ねてきた。

「氷晶片が臨界を超えて限りなく増大していくケースについて、簡単なシミュレーションをやってみました……」

彼は幾分興奮気味のハンソンの声に顔を上げた。ハンソンは持ってきたシミュレーションの結果をテーブルに広げた。

彼は順々にデータに目を通しながら、「『ノアの大洪水』は恵みの雨かと呟く。

「え？ なんですって、一体それはどんなシナリオですか」

「ふと閃いたところでは、地球システムにとって『ノアの大洪水』は恵みの雨になるかもしれないということですよ。もっとも『ノアの大洪水』後に人類が生き残っておればの話ですがね。地球は『ノアの大洪水』によってバランスを取り戻し、ふたたび安定した生氣ある地球となるでしょう」

「え？ バランス？」

「ひとつのシナリオはこうです」

有平は封印を施していたイメージを話した。

「そうすると『ノアの大洪水』は……」

「わたしの感じでは、氷晶片が限りなく集中集積すれば、地球はバランスを崩して自転軸を揺るがせ、地軸そのものが回転し出すことになるのではないか。この衝撃で中間層の氷晶片（氷粒子）が凝結して氷塊となって落下し、途中で溶融して大粒の水滴となって地上に降り注ぐことになるというものです。そこで臨界を超えて集中集積した氷晶片の行き着く先がどうなるか、実際にシミュレーションで確かめてみたかったですよ」

彼は臨界を超えて氷晶片が集中集積することはレアケースであり、その可能性は極めて低いと思っていた。地球がバランスを崩すほど氷晶片が集中集積することはまずあるまい。「ノアの大洪水」のほうがはるかに現実性があった。だがふと湧いた逆立ちゴマのイメージが妙に頭にこびりついて離れようとしなかった。

「といっても、実際に地軸を揺るがせるほど氷晶片が特定の箇所に集中集積するとは考えにくい……、それにどんなに集中集積しても重力の作用の方がはるかに大きいように思いますけれども……。むしろコンベアーベルトへの影響が……」

「氷晶片だけではそうかもしれない。でも、急激に温暖化が進んで、南極

やグリーンランドで棚氷や氷床が溶けたり、崩壊するようなことになればどうなるか。場合によっては、これが地球のバランスが揺るがず可能性がある。そこに極上空に纏わりついている大量の氷晶片（氷粒子）が作用して、さらにバランスを狂わせることになるかもしれない。太陽や月の引力によって、地軸の揺らぎがさらに増幅されれば、南極やグリーンランドで大量の氷床が海中に滑り落ちる可能性がでてくるというわけだ」

彼は「天の水門」が容易に開かれるとは思えなかった。その開閉メカニズムはもっと複雑なもので、氷晶片の臨界を超える集中集積によって自動的に開閉するとは考えていなかった。だが彼の頭のなかではバランスを崩した地球がぐるぐる周りだし、「ノアの大洪水」の再来を想起させた夜光雲が全然想像もしていなかった全く別の方向へと大きく転回しはじめていた。

## 21

有平は車の運転があまり好きでなかった。デンバー国際空港にはできたらシャトルバスで行きたかった。だが十年ぶりに会う真有のことを考え、車にした。

北米大陸は西部に山地が多く、中部から東部にかけて平野が広がる。ロッキーマウンテンの山麓の街ボルダーは一六〇〇メートルほどの高さにあるが、一マイルシティと呼ばれるデンバーと同程度の標高で、ボルダーからデンバー国際空港に通じる国道二六号線にはあまり起伏がなかった。

空は晴れ上がり、空気が澄み、ロッキーマウンテンの山々が早朝の陽光を斜め

から受けて浮かび上がっていた。彼は山頂の残雪が白く輝く山並みに目を走らせながら、窓を開ける。ひんやりとした空気が頬を撫でた。

真有のEメールを見て、有平はすぐサンフランシスコへ飛ぶことを考えた。そこでデンバー行きに乗り換える真有を捕まえるのだ。真有に早く会いたかった。一時間でも早く、真有の無事な姿を見たかった。

それにしても、なぜ急に一人でアメリカに来る気になったのだろうか。もしかしたら、清子が一緒かもしれない。いや、一緒にちがいない。中学を卒業したばかりの女の子がひとり外国へ行くことを年取った清子が許すはずがない。そう思うと、いささか懸念が薄れ、幾分気が休まったものの、清子と顔を会わせるかと思うと逆に気が滅入ってくる。

今更、真有を無断で連れ去った清子の勝手な行動を咎め立てするのも億劫だった。かといって、黙って放置してよいことも思えなかった。

有平は真有がサンフランシスコで乗換えるデンバー行きの便に空席があることを確かめてから、十分余裕をみて、その便が発する一時間前にサンフランシスコに着く便を予約した。

サンフランシスコ国際空港に七時三〇分に着く便の待合コーナーは、アタッシュケースを持ったビジネスマン風の男女で混んでいた。ハンバークを頬張りながら新聞を広げる若いビジネスマン、ミネラルウォーターのペットボトルとサンドイッチの包みを手に落ち着きなく歩き回る若い女性、搭乗券を手に仲間たちと会話を交わしている若い男たち、ひとり黙然と搭乗口の前に陣をとる中年のビジネスマン……。

久しぶりで空港にきた有平は立ち止まり、自分と同じ便に搭乗するひとびとが搭乗口から順々に吸い込まれていくのを物珍しそうに眺めていた。

一〇年経って、真有は大きく成長し、よちよち歩きのころと違い、顔つ

きもすっかり変わっているにちがいない。いまでも母親譲りの大きな目をしているのだろうか。彼は真有を見間違うことがないか、不安になった。せつかくサンフランシスコまで出迎えに行っても、真有を見つけないことができずにデンバーに戻るはめになりやしないか、そうなることが彼には一番つらいことだった。一〇年も会いに行かずに放置していた彼には、真有を見間違えても致し方ないことだった。そのときは、いさぎよく罰を受けるほかない。

待合コーナーに誰もいなくなつて、有平はようやくここを決めて搭乗口へ向かった。

サンフランシスコ国際空港に到着すると、有平はすぐデンバー行きの発着カウンターへ急いだ。

「真有？ 真有じゃないか」

待合コーナーに指定されているベンチの端に、帽子を被り、幾分俯き加減で座っているジーパン姿の少女を見つけ、彼は急ぎ足で近づいた。

少女は顔を上げ、有平を見た。大きく見開いた目に、不審の色があった。少女は「変な人」という目で一瞥すると、席を立ち、音もなく離れていった。

「パパ」と言つて、飛び込んでくる真有をしっかりと受け止めようと両腕を広げて身構えようとしていた有平は悄然として少女を見送った。それから思い出したように、少女の背に「失礼。人違いでした」と言った。

期待が完全に裏切られた。彼は胸に顔を押し付けて泣きじゃくっている娘を抱え、宥めるように背を軽く叩くこともできなかった。彼は空しく「あわてるな」と呟き、拳で自分の頭をコツンと叩いた。

有平は気を取り直して、ふたたび幅の広い通路の一方側に設けられている搭乗者待合コーナーを見渡した。窓際の沿って幾重にも並んでいる黒いビニールシートのゆったりしたベンチに体を投げ出し、搭乗のアナウンスを待っている乗客たちを端から順に追っていく。

真有らしい人影はどこにもなかった。

到着予定時間からかれこれ小一時間は過ぎていく。有平は再度、到着便を表示してあるディスプレイに近寄り、成田発サンフランシスコ行の便がすでに到着していることを確かめた。不慣れな真有はまだ入国手続きに手間を食っているのだろうか。

彼は国内線ロビーを出ると、急いで国際線の到着ロビーへ向かった。

だが成田発サンフランシスコ行の便の乗客らしい人影はすでになく、真有らしい姿もなかった。

デンバー行きの出発時間が迫っていた。有平は急いで国内線ロビーに引き返した。彼は真有にサンフランシスコ空港へ迎えに行くと伝えなかったことを後悔した。やはりデンバー空港で迎えるべきだったと思った。

デンバー行きのカウンターに戻ると、すでに搭乗が始まっていた。搭乗口に消えていく搭乗客の後ろ姿を見送りながら、有平はこの便に乗るべきか、それとももう少し真有を待つべきか、迷った。

そのとき、彼の後ろから、あたふたと駆け込むようにして背の高い男が搭乗口に近づいた。係員に搭乗券を渡し、小片を受け取ると急ぎ足でなかに消えていった。

ふと、後ろ姿がどこかで見た資格好のような気がした。有平はつられたように後を追って搭乗口へ向かった。

機内に入ると、有平は客室の入口に立ち止まり、乗客の顔を一人ひとり

確かめていった。乗っているはずの便にやはり真有の姿はなかった。

真有らしい年格好の乗客は見当たらなかったが、彼は念のため、乗務員に機内アナウンスで真有の呼び出しを頼んだ。だが無駄だった。

デンバーに到着したとき、有平は乗務員に頼んで一番先に降りしてもらい、未練がましく、降りてくる乗客を一人ひとりチェックした。

黒いサングラスを掛けた背の高い男が急ぎ足で彼の横を通り過ぎた。彼の直前に搭乗したあの男だった。彼は真有のチェックを一時忘れ、足早に立ち去る男の後ろ姿を追った。

「ハンソンじゃないのか？」

資格好がハンソンに似ていた。だがハンソンなら、彼に声を掛けそうなものだ。

乗客が去って、がらんとした待合コーナーのベンチに腰を下ろすと、疲れがどっと襲ってきた。有平はノートパソコンを取り出すと、真有からのメールが入っていないか、チェックした。

パパ

ごめんなさい。アクシデントが起きて、アメリカ行きは中止しました。また、メールします。

真有

有平はディスプレイのメールをいつまでもじっと見つめていた。一体、なにが起きたというのだろうか。

有平は真有のことが気になって、一時、帰国しようかと思い、アイトキンソンを所長室に訪ねた。

執務机で忙しそうに書類をめくっているアイトキンソンを見ると、有平はなんとなく帰国の件を言い出しにくかった。彼は空港で見たハンソンらしい人影を思い出した。

「ハンソンがわたしのプロジェクトに興味があるといつて、参加したいと言ってきましたが……」

アイトキンソンが一瞬顔を曇めた。

「彼はこのプロパーですか。それともどこからかの出向者ですか」

有平はアイトキンソンの顔の表情の変化になにかわくがありそうな感じがして、さらに訊ねた。

「彼はスタンフォードからの派遣ということになっているが、LR研究所からスタンフォード大に派遣された男だよ」

「そうすると……」

「そうだ。LRは軍と関係がある。いや、軍の研究機関だ」

有平は黒いサングラスの男がハンソンにちがいないと思った。だがあんなときなぜ、彼が有平を避けようとしたのか。あのとき、彼には自分がハンソンであることを知られたくない特別な事情があったのだろうか。

「ドクター掃木、そのことについては別に気にしなくともいい。いままで通り、このまま、研究をつづけていただきたい。ただ、中間大気の水分量が増えているというデータが報告されてから、彼らが特別の関心をもちはじめているようだ」

アイトキンソンは有平の気持ちを汲むように言った。

なにかを隠しているにちがいない。有平はハンソンのことが気になった。彼は一時帰国を夏の休暇まで延期することにして、そのまま引き返した。

ハンソンのことが気掛かりだった。「ノアの大洪水」の予測に興味があるといっていたが、中間大気の水分量が増大していることを知って、いよいよ「ノアの大洪水」が現実味を帯びてきたからにちがいない。だがこの情報が軍関係の独占物であってはならない。世界全体が「ノアの大洪水」を回避するための対策を一日も早く実行するために使われるべきなのだ。

半地下階にあるカフェテリアで昼食用のサンドイッチを求めて、研究室に戻ると、アイトキンソンから「すぐ連絡してほしい」というメモが残されていた。会ったばかりなのにといいながら、有平は受話器に手を伸ばした。

「ドクター掃木か。急だが、明日、ワシントンに一緒に行ってほしいのだが……」

受話器の奥から、アイトキンソンの囁れた声がした。

一瞬、これで完全に休暇が取れなくなったと感じた。

有平は昼食のサンドイッチを頬張りながら、アクシデントに会ったという真有のことを思い浮かべ、やはり、急遽東京に帰るべきかと思い返したところだった。

「明日ですか。また急ですね」

「例のハンソンが上役によからぬことを吹聴したらしい」

「彼が……」

やはり昨日空港で見かけた黒いサングラスの男が間違いなくハンソンだったのだ。

「きみと入り代わりによって来て、研究費を取ってきたというんだよ。聞き流していたところ、ワシントンから電話があつて、話を聞きたいと言ってきたんだ」

アイトキンソンの話し方にはどこか抵抗しがたい響きがあつた。

「……とにかく、きみがあのプロジェクトをマネージングしているのだから、イエスカノーかはきみが決めることだがね」

「で、ワシントンでなにをするのですか」

「科学政策に関する公聴会が開かれるが、そこで意見を述べることになった……」

「断ることはできないのですか」

有平はなんとなく躊躇いを覚えた。揺らぐ地球が頭をかすめ、妙な方向に研究が進められることになるのを恐れた。

「まあ、それは……、だがきみには『ノアの大洪水』対策を提唱するひとつのチャンスになるかもしれないと思うがね」

アイトキンソンは有平の気持ちを察したのか、軽い調子で気楽に言つてのけた。「ノアの大洪水」対策と聞いて、あえて断る気持ちが失せていった。ただ真有のことを考えると、幾分気が重かつた。

突然、大都市が大洪水に襲われ、水の底に呑み込まれていく情景が浮かんだ。取り残された子供や老人が助けを求めて手を振っている。赤子を抱いた若い女が流されていく。

彼は無意識のうちに洪水に流されていく人々のなかに真有の姿を探していた。

「ひとつのチャンスか……」

耳の奥でアイトキンソンの声が響く。彼の頭の中で熱い思いが駆け巡り

はじめた。彼はおもむろに受話器を戻した。

これでまた、清子や洪一郎には娘の真有がアクシデントに会つたというのに帰ってこない冷たい父親と責められることになりそうだった。有平に日本へ帰ってこられては困るのに、二人は機会あるごとに、こんなふうなことを言つて、真有と有平の間の距離を広げることに関心していたからだつた。

23

「お父さんに会つて、『ノアの大洪水』のことを確かめただけなのよ。もし本当に何年か後に来るのなら、お祖父さまや清子おばさまのためにどうすればいいのか聞いてこようと思つていたのに、勝手にキャンセルするなんて、あんまりだわ」

真有は目を吊り上げ、洪一郎と清子を交互に睨んだ。

洪一郎はそしらぬ顔でお茶を飲んでゐる。清子は真有の剣幕に恐れたのか、それとも長年の経験からか、口を嚙み、目だけをきよるきよると落ちて着きなく動かし、真有の様子を窺つていた。

清子にはただ実行あるのみだった。真有のアメリカ行きを洪一郎から知らされると、真有が予約した航空会社を探しだし、すぐ電話して予約を取り消してしまつたのだつた。

「兄さん、『ノアの大洪水』って、なんのこと」

洪一郎は顔を上げて、真有にちらっと目を走らせてから、清子の方を向いた。

「『ノアの大洪水』が再来するなんて、あんなものはデタラメだ。たとえ、大洪水になってもここは大丈夫だ。高台だから心配ない」

洪一郎は真有がそんなことを心配することではないと考えているらしく、不機嫌そうな面持ちでぶっきらぼうに言う。

真有はぶついと立って、部屋を出た。父のことになるとどうしていつもこうなのかしら、このひとたちには父に対してなにか強い恨みでもあるのかしら。背に二人の強い視線を感じたが、彼女は振り返るつもりはなかった。

真有には老いた二人の気持ちは痛いほど分かっている。かといって、伸びようとする頭を押さえつけるものは力づくでも除けるほかないという思いが強かった。

近ごろ、なぜか父有平と一緒に草花が咲き誇っている野山を駆け巡ったころの懐かしい思い出がたびたび思い出されて、真有を苦しめた。

あの日、階段講堂で有平の声を聞きながら眠ってしまった。気がついたときには、初めて会った清子おばさまの腕のなかにいた。その日も、保育園に行っているときのように、有平が迎えにきてくれるものと思い、眠い目を擦りながら、いつまでも待っていた。保育園にはいつもいくら遅くなっても、父は必ず迎えにきてくれた。

その日はいくら待っても、父は現れなかった。そのつぎの日も、またそのつぎの日も父は姿を現さなかった。真有はこんな風に父が迎えにくるのをこころ待ちしてこの一〇年を過ごしてきた。

真有はいまになって、あのとき、迎えに行くと言ってきた有平の電話になぜ素直に喜びを表現できなかったのか、と後悔した。洪一郎と清子に育てられているうちに、いつのまにか、自分の気持ちを抑えるようになっていた

のかもしれない。だが気持ちを抑えて後悔するくらいなら、素直に自分に従うほうがいいと思う。

真有はいま、父に無性に会いたかった。サンフランシスコまで出迎えにきてくれたことを知ったとき、彼女は思わず涙ぐんでしまった。

パパ

真有です。サンフランシスコまで迎えに出ていただいたのに、本当に残念でした。心配する清子おばさまの実力行使に会い、この度のアメリカ人旅が頓挫してしまいました。つぎはどうしても成功させます。このつぎは今回の教訓を生かして、誰にも言わずに、単独で決行することになります。突然パパの目の前に現れますので、びっくりしないようにしてください。ではそのときをお楽しみに。

真有

追伸として、真有は「お祖父さまは『ノアの大洪水』が来ても、高台に住んでいるので大丈夫だ、と言っているけど、本当ですか」と書き加えた。

24

「ドクター掃木がワシントンに行きました。公聴会に出席するそうです」

ハンソンは受話器の奥から聞こえてくる声にときどき頷いていたが、しばらくして「分かりました」と言うと、静かに受話器を戻した。それから、やれやれというように、ゆっくり腕を広げて伸びをすると、両足を机に乗せ、一片のコピーを取り出した。

有平の研究報告を聞いて、LR研究所の上司に概要を報告すると、即座に彼はプロジェクトへの参加を命じられた。そのうえ、呼び出されて詳細な説明を求められた。

コピーはそのとき受け取ったものだった。

そこには、最近中国南部を襲った歴史的な大洪水の被災規模や損失のおおまかな数字があった。概要はつぎの通り。

被災面積 二二〇万平方キロ  
被災者 三億三〇〇〇万人  
死者 三〇〇〇人  
倒壊家屋 六〇〇万戸  
損壊家屋 四三〇〇万戸  
収穫不能農地面積 一五〇〇〇万ヘクタール  
経済損失 三〇〇〇億ドル以上

注：今回の大洪水の経済損失は中国の国内総生産（GDP）の一〇ないし一〇数パーセントに達する。

「洪水が完全に引くまで、二、三ヶ月も要したそうさ。中国の主要工業地帯である長江流域で洪水が長期化すると生産活動が長期にわたり停滞する。鉄鋼や機械産業などが集中する武漢では原材料の入荷がストップ、電力供給が不足、従業員の避難などで操業率が低下した。これに広い範囲にわたる農産物の収穫減に加え、つぎの作付け不能などによる膨大な農業被害が出た」

ネルソンは灰色の口ひげを親指と人さし指で軽く摘みながら、反応を確

かめるかのように上目遣いにハンソンを見ている。

ハンソンはこの上司が苦手だった。権威主義的なところがあって、話が回りくどい。そのうえに、どことなく陰気くさい感じがして、彼はざっくばらんに口をきくことができないのだ。

「『ノアの大洪水』が中国を襲えば、壊滅的な大被害を受けることになりかねないということですか」

「もし気候を容易に操作でき、国のGDPの数一〇パーセントものダメージを与える大豪雨を自由に降らすことができるようになると、世界の力関係はどうなるか。洪水や干ばつの発生を自由に操作できる技術の戦略的価値は計り知れない。その価値は使うに使えない核兵器の比じゃないぞ」

ハンソンは沈黙したまま、とんでもないことを考えている目の前の陰気な男のバクバク動く口元を見ていた。

「中間大気に氷晶片が溜まっているというんだな」

「はい、そのようです」

「臨界に達すると、なんらかの刺激で氷晶片が凝結して氷塊となって落下する可能性があるというのか」

「ええ、まあ」

「その辺がはっきりしないというわけか」

「はい」

「臨界を促すような刺激を人工的に与えることが可能かどうか。その結果はどうなるかを調べる必要があるな。それと中間大気の観測強化だ。とにかく、データを増やさなくちゃならない」

ハンソンはなにかに憑かれたように光っている上司の目をじっと見た。

地球温暖化が暴走しだし、ハリケーンの超巨大化や大干ばつなど気候異変

異が頻発しているところに、さらに人為的に大雨を降らして、世界中で大規模な水害を引き起こそうというのか。

ハンソンはいま耳にした電話を思い返した。

「環境兵器か」

ハンソンは呟く。彼はまだ半信半疑だった。昨日、ネルソンの光る目を見て、彼が本気で気候を操作できると考えているとは思えなかった。研究費獲得のためのシナリオを描いているに過ぎないと思ってしまうのがたのだ。

たとえ、夜光雲群が満々と水を貯えた天空のプールだとしても、簡単に水門を開くことができるはずがない。もしうまく水門が開けたとしても、吐き出された大量の水が、乱流が渦巻き、季節的に風向が変わる強い風が吹く数十キロにもわたる中間大気を通り抜け、思うように目的地目指して落下させることができるのか。中間大気を無事通り抜けても、今度は厄介で気まぐれな対流圏が待っている。一体、これらをどうやって操作しようというのか。

このようなことは簡単にできることではなかった。だがこちらができないと諦めても、敵がやるかもしれない。敵がやるなら、無駄なことと分かっているても、一〇〇パーセント駄目でないかぎり、試みなければならぬのが軍事科学技術の世界だ。敵の敵もそう考え、きりのないエンドレスの開発競争が続くことになる。

「ワシントンに乗り込むというなら、勝手にするがいいさ。おれはまっぴらだ。あんなところで、アイトキンソンやドクター掃木に顔を会わせるのは……」

ハンソンはむっつりしたネルソンの顔を思い浮かべ、彼に同行せず済

んだことをよるこび、思わずにやりとした。

25

「あの男はLRの……、確か、ネルソンというハンソンの上司じゃないかな。なぜこんなところに来ているんだ」

アイトキンソンが委員席のほうに目をやりながら呟き、「議長席の右隣の委員の後ろの席だ」と有平の耳元で囁いた。

意見陳述人に向かって開かれた馬蹄形の委員席はフロアより一段高いところにある。委員席の後ろにも席が用意され、委員をサポートするためにスタッフたちが陣をとっている。

短軀でつぶりした委員長が席についた。

「では、これから公聴会を開きます」

米国議会では法案や施策に反映させるために、一般国民のなかから利害関係者や学識経験者を呼び意見を聞く公聴会が広く利用されていた。またこの国では権力分立主義が厳格に採用されているため、立法部と行政部の関係も切断されているので、立法部である議会が行政部の意見を聴取したときにも公聴会を利用する。

「大気の上層、ことに中間層の上層部に氷粒子が増えていることが判明し、いよいよ『ノアの大洪水』説が現実味を帯びてきたと指摘されています。本委員会はこの件に関していかに対処すべきかについて、関係者から意見を聴取しているのですが、本日はこの説の主唱者で、現に当の研究プロジェクトを担当しているドクター掃木に出席いただきました。まず、現在の状

況について、概略のご説明をいただきましたように」

有平は委員長と委員に謝辞を述べ、「ノアの大洪水」の概略を説明する。

「只今、概況についてご説明を頂きましたが、つづいて、質疑に移ります……」

議長役の科学政策小委員会の委員長は小柄でつぶりとした血色のいい好々爺といった感じの老人だった。概略説明途中の質問は専ら委員に任せ、陳述人の意見や答弁に耳を傾けることが多かったが、質疑に移ると、

「最初に、わたしからお訊ねします」と言って、目を輝かせた。

委員たちの視線が、有平に集中した。彼は軽い眩暈を感じた。

「中間層上層に氷晶片の氷粒子が増加しているそうですが、今後増加し続けるものですか。もし増加し続けるものとすれば、それはいつまで続くのですか。その結果、どういうことになるのですか」

「氷粒子は今後とも増加し続けることでしょうか。そしてこれ以上増加することができない臨界に達したら、なにかの拍子に地上に落下することになるでしょう」

「その結果、『ノアの大洪水』が襲うというのですか。それはいつごろどこで起こるのですか」

「モデルを使って、現在、検証中です。まだ、結果が出ていませんので、正確には申し上げられません」

「あなたが以前書いたペーパーに低緯度で夜光雲が見られるようになればその二〇年後に『ノアの大洪水』が起こるという記述がありますが……、これについてはどうですか。現在もそのように考えているのですか、それとも……」

「……そのように……」

背後の傍聴席がざわめいた。

「静粛に。もう一度お訊ねしますが、いまあの予測通りに『ノアの大洪水』が発生するかと考えておるのですか」

「ええ、もし氷粒子に臨界が存在すれば……」

有平は額に汗が滲んでくるのを感じた。

「ノアの大洪水」が発生すると、大量の淡水が海洋に流れ込む。もし北大西洋に大量の淡水が流れ込めば深層水の生成が妨げられて、海洋大循環のコンベアーベルトの動きが弱まるとともに、北上する暖流も弱まり、これが高緯度地域の温暖化が抑えられることになるが、やがて世界は寒冷化へ進むことになるだろう。

一方、これによって行き場を失って赤道付近に溜まった熱が大気になどな影響をおよぼすだろうか。寒冷化への移行過程でさらに激しい気候異変を呼び起こすかもしれない。

「臨界が存在しないときはどうなるのですか。お空に氷粒子が限りなく溜まっていくことになるのですか。そのときは『ノアの大洪水』も起きないということになるとお考えなのですか」

質問は彼の想定を超えて先に跳んだ。

「まあ、そうなりますが……、でもそれで落ち着くとは考えられません。別の現象が引き起こされることになるでしょう」

「いったい、なにが起こるのですか」

ネルソンが後ろから身を乗り出し、委員の耳元に顔を寄せている。有平はアイトキンソンを振り返った。

「はっきりしたことは言えませんが、考えられるひとつのシナリオは……」

有平は自分が言おうとしていることを頭のなかで繰り返し返した。

「……自分でもあまりにも突飛過ぎると感じているので、科学者としてこんなことを言えば響きを買うことは十分承知しているのですが、問題が問題ですので、この席をかりてあえて言います。社会に対して警鐘を打ち鳴らすことも、科学者として果たすべき責務のひとつであると信じているからです……」

「どうぞ」

委員長は鷹揚に応じた。

「委員長、休憩を動議します」

突然、ひとりの委員が発言した。ネルソンの前の席の委員だ。

委員長は質疑を中断されたことが不満なのか、発言した委員の顔をしばらくじっと見ていた。それから全委員を見渡して「一〇分間の休憩をいたします」と告げると立ち上がった。発言した委員が後を追ってドアの外に消えた。

「どうしたんだ。ネルソンのやつ、なにか企んでいるな」

アイトキンソンが有平に耳打ちした。彼も発言した委員の耳元でネルソンが囁くのを目撃していた。

「公聴会を再開します。これからは非公開とします。関係者以外は退席願います」

委員長はしばらく間を置いてから、有平に発言の続きを促した。

「臨界密度に達した氷粒子はなんらかの刺激が加えられると氷塊に成長して落下すると考えられるのですが、臨界密度を超えても氷粒子が氷塊にならず、過度に集中集積することになると……、それは南北の極上空の中間

層上層付近に集中集積することになると思われますが……」

彼はここで一区切りして、用意されているペットボトルのミネラルウォーターを一口飲んだ。

「……氷粒子の集中集積が限りなく進むと……」と言いかけて、彼はふたたび言い淀む。

彼はこれから言おうとすることをもう一度確認する。一瞬逡巡が走った。回転しながら不意に逆立ちして回り続ける逆立ちコマが浮かんだ。回転しているコマが一瞬のうちに頭だったところが底になった。回転軸が逆転してもコマは何事もなかったように勢いよく回りつつづけている。

「……地球はバランスを崩すおそれがあります。たとえば、地球の自転軸、すなわち地軸が揺らぎ、自転が次第に不安定化して、新しい大きな揺らぎを引き起こすかもしれません。地軸は現在も傾き多少揺らいでいますが、揺らぎがさらに大きくなると、思わぬことが起こることでしょう。衝撃で南極大陸の棚氷や氷床が海中に滑り落ちるかもしれません。今後、これらについてシミュレーションで確かめるつもりですが、地球のバランスが急激に変化するとどうなるか。わたしは自転軸である地軸が大きく揺らぎ、地球が思わぬ動きをはじめたのではないかと心配しています。場合によっては、地軸自体が回転し出すことも考えられます。こんなことが起こらなければいいのですが……、残念ながら、可能性がゼロではありません」

彼は一気につつづけた。

しばらく、静寂が支配した。それを破ったのは委員長の唸れ声だった。

「それはいつごろ生じるのですか」

彼は委員長の顔をじっと見上げた。

しばらくして彼はおもむろに口を開く。

「氷粒子の集中集積の具合次第です。そのスピードが早ければ、早い時期に生じることでしょ」

「もし現在のスピードで進むとすれば、自転軸が変な揺らぎは始めるのはいつごろになりますか」

「現在、シミュレーション中ですが、そんな先の話ではありません」

「それはわたしが生きている間の出来事でしょうか」

「多分、委員長はそれまで長生きなされていることでしょう」

「え？ 本当かね」

「それはいつやって来るか分からないような何千年あるいは何万年先といった遠い未来の話では決まてないのです」

一瞬、議場がどよめいた。

「……ところで、そのようなことにならないための対策は考えられないのですか」

「根本的な対策は中間層にこれ以上氷粒子を増加させないことです。このためには氷粒子のもととなる水分が中間層まで上昇していかないようにすることですが、それには大気中の水蒸気量を増やしている地球温暖化そのものを早急に抑えることが肝要です。とにかく二酸化炭素などの温室効果ガスの排出を早急に削減することです。でも氷粒子の集中集積が差し迫った状況になれば、これを排除するためにさらに即効的で強烈な対策を実施する必要がありますかもしれないですね」

「そのような対策とは……」

「即効性を期待できる次善の策として、取りあえず考えられる唯一の方法は、中間層に溜まっている氷粒子を取り除くことです」

「どうやってそれらを取り除くのですか」

「人為的に刺激を与えて、氷粒子を凝結させて氷塊を形成させ、落下させればいいのですが……」

彼は自分がつんでもないことを言い出していることに気付かなかった。

氷粒子の異常な集中集積という事態をまえにしてあせりがあった。この際できることはなんでもやっておくべきだという思いが強かった。

「なるほど、人工降雨の手ですな。でもそれは人工的に『ノアの大洪水』を起すことになるのでは……」

「ええ、そうです。もちろん、被害が生じないように、たとえば太平洋の真ん中にも人工降雨を降らせるようにすればいいのです」

「なるほど」

「でもこのような技術が悪用されると、とんでもないことになる。まさにこの技術は気候をコントロールするものであるからです。この種の対策は国際的に管理して実施すべきものです」

有平は幾分調子よく応える。そのとき、赤い顔をした委員の手が上がった。

「委員長、発言してよろしいですか」

「どうぞ」

「委員長、『ノアの大洪水』予言といい、自転軸の回転と言い、SFとしては面白い話ですが、こんなことは現代科学から見ても、荒唐無稽なことです。大体、今世紀中にこんなことは起こるはずがない。科学者の多くはいまもって『ノアの大洪水』説を支持していません」

今度は、赤い顔の委員はくるりと向きを変え、有平を指さした。

「ドクター掃木、あなたにお訊ねしますが、あなたは日本の科学アカデミーから追われてアメリカ合衆国へ来たということは本当ですか」

「はい、その通りです。それにわたしの『ノアの大洪水』説を多くの科学者が支持していないのも事実です」

有平は悪びれずに、冷静に応えた。彼の余りにも率直な受け答えに気が殺がれたのか、当の委員は一層顔を赤らめ、口をもぐもぐさせ、口ごもってしまった。

「新しい学説は往々にして古い立場から迫害を受けるものです。質問はありませんか」

委員長は有平に笑顔を向けた。

26

非公開のはずだった公聴会での委員長とドクター掃木のやりとりがマスコミに漏れていた。彼のもとにマスコミからの取材が引っ切りなしに続いた。それよりも彼を悩ませたことはパニックの発生を恐れた当局からの箝口令だった。

「シミュレーションの結果はマル秘扱いで、一切外部発表は禁止ということになった。やれやれ、なんちゅうこった」

アイトキンソンが言いにくそうな顔をして、有平を見た。

「……かといって、ここまで社会の関心を集めた以上、この仕事を中止するわけにもいかないだろうし……」

「止めるつもりも、手を抜くつもりありませんよ。心配なく」

心配顔のアイトキンソンを元氣付けるようにいったものの、有平は内心ではさっさとプロジェクトから手を引くことを考えていた。

科学者たちの支援があればともかく、彼らは支援どころか、有平を白い目で見、足を引っ張ることさえ厭わなかった。母国日本の科学者たちの白い目や迫害をバネにして、これまで研究成果を上げてきた有平であったが、異国でひとり孤立して研究を続けるにも限度があった。

一応夜光雲を形成する氷粒子が増加していることを明らかにして、彼の研究も一段落したところであった。この成果を手を、帰国することもできた。それが思わぬ展開で、プロジェクトをさらに進める羽目に陥ってしまった。研究者としてはむしろ誇るべきことかもしれない。だが一人娘をたつたひとり日本に置き去りにして、単身で一〇年にもわたり研究を続けてきた彼は、実のところ、精神的にすっかり疲れ切ってしまった。

「そうか。ところ、ハンソンのことはどう処理したのかね。プロジェクトに参加させるのか、それとも……」

「環境兵器の開発に利用されるのはご免被りたいところです。でもその技術は『ノアの大洪水』対策としても利用できるものです。わたしの見るところでは、兵器として利用するよりも、対策として用いるほうが先になるのではないかと思います」

「もしLRが本腰で環境兵器の開発を始めるとなると、うちもかなりの影響を受けることになる」

アイトキンソンは有平の目をじっと見た。そして自問自答するように続ける。

「……協力要請があれば断れないだろうなあ……。まあ、地軸揺れ予防対策用の技術として開発研究に協力することにすればいいか」

有平には真有のことが気掛かりだった。プロジェクトを新しく展開させるとなると、それに時間が取られ、一段落するまでは、また日本に帰れな

いことになるだろう。とは言うものの、有平にとって、これによって拘束される時間は一種の冷却期間になるかもしれない。「ノアの大洪水」であるな仕打ちをした日本の学会が、また人騒がせな地軸の揺らぎや回転を言い出した彼を歓迎するはずはない。

有平は結局、新プロジェクトに賭けることにした。

親愛なる真有へ

元気ですか。パパです。

このまえの「ノアの大洪水」に関する質問ですが、現在、いっどこで起きるかについてシミュレーションをやっているところです。その結果が出れば、真有の問いにかなりはつきりと答えることができるようになるでしょう。

それから高台にあるお祖父さまのお家でもやはり「ノアの大洪水」のための対策が必要です。高台だからといっても知れたもので、安心できません。とにかく、大洪水ですからね。対策が必要ですよ。

こちらではいま「ノアの大洪水」対策用の「箱船キット」が売り出されています。定員一名の単身用から数名の家族向けのものが出回っています。いまは手が離せないので無理ですが、「箱船キット」を持って帰り、一緒に組み立てることができればいいのですが……。ではまた書きます。

有平は真有へメールを送ったが、結局、地軸の揺れなど、新しい考えについてはなにも触れなかった。複雑なことを言って、かえって混乱するといけないと思ったからであった。でももしかしたら、真有はマスコミを通して、すでに彼の新しい見解を知っているかもしれない。それならそのこ

とについて真有にもっと詳しく話して聞かせたかった。そうしないうちに地軸の揺れが生じるようなことになったら、夜光雲について真知に詳しく話さなかったことを悔いたように、またそのことを一生後悔し続ける羽目におちいるかもしれない。彼は真有に会って詳しく話して聞かせるために、一日も早く、日本に帰ろうと心に決めた。

だが果たして「ノアの大洪水」前に帰国できるか疑わしかった。公聴会での彼の発言が関係筋に思わぬ波紋を投じていた。

## 第三章

27

「まず、中間圏の氷粒子が凝結して氷塊になるメカニズムと凝結手段を調べることにしよう。これらの目処が付いたら、早速、実際に中間圏で小規模な凝結実験をやってみよう」

「ドクター掃木、本当に中間圏で現地実験をやるのですか」

ハンソンが目を丸くした。

「そうだ」

「でも……、中間大気（中間圏と成層圏）の大気モデルや対流圏の大気モデルはどうするんですか。これがないと地上のどこに降水があるか予測できないじゃありませんか」

「中間圏での氷粒子の凝結箇所と実際の地上での降水範囲から氷塊落下におよぼす中間大気の構造や対流圏の気象条件を探るのだ。これらの観測データをもとにモデル化すればいい。もともとデータのないところだ。それに既存のモデルをできるだけ活用するようにすれば、さらに時間の節約になる。とにかく、急ぐことだ。のんびり構えていたら間に合わないかもしれない」

有平の新しいプロジェクトがハンソンを加えて本格化した。彼は次第に新しいプロジェクトに没頭していった。

有平の頭の中では、彼の理論を否定し、彼を白眼視した学会や科学者たちの言動が消えることなく鮮明に生き続けていた。彼らの目の前に予測し

た通りの「ノアの大洪水」が出現し、自分の理論の正しさを有無を言わず認めさせたかった。

こころのどこかで、ひそかに「ノアの大洪水」の到来を心待ちにしている自分に気付くことがあった。とうとう中間大気中に氷粒子が増大し続けているというデータをえたとき、有平はこれで仕事が終わったと思った。仮説が実証されたのだ。彼は「箱船」にでも乗って、静かに「ノアの大洪水」の到来を待っていたい気持ちだった。

A C A Rでの研究に終止符を打とうと、データを示して中間大気中に氷粒子が増大し続けていることを報告すると、状況が一変した。彼が予言した「ノアの大洪水」が俄然現実味を帯びだしたのだ。その瞬間、事態が一転して、「箱船」でのんびり過ごす彼の夢を木端微塵に打ち砕いてしまった。

ラップから「ノアの大洪水」予測をけしかけられたうえ、これに加えて、公聴会で発言することになったことが有平の思惑を完全に狂わせてしまった。だが彼にはこれらの一連のことがなんとなく彼を手放したくないアイトキンソンによって仕組まれたことのような気がした。

とはいっても、彼自身、日本に帰ったところで、学会や行政が彼の説を真剣に取り合うとは思えなかった。せいぜいマスコミが賑々しく取り上げるかもしれないが、それも一時の短い期間で、いずれ「箱船」造りの狂人ぐらいの扱いしかなくなるだろう。とすれば、アイトキンソンが仕組んだことであっても、むしろこの機会を利用して、研究を続けることがいいのではないかと彼には思えた。それがたとえ悪魔との契約になろうとも、この機会を地軸揺らぎ対策に利用できるなら、人類絶滅の危機に際して手を拱ねているよりましというものだ。彼自身全然気付いていなかった

だが、彼はこの対策で人類を絶滅から救えるかもしれないとすっかり思い上がったのだった。

有平はプロジェクトを進めるにあたって、考えうる選択肢をあげ、いかにすれば効率良くプロジェクトを遂行できるかを考えた。とにかく早くシミュレーションの結果を知りたかった。

だが夜光雲を形成する氷粒子の臨界時期の予測が思いのほか難しかった。大体、氷粒子の臨界そのものをチェックする方法がなかった。さらに、たとえ氷粒子が臨界に達したとしても、どんな刺激を与えればそれが凝結するかも見当つかなかった。

とにかく、中間圏ではどんな刺激のものが存在し、それがいかにして効果を発揮するか分からなかった。もしならかの刺激も存在しなければそのまま氷粒子が臨界を超えて増加していくことになるのかも不明であった。

それでもこれらのことは試行錯誤を繰り返せばなんとか実験で確かめることが可能であったが、凝結させた氷粒子が氷塊となって地上に落下するときに問題だった。氷塊は中間圏から成層圏までの大気すなわち中間大気と地上に近い対流圏を落下するが、氷塊が通過する長い道においてさまざまな気象条件に左右されてようやく地上に到達することになるからである。

氷塊とはいえ、地上には水滴となって落下するにちがいないが、降水範囲を高い精度で予測するには中間大気の詳細データが決定的に不足していた。ことに強い乱流が起こっている中間圏界面付近のデータが十分ではない。そのため、観測を強化し、必要なデータを確保することからはじめなければならなかった。それにはかなりの時間が必要であった。それから予測を行うことになると、結果が出るのはさらに先になってしまう。

思いあぐねた結果、彼はこんどのプロジェクトをいくつかに分けて実施することにした。かといって、有平は単純にプロジェクトを分割することはしなかった。彼にはべつの思惑があった。だがこれがあだとなった。

ハンソンはドクター掃木が急に仕事を急ぎだし、氷粒子凝結の現地実験をすぐにも始めたがっていることをネルソンに報告した。

「それはこちらにとっても好都合だ。こちらでも現地実験には全面的に協力すると伝えておいてくれ」

「……そうですか。それでいいんですね」

ハンソンはいつも軍との関係を伏せて、正体を決して見破られないよう行動に必要以上注意してきたネルソンの豹変ぶりに驚いた。それよりも、彼はむしろドクター掃木の態度の変化が気になった。なにを企んでいるのだろうか。間に合わないとはどういうことか。一体なにが起こるといえるのか。

「ドクター掃木、一体なにが起こるのですか。『ノアの大洪水』ですか」

「かもしれない……」

「『ノアの大洪水』じゃないんですね。それではなにが……、例の地軸が揺らぎ、極が移動する……」

「うん、そうかもしれない……」

「でも、それらはもっと先のことではないんですか」

ハンソンはネルソンが開発しようとする環境兵器を思い浮かべた。現実の現象として「ノアの大洪水」が目の前に迫っているとすれば、こんな環境兵器を考える必要はないはずだ。ネルソンには「ノアの大洪水」が現実になることなど、はじめから眼中にないのだ。だからこんな環境兵

器を開発しようとする……。

ここまで考えてきて、ハンソンはネルソンが「ノアの大洪水」対策技術を環境兵器化しようとしていることに気付いた。これに対して、ドクター掃木は逆に、環境兵器を「ノアの大洪水」の対策や地軸の揺らぎ対策に用いようとしているのだ。

ハンソンは二人の思惑に近い将来襲ってくる惨事を予感した。得体的にれない恐怖が全身を貫いていった。

28

有平は毎日送られてくる中間圏の氷粒子と地軸の観測データに変化が現れていないか注意深く見守った。データはオンタイムで世界中から送られてくる生の観測データを研究センターの並列型スーパーコンピュータシステムでリアルタイムに転換し、再生した最新のデータだった。

その一方で、彼は「天の水門開閉実験」プロジェクトと名付けられた中間圏における氷粒子の凝結実験を開始することを決心した。

この現地実験は氷粒子が集中集積している中間圏に凝結の核となる物質とトレーサーをロケットで打ち込み、氷粒子を瞬時に氷塊にして重力によって落下させようというものである。このときできた氷塊が落下途中に大気中で溶け、大粒の水滴となって地上に降下するが、これを観測して凝結効果をチェックする計画だった。

有平はこの実験にネルソンの協力を仰いだ。彼は最初からネルソンの研究協力を当てにしていた。ハンソンを参加させると決めるときから、彼の

頭のなかにあったことだった。とにかく、対策を急がなければならない。これには現存するあらゆる力や組織を利用するほかなかった。

有平はアイトキンソンが箱口令を口にしたとき、あらゆる力や組織の利が可能なになったことを知った。と同時に、容易なことでは米国から出国することができなくなったことを薄々感じ取った。

かといって、彼には環境兵器の開発に与する考えは微塵もなかった。彼はこの機会を徹底して利用し、大規模な「ノアの大洪水」の未然防止対策を実施しようとしたのだ。

もし「ノアの大洪水」が起き、大量の淡水が北大西洋に流れ込むようなことになれば、深層水形成を妨げ、北大西洋発のコンベアーベルトをストップさせ、海洋の深層水大循環を阻害することになるかもしれない。その結果、地球上において大量の熱エネルギーを運搬している海流が変化し、地球の熱分配システムが大混乱をきたし、気候システムが狂い、気候大異変を頻発させることになるだろう。

かといって、もし中間圏に氷粒子が臨界を超えて集中集積するようになると、「ノアの大洪水」が発生しないかわりに地球のバランスが崩れ、地軸の揺らぎから地軸回転を引き起こしかねないのだ。

双方を回避するためには、一刻も早い機会に、中間圏に集中集積しはじめている氷粒子を解放する必要がある。

有平はこの現地実験をネルソンに任せた。実験は極秘密裏に実施することと、規模は必要最小限に止め、氷粒子凝結剤とトレーサーには環境に影響を与えない物質を用いることが条件だった。

ネルソンは軍の関係機関の協力のもとに、いろいろなトレーサー候補物質を取り寄せてチェックを繰り返した。実験のフィールドもカナダの協力

をえて、北米大陸に限定して実施する計画を立てた。

現地実験が行われた。

ロケットに凝結剤とトレーサーを積み込み、ネバダ砂漠から中間圏めがけて打ち込んだ。反応はなかった。条件を変えて、つづけて何度か打ち込んだが、いくら待っても一滴の降水もなかった。

実験が完全に失敗に終わったと誰もが諦めたとき、突然、サハラ砂漠に大雨が降り出した。

ネルソンは大雨時の降水サンプルを取り寄せ、何度も含有する化学物質の分析をおこなったが、とうとうトレーサーとして用いた同位元素を検出することができなかった。

「サハラでの降水は偶然だったのかね。ほとんど雨らしい雨がないうところに、突然雨が降り出したんだがね……」

実験結果を報告に来たネルソンは悔しそうに言った。

「そのときの天気図をチェックしたのですか。もしサハラ地方に当時雨を降らすような雨雲がなければ、中間圏から落下してきた水滴と考えていいということになる」

有平は控えめに応えた。実は、すでに彼は当日のサハラ地方の天気図をチェックしていた。もちろん、大雨をもたらすような雨雲は見当たらなかった。

彼は実験が成功だったと考えたが、ネルソンにとっては決して成功と言える出来ではなかった。まがりなりにも大量の降水を降らすことができたとはいえ、ターゲットとして予定した目標エリアから数千キロも離れたところでの降水では話にならなかった。これでは敵をやっつけるつもりが味方にダメージを与えることになりかねない。ターゲットへの命中精度が悪い

ことは環境兵器にとって致命的なことであった。

「たとえ中間圏からの降水だったとしても、何番目のロケットの凝結剤が有効だったのか不明だった。降水の降り始めにサンプルを取ってチェックしなければ、凝結剤の散布と降水の因果関係を明らかにできない。これが明らかにならなければ、『ノアの大洪水』に対して効果的な手を打つこともできないことになる。とにかく、降り始めのサンプルを採取することだ。

このために全世界に広く観測網を設置したい。これは当方の費用でやりますよ。これが出来たところで、もう一度実験をやることにします」

ネルソンが言うには、サハラの降水サンプルはいい加減なものだったというのだ。サハラには降水の地上観測ステーションがなかったため、肝心なときに、降り始めの降水を採取できなかったし、たとえあったとしても一時に滝のようなあまりにも大量の降水があったために、ありきたりな装置では降り始めの降水をうまく採取できなかっただろう。

中間圏で氷粒子がトレーサーを抱えて凝結して氷塊となったとしても、八〇キロもの上空から落下する途中で溶融や氷結を繰り返したり、そのうえ大気中に含まれたさまざまな物質と出会う。それに中間圏に残った氷粒子がこれに影響を受けて新たな凝結を起こすことも考えられる。それゆえ、降り始めの降水を採取するためにどんな大雨や洪水時にもびくともしない地上観測システムを世界中に設置する必要があった。

「そんなことは可能ですかね。もう十分ですよ。観測システムよりも……」  
有平は今回の実験結果から中間層の氷粒子を徐々に減らすことを考えていた。ロケットによる凝結剤の散布条件と中間大気や対流圏の気象条件から降水地域予測モデルを開発することが可能であったが、彼は大雨のもとらす影響を考えて、降水量をコントロールする方法を優先的に考える必要

があると思った。

「……それよりも、今回の大雨でサハラ周辺にも大きな被害が出たらしいが、実験による被害をなくすために、降水量をコントロールすることが必要だ。これができなければ、むやみに現地実験をしてはならない……」

「でもドクター掃木、実験を止めれば、いつかは『ノアの大洪水』がやってくるでしょう。とすれば、現地実験による人工降水を繰り返してもどうということはない。むしろ現地実験を続行することによって、将来発生する『ノアの大洪水』を分散し、散発的に起こさせるといふ効果さえ期待できるのではないですか。取り返しのつかない一回だけの極大の被害を取るか、それとも、何回かの小被害を我慢するか……」

ネルソンは有平の意図を見透かしたように言う。

「……とにかく、われわれは両方の精度向上を目指すことが必要です。目標エリアへの降水の命中精度と降水量のコントロール技術の向上ですよ。早急に観測システムを整え、実験を再開しましょう」

有平は口を閉ざしたまま、顔を上げた。そこにはネルソンの確信に満ちた横顔があった。

地上観測ステーションは自動データ発受信器と自動サンプル採取分析器を装備したもので、データのやりとりは通信衛星を利用する。海洋と陸地に配置するため、海上型と陸上型の二つのタイプが用意された。

海上型は小型のブイのような洋上浮遊型タイプで、べつにこれといった特徴はなかった。これに標識を付け、無人で海上に漂流させておくのだ。

これに対して、陸上型は有人用だ。この形状はまるでサッカーボールのような多面体の球体型箱船タイプで、構造も極めてユニークなものであっ

た。

陸上型を箱船タイプにしたのは、大洪水に備えたものであった。これには位置を示すナビゲーションシステムを装備し、たとえ洋上を漂流することになっても十分機能するように設計されていた。

陸上型要員は設置候補地ごとに希望者を募る。そのなかから条件に合致した者を乗船者として選び出し、この箱船を「ノアの大洪水」対策用として提供するという条件であった。

箱船は太陽電池を表面に張った五角形のパネルを内部からサッカーボール状に組み立てる構造で、上下左右の四ヶ所にハッチがあった。表面に張り巡らされた太陽電池発電システムが常時のエネルギー源で、これに予備電源として、酸素と水素による燃料電池のほかに、外部からマイクロウエーブでも電力を供給できるシステムを備えていた。

船内のバッテリーにはつねに余剰電力が貯えられ、太陽電池など発電装置が停止しても、浄水供給のほかに、船内の温度調節、換気等の環境維持など必要な機能が十分果たせるようになっていた。

また自動平衡装置と防音衝撃吸収装置が組み込まれて、箱船がどんなに揺れても、内部の居住空間はつねに水平かつ静穏に保たれる。備蓄食糧や飲用水は定員の百日分が搭載可能であった。

観測用箱船には単身用と家族用とがあるという。  
「日本には設置する計画があるのかね」

有平はふと真有に箱船キットを送ると言ったことを思い出した。

「いまのところ考えていない。日本には観測網が整備されているからそれを利用してもらうつもりだ。でもドクター掃木が乗り込むというのなら特別提供してもいい」

ネルソンが冗談半分に言う。

「本当か。じゃ、日本に帰ったときのためにひとつお願いしておこうか」  
有平も半分冗談めかして言うが、内心では真有用に是非欲しいと思った。

「え？ 本当か。あ、そうか。ドクター掃木には東京にお嬢さんを残してきているそうだが……」

「どうしてそんなことを知っているのか」

ネルソンはそれに応えずに、真剣な顔をして「お嬢さんと呼んで、一緒に住んだらいいのになあ」と呟く。

プライベートなことに立ち入ったことを謝すと、彼は「お嬢さん用に設置しておこう。ドクター掃木が帰ったときのためにね。もしものときにはドクター掃木のサジェスチョンが必要となるから、いつも連絡可能な状態にしておかないとね」と言い、送り先の住所を控えた。

29

「氷晶片が急激に増え出しています」

ハンソンが有平にデータのコピーを手渡した。

反応を窺っているハンソンを机のそばに立たせたまま、彼は考えに耽った。

地球上では温暖化が温暖化を呼ぶ状態に陥っていた。

大気中の二酸化炭素が四〇〇ppmを突破したところから、海水温が著しく上昇した。三〇℃を超える海水域が中緯度まで広がり、広い範囲で二酸化炭素の海水への溶解（吸収）が抑えられ、逆に、海水に溶解していた二

酸化炭素が大気中に放出するようになった。

海水温が上昇した海域から海水の蒸発量が増えて大気中の水蒸気が急増した。これによって、地球温暖化がさらに促進された。

こうして地球温暖化の急転回が始まったのだ。

気温の上昇にともない、さらに海水温が上昇し、海水の蒸発量も一段と増える。一段と増えた大量の水蒸気が大気中を勢いよく上昇する。強力な上昇気流に乗って対流圏界面を軽々と突破し、成層圏から中間圏へと押し上げられて上昇していく。その結果、中間圏の上層部のみならず、中層部においても氷粒子が著しく増え出したにちがいない。

それはシミュレーションの最悪のケースを上回る勢いであった。

一体、なにが起きているのか。このまま氷粒子の集中集積が加速すると、やはり地軸の揺れを引き起こすことになるのか。

地球の自転軸である地軸が揺れることになるのだろうか。彼にはまだ半信半疑だった。急速に回転している物体の回転軸がふらつき、多少揺れることがあることはべつに不思議なことではない。高速回転が続くかぎり、軸が大きく揺れて倒れるようなことは考えられないじゃないか。地球の自転速度が弱まることがない以上、地軸の揺れの影響を重大に考える必要がないかもしれない。

そう考えたとき、突然、彼の脳裏に回転中に瞬時に逆立ちして回転しつづける逆立ちコマが浮かんだ。底が球面に磨かれたコマを勢いよく回すと、はじめは正常に球面を底にして回っているが、ふいに頭の軸棒を底にして回りだすのだ。

彼はもう一度頭の棒を芯にして回転しつづける逆立ちコマを思い浮かべ、地球に重ね合わせる。

「地軸の揺れはどうか」

「揺れています、この程度は変動幅と考えていいのではないのでしょうか」  
ハンソンはいやに慎重に言う。

「うむ、そうか」

有平は全然別のことを考えていた。あの現地実験は氷粒子の集中集積を減らすどころか、逆に、地軸の揺れを増幅しているのではないか。もしそうだとすると、一刻も早く氷粒子の凝結反応に関する現地実験を中止して、揺れ防止のための本格的な対策を考えるべきときではないか。

「午後にアイトキンソン所長を交えて、今後の方針についての検討会をやる。きみも出席してくれないか」

ハンソンを帰すと、有平は椅子の背に身をもたげ、頭の後ろで手を組み、ふたたび考えに耽った。

彼はいろいろなデータを頭の中にインプットし、それらを交差させ、さらに結び合せて、ひとつのイメージをつくり出していく。そのイメージを打ち壊し、ふたたびイメージを作る。彼は何度も同じ作業を繰り返した。

やがて彼は立ち上がり、廊下に出た。

「やあ」

アイトキンソンは有平を認めると、奥の執務机から立ち上がって、大テーブルの椅子を勧めた。大テーブルは円形で、所長室のドアに近いコーナーにあって、少人数の会議や打ち合わせに用いられていた。

「突然ですが、あのプロジェクトはもはやわたしの手に負えないものになってきたようです」

「……………」

突然の申し出に、アイトキンソンはただ黙って、つぎを促すように、有平の目を覗き込んでいる。

「これまでネルソンに『天の水門開閉実験』プロジェクトを任せてきたのですが、思わしくありません。いや、この実験で『ノアの大洪水』の原因となる中間圏上層部に集中集積している氷粒子を幾分でも除去できるかもしれないと期待していたのですが、これが思っていたほどの効果がなかったということですよ」

「ということ……」

アイトキンソンは理解しかねるといった表情で、有平を見た。

「実は事態がもっと深刻なのです。もはや『天の水門開閉実験』でお茶を濁している段階ではない。わたしの感じでは……」

有平はいま自分の感じていることを率直に話した。

「とにかく、一刻も早く手を打たないと取り返しがつかない事態に陥ることになるでしょう」

アイトキンソンは黙って、じつと有平の目を覗き込んだ。有平は自分に向けられた鋭い視線に耐え、逆に、睨み返した。

ふいに、アイトキンソンが有平の目を避けるようにして椅子から立ち上がると、彼は背を向け、透明ガラスの大きな窓辺に佇んだ。ガラス窓越しにロッキーマウンテンの山並みが霞んで見える。

有平はアイトキンソンの後ろ姿を祈るような気持ちで見守った。

「分かりました。然るべき手を打つことにしましょう。ただし、そのまえに、一度、関係者の集まってもらい、ドクター掃木の考えについて議論しておかなければなりません。ここが言い出す以上、それなりの覚悟が必要ですからね」

しばらくして、アイトキンソンは椅子にもどると、静かに言った。

有平はこれを聞いてほっとした。もしアイトキンソンが話に乗ってこなかったら、彼は箝口令を破っても、研究調査結果を公表し、世界に訴えるつもりでいたのだ。

30

アイトキンソンは有平を送り出すと、彼はふたたび窓辺に立った。

しばらく左手に映るロッキー山脈の山並みに目を向けていた。それから前方から右手に目を向け、眼下に広がる台地に目を移していく。その前方奥に市街が広がっている。

アイトキンソンはふと、あたり一面が水に浸り、やがて氷に埋れていくような気がした。

彼はもう一度目を凝らして遙かに広がる市街を見下ろした。そこには見慣れた建物が小さく連なっていた。彼は幾分感傷的になっている自分を感じた。

アイトキンソンは決して有平の考えを全面的に支持しているわけではなかった。

しかし公聴会で有平の考えを聞いて、彼は彼なりに調べ、有平の考えが奇想天外なものでないことを確認していた。というより、かなりの確度で発生する可能性があると思うようになった。

かといって、自らこのことを外部に言明するつもりはなかった。ACAARとしてこのようなことを言明すれば、あまりにも影響が大きすぎる。そ

れに科学研究を行っているところが、たとえかなりの確度があることはいえ、十分なデータを持たずに、軽々しく地軸角度の変動や極移動の可能性を言い触らすようなことはできなかった。それはまかり間違えば、ACARに対する社会的信頼を傷つけ、所長としての彼の命取りにもなる。いや、彼自身研究者失格の烙印を押され、アカデミック・サークルからのけ者とされるおそれさえあった。

「同類項になるのか……」

アイトキンソンは呟く。彼は日本の学会を追われた有平のことを思い浮かべた。だが彼の目には後悔の色は微塵もなかった。

アイトキンソンが指定した時間に、有平が会議室に出向くと、大テーブルに予想外の人物が並んでいた。

ハンソンの隣にネルソンが控えており、アイトキンソンの隣に、まえに何度か顔を見たことがある中年の女性研究員が座っていた。

「上席研究員のジュディ・ワイズだ。地球物理学と天文学が専門だよ」

アイトキンソンは座ったまま紹介した。

有平は手を差し伸べ、微笑んでいる彼女と軽く握手を交わした。幾分前かがみとなった拍子に、彼女のブラウンの髪が揺れ、深紅のブラウスの襟元から胸の谷間が覗いた。ネルソンは座ったまま、彼に挨拶の合図を送ってよこす。

「では、はじめようか」

と言って、アイトキンソンは有平の提案を簡単に紹介した。

「議論して欲しい第一点は、現在の地軸の揺らぎについての評価だ。第二点はその防止または予防対策についてだ」

「そんな悠長な問題ではない。現に地軸に異常な揺れが生じている。明日にも地軸が大揺れし出すかもしれない状況だ。すぐ対策の実施について検討すべきだ」

有平は苛々して叫んだ。

「ポール シフト (pole shift)? でも自転のデータからはまだ地軸に異常な揺らぎを読み取れないんじゃないかしら」

ジュディ・ワイズが柔らかい声で優しく諭すように言う。

「あの揺らぎは変動幅のものだけなのか」

「そうだと思うわ。ときおり変動幅を超えた異常と思える動きがあるにはあるけど、あれは極少数の例外じゃないかしら……」

「それが問題なんだよ。実は……」

有平はネルソンを見た。彼はデータのコピーに目を走らせている。有平はハンソンに視線を転じ、発言を促す。

「ぼくも変動幅のものと思うけど……、ただ、一寸変だと思っことはその異常な揺らぎがランダム過ぎる感じがすること」

「ランダム過ぎる? そんなことはない」

ネルソンが即座に否定する。

「ランダムの中には一定の法則がある。問題はその揺らぎが規則的に微妙に大きくなっている点だ」

「本当かしら。ドクター掃木、やっぱり、それは誤差の範囲じゃなくって」

「誤差の範囲といえそう言えないこともないが、その値がわずかず大きくくなっているのが気になる」

有平はデータを指さした。

「……なぜかしら」

「それはこれまで行なった『天の水門開閉実験』の影響だと思う」

「なんだと……、あの程度の実験でそんな影響が出るとは考えられない」

ネルソンが即座に否定しかかる。

「え? その『天の水門開閉実験』って?」

ハンソンがネルソンと顔を見合わせた。アイトキンソンは頷き、説明を促す。ハンソンがしぶしぶ実験の概要を話した。

「そんなことしていたの……、そうすると、ドクター掃木の考えも成り立つかもしれないわね」

ネルソンは有平をじつと見つめている。

「……もしもあれが変動幅ではないとすると……、バランスが微妙に狂いだしていると考えざるを得ないのかしら」

「わたしはそう思う。突然のバランスの狂いが揺らぎを増幅させているにちがいない」

アイトキンソンはジュディ・ワイズと有平のやり取りをじつと聞いていた。ネルソンも黙ったままだ。

「でもその程度で、地軸の角度が大きく変動するようなことが考えられるかしら。たとえ地軸が大きく傾くとしても、この程度の揺らぎでは大きな変動が生じるのはまだまだ先のことじゃないかしら」

地球回転ベクトルの大きさや方向は外部からの力や内部の動きによって影響を受ける。これらは太陽や月などからの外力(引力)のほかに、地球

における大気や海洋、あるいは地殻やマントルやコアなどの質量の再配置や運動によるいわば内部起源の力によっても変動する。

「ジュディ、じゃ、何年先かね」

アイトキンソンが口を挟んだ。

「何百年先か、何千年先ね。いや、それ以上かも」

「かもしれないし、そうでないかもしれない」

「そうね。いつ起こるか分からないと言っべきね」

「それじゃ、第一点の地軸の揺らぎについては、これでいいだろう。つぎは、第二点だ。地軸の揺らぎの防止または予防対策についてはどうか」

「アイトキンソンは断定的に第一の議論に終止符を打つ。」

「地軸の大きな揺らぎを防ぐためには、できるだけ早く中間圏に集中集積している氷粒子を取り除く必要がある」

「そんなことできるかしら」

「でもこれを放置しておけばとんでもないことになるかもしれない。なにか早急に手を打つ必要がある」

「なにか効果的な対策があるの」

「ひとつ考えられるのは、世界的規模で大々的に『天の水門閉閉実験』を行うことだ。これを実施すれば、なんらかの効果が期待できるかもしれない」

「でも、その実験のせいでおかしくなったのじゃなくて……、それをまた繰り返そうというわけ」

「これまでは散発的な実験で、集中集積している氷粒子の層から氷粒子を虫食い状態に一部分を取り除いてしまったんだ。それで、かえっておかしくなったのかもしれない」

「あ、そういうこと。今度は全面的に徹底するわけね。でも馬鹿げているわね」

「ジュディ・ワイズは明るい声を出した。」

「徹底的に？ どうやって実施するのだ。これ以上の大々的な規模の現地

実験などできるわけがないだろう」

「ネルソンが不機嫌な声で、ジュディ・ワイズに向かって吐き捨てるように言う。」

「各国の協力のもとに国際的に実施するほかない」

「なんだと、各国の協力のもとにだと……、一体、なにを考えているんだ。」

「『天の水門閉閉実験』はアメリカ合衆国の安全保障に関わる極秘事項だぞ」

「もはや、そんな段階ではない。一国の安全保障を超えて、いまや地球全体の安全保障が問題となっているんだ」

「実際に大規模な『天の水門閉閉実験』を行なって、本気で『ノアの大洪水』を起こす気か。気が狂ったのか。それこそ、地球の安全保障を脅かすことになる。なんでそんな危険を犯す必要があるんだ。このままなにもしないでおくのが一番だ。対策などする必要がない。おれは絶対反対だ」

「ネルソンは激しい剣幕で、目を剥く。」

「地軸は揺らぎ、収支がつかなくなってからでは遅い」

「地軸が少しぐらいいらいだところで、なにが問題なんだ」

「地軸が揺らぐと、つぎは……」

「ジュディ、地軸が揺らぐとどうなる」

「アイトキンソンが有平の発言を妨げるように、口を挟んだ。」

「そうね、そのスピードいかなね。急激に起これば、影響も極端かもね」

「でもいまのところは、そう極端に地軸が大きく揺れだすことは考えられないとっていいかな」

「まあ、このデータを見るかぎりはそういえると思うわ」

「じゃ、ここしばらく様子を見ることにしてはどうかね、ドクター掃木」

「無然とした表情でネルソンを睨んでいる有平を見て、アイトキンソンは

静かに言った。

31

「『天の水門開閉実験』は続けるのですか」

ハンソンがネルソンに訊ねた。

「そうだ。おい、もっとスピードを出したまえ。遅れるぞ」

ハンソンはアクセルを踏んだ。二人を乗せた車はUS三六号線をデンバー国際空港に向かってスピードを上げていく。

「まだまだ精度を上げなければ、使いものにならない。あのバカ、ひとたび『ノアの大洪水』を起こしてしまえば、もう実験できなくなってしまわないか」

「でも、地軸が……」

「そんなこと知るか。まず、精度を上げることだ。狙ったところに大雨か大量の氷塊を降らすことが重要なのだ。これができないと、対策もへちまもないんだ。一度、中国の奥地に大雨を降らせたい。三峡ダムもあるところにな」

「……それは……、国際問題になるんじゃないませんか」

「なにを寝ぼけたことをいう。そんなへまをやるか」

ネルソンはこんなことを話してしまったことを幾分後悔しながら、薄明かりに浮かぶハンソンの横顔をまじまじと見た。この男を信用していいのか、ふと脳裏に浮かんだ疑念を追いやると、彼は視線を正面に戻した。

「とにかく、実験は慎重にやらんとな。バランスを崩すような虫食いで、

むやみに地軸を揺らしては危険だからな」

ネルソンはまえの話を打ち消すように言った。

彼は有平がつぎにどんな行動にでるか気掛かりだった。アイトキンソンがしばらく様子を見ようと取りなしてくれたが、これがいつまでもつづくとは思えなかった。長くて一週間ももてばいいとさえ思った。あの目つきではあのバカがじっとして様子を見ているわけがない。いまにもすぐ、つぎの行動に移りそうな目つきだったではないか。ともかく、邪魔が入らないうちに、残った実験を片づけておこうと、彼はこころに決めた。

それ以上に、ネルソンにはやっておきたいことがあった。さつきついでを滑らしたことであつたが、実験に託つけて、各国の軍事施設を水没させてしまうことだ。核搭載の長距離弾道ミサイルを収納している地下サイロを水浸しにできればしめたものだ。もしこれがうまくいけば、二階級特進ものだ。

だがこれには危険な賭けがともなう。失敗したときのことを考え、彼は悩んだ。でもこの機会を逃したくなかった。

ネルソンが空港で降りると、ハンソンの車はすぐ発進した。車は赤いテールランプを残して去っていく。

「地軸の揺らぎのつぎには、一体なにが起こるのです？」

有平が会議室を出ると、ジュディ・ワイズが追いかけてきた。

「え？」

「先程、言いかけて……」

「あ、アイトキンソンが口を挟んで遮ったときのことですか」

有平は歩きながら応えた。彼はアイトキンソンがしばらく様子を見よう

と言ったことが不満だった。時間が残されているとは思えなかった。早く自分の研究室に戻って善後策を考えたかった。

「なにかが起ると考えているのね。なにかしら」

有平は早くジュディ・ワイズから離れたかった。彼は立ち止まって、彼女と向かい合った。

「地軸の揺らぎだけなら、あなたが言うように、切羽詰まった問題ではないかもしれない。でももうひとつ考えておかなければならないことがあるんだ」

有平は不満をぶつつけるように、早口でまくしたてる。

ジュディ・ワイズは目を大きく見開き、じつと有平の目を見て、彼が話すのを待っている。彼はふと前にも見たことがある目のような気がして、彼女の澄んだ大きな目をしげしげと見た。

なぜか、急に気持ちが高ぶり、胸の中が次第に波立ってくる。

「そうか。これは真知のあのときの目だ」

有平は思わず呟く。その瞬間、久しく忘れていた熱い血が彼の体内を勢いよく駆け巡った。

「ドクター掃木、もうひとつ考えておかなければならないこととはなんですか」

ジュディ・ワイズは話を促すように、目をさらに大きくして、額に垂れ下がった髪を払う。ブラウンの肩まで伸びた髪が揺れた。

「ああ、それは……、それはですね。南極大陸などにある……あの巨大な氷床のことです。あれが突然海中へ滑落するとどうなりますか。海面上昇によって持ち上げられ、滑りやすくなっている南極大陸の氷床が、地軸の大きな揺らぎの衝撃で海中に滑り落ちることが考えられるのです」

氷床とは五万平方キロメートル以上にわたって陸地を覆う氷のことをいう。地球上ではこのような巨大な氷の塊は南極とグリーンランドにしかない。南極大陸の氷床は一二〇五万平方キロメートルもあって、平均の氷の厚さが約二五〇〇メートル、体積は約二九三〇万立方キロメートルである。これに対して、グリーンランドの氷床はぐっと小さい。約一七〇万平方キロメートルで、厚さは一五〇〇メートルほどだ。体積は二六〇万立方キロメートルである。これらの氷床が全部解けると、地球の海面は約一〇〇メートル以上上昇する。

「南極大陸の氷床全部が一度に滑り落ちるのですか」

「一度に落ちることはないでしょう。が、徐々に大量の氷床が海中に滑落していくことになるかもしれないのです」

「大量の氷床が……」

「大陸の上に乗っている氷床に比べて、海上にせり出ているロスやフィルヒナーの棚氷は、多分、真っ先に海中に落ちることでしょう。大陸の上にある分厚い氷床は、南極大陸には極の近くに四〇〇〇メートル級の山がいくつもありますから、簡単に滑り落ちることはないでしょう。いくつかに分割して順々に滑り落ちるのか、それとも一部分がといっても、五分の一とかが途中で高い山があまりないインド洋のほうに向かって滑り出していくことになるのか、多分、どちらかでしょう」

南極大陸にある二つの大きな棚氷を合わせると、約二〇〇万平方キロメートルにもおよぶ。これらが海中に落下すると、海面を数メートルから一〇数メートル上昇させる。

海面の急上昇によって大陸の奥深くまでに浸入した海水が氷床を持ち上げ、底部の溶融を進める。南極大陸の氷床は海面上昇によって一層不安定

化し、滑落の条件がますます高まっていくのだ。

「となると……」

「とにかく、南極大陸に限らず、グリーンランドに残っている氷床が温暖化によって溶けて流れ出しており、地軸の揺らぎが大きくなるにつれて徐々にスピードを上げて滑り出すことでしょう。いずれ、海中に放り出されるように急激な勢いで海中へ滑落していくにちがいません」

「……………」

「大量の氷床が一斉に滑落すると、多分、その衝撃でさらに地球のバランスが大きく崩れ、地軸が大きく揺らぐ可能性があるにちがいない。もしかすると、これによって地軸が大きく傾くことになるかもしれないということです」

ジュディ・ワイズはじつと有平の目を見つめたまま、しばらくの間、口を開こうとしなかった。

32

有平は新しい対策について考えをまとめようと何度ももがいた。だがもがけばもがくほど、迷路に迷い込んでいく。目指す道を探してまえに進もうとすると、決まってジュディ・ワイズが現れた。ジュディ・ワイズじゃない。あの底なしに澄んだ大きな目が彼のまえに立ち塞がるのだった。

夜光雲について話そうとしたとき、真知の目がそうだった。いや、彼女が「こめんなさい、この子をお願いします」と言って潤ませた目がそうだった。

有平は真知の目を思い浮かべ、彼女が最後の力をふりしぼって頼んでいった真有を一〇年以上も放ったらかしてしまった自分を責めた。

「このままでは地軸が回転するかもしれないのね」

ジュディは呟くように言い、有平の腕のなかで身体を震わした。彼は震えを止めようと、腕に力を込めた。

「地球の自転軸である地軸が動き出すと、この地球は一体どうなるのかしら」

有平にも想像がつかなかった。彼はじつと彼女の目を覗き込んだ。瞳孔を取り巻く透き通る青い虹彩はまるで底なしの湖のようにどこまでも澄んで見えた。奥深いところから淡い光が瞳孔の周りから放たれているようにかすかに輝いている。彼はふと氷床を呑み込んだ青い海の底を覗いているような錯覚に囚われ、なにやら神秘に満ちた畏怖に似た感情が胸のなかに広がっていくのを感じた。

彼はまえにもこんなことがあったような気がした。彼は静かに彼女の目に口を付けた。彼の唇が彼女の閉じた両眼に軽く触れ、それから唇に唇を重ねた。

ジュディ・ワイズに誘われ、市街から離れた山腹のレストランで夕食を共にしたあと、有平は車椅子でバリアーフリーの建物のなかに入っていくように、なんの抵抗もなく彼女の部屋に入り、いま彼女のベッドにいた。

どうしてベッドに入ったのか、彼自身自分でも分からなかった。気がついたとき、彼は彼女とベッドにいたのだ。

不思議なことに、ここにいることになんどの疑問も湧かなかった。極めて自然な気持ちだった。それよりも彼女とはまえからこうしているような気がした。時間が止まっているのか、それとも無限の時間が流れているのか、

彼には分からなかった。というより、時間は彼の意識の外にあった。

有平は時間を越えた時の流れのなかにいた。彼は一〇年前、学会から追放されて、まるで日本から放り出されるようにして米国にやってきた。そんな学会への仕返しに、ただひたすら自説の正しさの実証を求めてこの一〇年を過ごしてきたのだ。だがそんな時間もすでに悠久の彼方に過ぎ去っていた。

いま彼は永遠のなかにいた。彼が生きてきた限られて時間のなかで、地球温暖化を憂いたり、「ノアの大洪水」や地軸の回転から人類の生き残りを危ぶんだりすることに、一体どんな意味があるんだろう。こんなことはすべて人類が自ら引き起こしたことはないのか。

彼はなにかしらとんでもない間違いを冒しているような後ろめたさを感じた。人間自らが犯した過ちの尻拭いをする人間。それは自分の尻尾を追い回している子犬のようではないか。そこには倫理的になんの改善も見られない人間の営みが繰り返されているだけだった。ただひたすら賽の河原の石積みを繰り返す人間の業だけがあった。

有平は静かに彼女から離れた。ベッドを出て、レースのカーテン越しに外を覗いた。街路には街灯に照らし出された街路樹の黒い影が点々と連なっていた。

明かりを消したショーウィンドーが連なる町並みは見慣れたものであった。だが彼は闇の中で息を潜めている町並みを物珍しそうに見とれていた。

街路の先には並木道があるはずだ。人影はなかった。野良犬がごみ箱を漁っている。時折、思い出したように、車が通り抜けていく。

それは彼の記憶のなかに生きる映像でもあった。その映像が彼に自分の存在を知らせ、自分が生きていることを感じさせた。

後ろで、彼女が寝返りを打った。

ふと、真知のような気がした。彼は真有を思い浮かべた。そのとき真知と自分から真有に繋がるひとつの時間の流れを実感した。

有平は脱ぎ捨てたシャツと上着と靴を持つと、音を立てないように気を配りながら、ベッドルームを出た。ドアを開けると、名前を呼ばれたような気がした。彼はドアを細目に開け、なかを覗いた。べつに変わったこととはなにもなかった。

33

突然、世界各地を大雨が襲った。

中国奥地の砂漠地帯に土砂降りの雨が降り出した。十数日間にわたって、小さな水塊を交えた大雨がひっきりなしに降った。ときにはこぶし大の水塊が混じることもあった。

タリム盆地に巨大な湖ができた。溢れ出て洪水となり、地表を削り、渦を巻いて河川に流れ込む。両側が切り立った深い峡谷では水位が急上昇し、数十メートルにも達した。

山崩れが相次いだ。土砂を大量に含んだ濁水が急流となった。大石や岩が浮き、地響きを立て、転がりながら衝突し、火花を散らして流されていく。

予期しない異常気象による災害に備えて、中国政府は人民解放軍を動員したが、三峡ダム崩壊を防ぐことができなかった。

ダムの決壊によって、流域の市街や工場地帯を濁水が襲い、農地が流さ

れた。死者や行方不明者は数十万人におよんだ。緊急避難者は数億人、一億戸以上の家屋が倒壊、損壊の被害を被った。収穫不能になった農地は二〇〇〇万ヘクタールにおよんだ。

西ロシアからウクライナ、ペラルーシにも氷塊を交えた大雨が降った。滝のような集中豪雨が一週間以上降り続き、モスクワ、キエフ、ミンスクの市街は突然の大洪水に襲われた。何日にも洪水が引かず、行政機能がマヒした。軍隊の出動でようやく治安が維持された。

送電線や水道が被害を受け、電気や水の供給がストップした。道路は寸断され、飲み水や食糧の備蓄が底を尽き、伝染病が蔓延した。

都市部のライフラインの被害だけではなかった。農業地帯では洪水による建物の損壊のほか、広大な農地が水没し、至る所に巨大な水溜まりが出現した。

北海に停滞していた低気圧が居座りつづけ、ヨーロッパ全域に長期間にわたり大雨をもたらした。ライン河、エルベ川をはじめ大小の河川が氾濫し、沿岸の市街地は一面洪水に覆われた。

またハンガリー盆地を襲った大雨で増水したドナウ川が氾濫し、下流の都市に大洪水をもたらした。水が何日も引かず、ついに伝染病の大流行を招いてしまった。

サハラ砂漠地方に降った大雨は、アルジェリア、モーリタニア、マリ、ニジェール、チャド、スーダン、エジプト、リビア諸国に思わぬ被害をおよぼした。排水設備など不用な砂漠での不意の大雨は濁水の洪水となって

地表を覆い尽くした。ナイル川が増水し、沿岸の都市が洪水の被害を被った。長期間にわたり水位が低下せず、アスワンハイダムが崩壊の危機に瀕した。

また北米の五大湖地方から中西部、中南部から南部にかけて大雨が続いた。ミシシッピ川が至る所で氾濫し、洪水が市街地や農地を襲った。ニューオリオンズはすっかり水没してしまった。濁水がなかなか引かず、長期にわたって水没したままだった。収穫期を迎えていた農地ではトウモロコシが全滅し、牛や鶏などの家畜が大量に死んだ。倒壊、損壊した家屋、寸断された道路など数えきれず、被害が膨大な額となった。

世界各地を襲った大雨は一国の経済を根こそぎにしたところもあったが、多くの国々の経済に手痛い甚大な被害を及ぼした。それよりも国際経済が完璧なまでに打ちのめされるほどのダメージを受けた。各国が保護主義に傾き、このことが国際経済にマイナスの後遺症をもたらし、悪影響を及ぼし続けるものと懸念された。

それよりも社会的な影響が大きかった。引っこりなしに続く異常気象に人々はうんざりし、底知れぬ不安を感じだしていた。いつの間にか人々は口々に『ノアの大洪水』を噂するようになった。

34

「あれは実験のせいじゃないのか。やり過ぎだ」

有平はハンソンを捕まえ、彼を詰問する。

「わたしは知りません。たまたま大雨となったのじゃないんですか」  
ネルソンに口止めされているのか、ハンソンは白を切った。

有平はハンソンのまえで、受話器を取ると、ネルソンを呼んだ。

「大雨の分析結果がほしいんだが……。実験を続けているんだろう、その結果が欲しいのだ」

「きょうの午後、そちらに行く予定だ。その時、話そう」

ネルソンの声が聞こえてきたかと思うと、電話はプツンと切れた。

「これが『天の水門開閉実験』のデータだ」

ネルソンが差し出したコピーには降水の分析データはなかった。

「トレーサーの分析データも見当たらないが……」

「最近トレーサーを使ってない」

「どうして……」

有平はネルソンの目に敵意と困惑の色を感じた。

「……今回の大雨はすべて『天の水門開閉実験』と関係があるのだろうか」

「ないとは言わないが、すべてがそうだと考えられても困る」

ネルソンは北米、ことに世界の穀倉地帯といわれている米国中南部に降った猛烈な大雨のことを気にしているらしい。あれも実験結果だとなると、彼の立場は厳しいものとなるにちがいない。だがこの地域は最近干ばつ続きで、頼みの地下水も汲み過ぎが心配されていた。適当なお湿りがあれば申し分ない状況だったが……。

かといって、有平は容赦するつもりはなかった。

「なんでこんな実験をやったんだ。どうしてトレーサーを使わなかったん

だ」

「……………」

ネルソンは黙って、有平に鋭い視線を投げつけている。

「実験をやった以上、大雨はすべてそのせいだと思われる」

「だから、もしものときに備えて、トレーサーは使わなかったのだ。証拠になると困るからな」

「バカな……」

「すべては海域を降水ターゲットエリアにしたんだが……。失敗したんだ」

「全部が全部、失敗だったというわけか」

「そうだ。故意によその国に大雨を降らせようなどと考えるもんか。たとえ、敵性国や競争相手にでも故意に莫大な損害を与えるようなことはやらない」

「それにしても、続けて何度も実験をやったものだ。なぜそこまでやる必要があるんだ。もうほとんど必要なデータは取ってしまっているはずだと思うが……」

「人工の『ノアの大洪水』を起こそうと言っていたのは誰かね。それにくらべたら、今回の実験はズーと小規模だ」

「対策として行なう『ノアの大洪水』と、きみのやった実験とは全然違う」

「どこが違うのか。中間圏に集中集積している氷粒子を減らすことには変わりがないではないか」

「全然違う。対策として実施するときは、世界中に、事前に周知させてから実施する。きみの実験のように、秘密裏に不意打ちに行なうことはしない。対策の必要性を周知させることも、また、大雨に備えて、事前に避難する準備もできるのだ。とにかく、少なくとも不意打ちによる被害を避けることはできるはずだ」

「そんなことは気休めに過ぎない。そんなことをやったところで『ノアの大洪水』の被害を一〇〇パーセント回避することはできない。多少の被害が生じて止むをえないことなんだ」

「それなら、もう一度聞か、ターゲットエリアへの降水が失敗したというが、本当か。あれは故意にやったことではないのか。実験のたびに、降水時期、降水範囲、降水量のコントロールの精度が上がっていったはずだ。それが今回は五回とも失敗したという。そんなことが考えられるか」

「それがそうだった。その証拠がわが国のケースだ。故意に自分の国にこんなことができると思うか」

「きみのことだ、そのくらいなことはいりかたない」

有平はネルソンを睨みつける。

「今回はとにかく、対流圏の気流の動きが異常過ぎた。全く、不運なことに、予測の範囲を超えていたのだ」

「そんなことはいいわけにならない。一回目で失敗に気付くはずだ。それを五回も繰り返している。これは故意でなくてなんだ」

「そんなことは結果論だ」

「ハensonは極めて優秀な頭脳の持ち主だよ。彼が何度も同じような失敗を繰り返すはずがない」

「もう過ぎたことだ。よしんばこれが故意だったとしても、ドクター掃木、この結果についてはあなたも同罪だということをお忘れなく。この実験によって、あなたが心配している地軸の揺らぎを幾分なりとも抑えることができただろうし、たとえそうでなくとも、あなたがこのプロジェクトのリーダーであり、責任者だから、あの実験も結局あなたの指示に従ってやったことになっている。明日の公聴会でもそう応えるつもりだ」

ネルソンは不敵な笑みを浮かべて去っていった。

35

有平は突然、後頭部に一撃を食らった思いがした。彼は「天の水門開閉実験」プロジェクトに地軸の揺らぎ防止をひそかに期待していた。このことをネルソンが見抜いていたのだ。彼が「天の水門開閉実験」を地軸揺らぎ防止対策と考えていることをいいことに、ネルソンは環境兵器の精度を向上するために何度も現地実験を重ねていったのだ。

彼はネルソンの度重なる実験を見て見ぬふりをした。実験で地軸の揺らぎ防止の効果を確かめ、この手法を防止対策に流用することをひそかに考えていたのだ。

地軸の問題は一国の問題ではなく、世界全体の問題というより人類の問題だ。だから、この問題解決のためにはどんなことでも許される、と彼は認識していた。

だがネルソンにはこの問題はあくまでも一国の問題に過ぎなかった。彼にはアメリカ合衆国という国があって、世界は二の次なのだ。彼にはアメリカ合衆国という国がなければ、世界もないも同然だった。

軍関係の組織のなかで生き抜いてきたネルソンを利用しようとした学者上がりの有平が、逆に、利用されていたのだ。このことに漸く気付き、彼はこの度の大雨で被害を被った何億の人々のことを思い、頭を抱えた。自分では人類の生き残りを願う、やがて人類に襲ってくる危機に対して警告を発したつもりが、かえって人類の滅亡に加担していたとは、いくら悔い

でも悔いきれなかった。

「ああ、どうすればいいのか……」

有平は天を仰いだ。許しを乞うことができる神がおれば許しを乞いたかった。だが彼は思い上がっていた自分を許すことができなかった。人類に危機を警告したつもりでいい気になっていた自分を誰が許すか。彼は自分を責め続けた。

電話のベルが鳴っている。ようやく気付いて、有平は受話器を取った。

「留守かと思っただわ。何度も呼び出したのよ」

ジュディだった。

「ああ……、ジュディか、どうしよう……」

「どうしたの、いつもの有平じゃないわ」

「ああ……」

「どうしたの。地軸が揺らぎ出したというのに、一体、どうしたのよ」

「え？ なんだって、揺らぎ出したって……、嘘だろ」

「変なのよ。データを見て頂戴。いま送るから」

有平は受話器を耳にしたまま、ディスプレイのキーを押した。データが映し出された。

「どこが変なんだい」

「不規則な揺らぎが出ているのよ。そっちに行くから待って」

受話器の奥から、電話の切れる音がした。彼は耳から受話器を外して、ディスプレイに目を釘付けにした。だが彼の目には不規則な揺らぎを見て取ることができなかった。

彼の脳裏に、ふたたび、各国を襲った大雨の映像が再生された。大雨の濁流に呑み込まれ、助けを求めて差し出された無数の手がディスプレイの

データを遮る。

「このデータよ」

有平の背後から、不意に、手が伸びて、ディスプレイに映し出されているデータのひとつを指さした。

「まえのデータと重ねて見ればよく分かるわ」

マニキュアをしたジュディの爪がキーボードの上で光った。

「なるほど……」

言われてみれば、微かな不規則な動きのように見える。

「だが、……なぜだ」

ネルソンの無謀な実験で、幾分でも揺らぎの原因が収まるはずじゃなかったのか。有平は迷った。なぜ地軸が不規則に揺らぐのだ。

「あの大雨はハンソンが説明していた実験と関係があるのかしら」

「うん。まあ、あるようだ」

彼は曖昧に応える。

「もしあれば、不規則な揺らぎが生じても不思議ではないわ」

「え？ どうして」

「だって、あの大雨は北半球だけだったでしょ」

彼女が言うには、もし実験によって中間圏から大量の水粒子が取り除かれたとしても、それは北半球上空の中間圏に集中集積した分のもので、減った分、南半球とのバランスが崩れた可能性がある。そのうえ、水粒子の除去が虫食い状態ではなく、均等に行われたかが問題で、これもチェックしてみる必要があるというのだ。

有平は机の上に放り出したままになっている実験データを捲った。やはり、彼女が指摘したように、今回の水粒子凝結剤散布箇所は北半球上空に

集中していた。それに実験対象範囲（降水ターゲットエリア）も五ヶ所中四ヶ所がアフリカ、東ヨーロッパ、中央アジアに偏っている。これでは中間圏の氷粒子の分布に不均衡が生じていても不思議でない。いずれ氷粒子の観測データで再チェックして確かめるが、中間圏の氷粒子分布にかなりの虫食い状態ができていことだろう。

「やはり、ジュディのいう通りだ。なんでこんなことをしたんだ」

彼はふたたびネルソンに対する怒りが込み上げてきた。だがどうすることもできなかった。

「この揺らぎは収まるかしら」

「さあ、いまのところ、監視を続けること以外ない。変な兆候が出たら…」

なにが起きても、もはやなんの手も打ちようがなかった。例の「天の水門閉鎖実験」手法を用いた対策も、このたびの大雨の被害で、もはや各国の協力をうめることは絶望的であった。彼は拱手傍観のほかなかった。彼は不規則な動きがそのまま収束することをただ祈るだけであった。

36

「ドクター掃木、ワシントンから帰ったところだ。所長室に来てくれないか。みんなと一寸相談したいことがある」

アイトキンソンからの電話だった。受話器を戻すと、有平はもう一度ディスプレイに呼び出した雪氷データをチェックしてから、立ち上がった。

会議用丸テーブルにはすでにジュディとハンソンがいた。有平に気付い

たアイトキンソンは奥の執務机から立ち上がり、テーブルについた。

「いま、国家安全保障会議の特別委員会から帰ったところだが、特別委員会の要請により、今後、当センターが例の『ノアの大洪水』関連のデータを統括して提供することになった。これには皆さんの力が不可欠です。是非ご協力いただきたい」

アイトキンソンは同意の意思を確認するように、出席者の一人ひとりに目を向ける。

「いま、コロラド大学と英国南極調査所の雪氷データをチェックしてきたのですが、事態はかなり切迫しているようです。このことに当局は気付いているのでしょうか」

「地軸の揺らぎの不規則な動きをチェックしているところですが、わたしもドクター掃木と同じように感じていますわ」

ハンソンはジュディ・ワイズと有平の顔を交互に見て、大きく頷く。

「政府も重い腰を漸く上げかけています。もうすぐ特別委員会が対策本部に置き換わり、この問題に対してデシジョンし、行動をとることになるでしょう。当センターに対して、デシジョンや行動に必要なデータの提供を要請してきました」

アイトキンソンはACARの所長として積極的にこの要請に応えるつもりでいた。

「ACARとして国家安全保障会議に協力することはいいとしても、問題となっている『ノアの大洪水』といい、地軸の揺らぎといい、これらは米国一国だけの問題ではなく、全世界あるいは地球全体の問題だということです。ですから、わたしとしては米国の国家安全保障会議の特別委員会だけにデータを提供すればいいというのではなく、最新のデータは全世界に、

そして人類全体に提供されるべきではないかと思つのですが……」

有平の発言に対して、ハンソンがなにか言おうと口を動かし掛けたとき、アイトキンソンが「ネルソンは今日の公聴会のあとで、職を解かれたそうだよ」とハンソンに向かって小声で言った。

アイトキンソンはワシントンでの会議を思い出した。なぜあんな展開になつたのか、不思議だつた。

最初から重苦しい雰囲気会議を支配していた。委員の間には北半球を襲つたこのたびの大雨が「ノアの大洪水」の前触れでないかという思いが広がっていたのだ。

ネルソンが必死に否定しようとしたが駄目だった。逆に、疑われ、彼は窮地に立たされた。彼は苦し紛れに、そして起死回生を狙って「天の水門閉閉実験」を披歴し、今回の大雨もそれが原因だと打ち明けた。

「それは事実か。では、その実験と世界的大雨との因果関係を証明してください。これを証明するデータを提示しなさい」

委員の一人が強い調子で言った。

「直接証明するデータを取っておりませんが……」

ネルソンの答弁を聞いた委員はいきり立った。

「証明するデータもないのに、こんな重要なことを軽々しく取り扱つていいのか。もし大雨が実験の結果だとしたら、これこそ、国家の安全保障に係わる問題じゃないのか。無断で他国に先制攻撃を仕掛けるとは言語道断だ。それにわが国にも甚大な損害を与えるとはもつてのほかだ。即刻監獄行きだ」

「ドクター掃木の発言はもつともだ。だがわれわれは国家安全保障会議の特別委員会の要請に第一に応えなければならぬ。特別委員会のメンバーもこの問題が一国の問題ではないことを十分承知している。各国との連携や国連との協力も考えているようだ」

「だがそれを待っていては遅れてしまう。これから起こることについての情報は、即刻世界中に周知させることが重要だ。国家や政府にも手が出ない問題だからだ。もはや、一人ひとりが地球にどんな事態が生じるのかを知って、個人個人が自分で最善を尽して危機を回避するようにする以外残された道はないのだから」

「ドクター掃木、本当に対策がないのですか。『天の水門閉閉実験』はなんのために行なつたのですか」

ハンソンが悲痛な声を上げた。

「いまとなつてはあれが唯一最後に残された対策だった。だがもう駄目だ。

今回の大雨のあとでは誰も協力してくれないだろう。それにあれで大被害を被つた国々に協力を要請しても、彼らがなにを言い出すか……」

「……でも」

ハンソンはなお諦めきれずにいる。

「それよりもこれからどうなるかについて早急に分析することよ」

ジュディが取りなすように言う。

「そうだ。そしてその結果を世界に対して発信することにしよう。ACARのホームページにこのメンバーの検討結果を毎回載せることにしたらどうか。これを見て協力する国が出てくるだろう」

「ただ問題は情報を受け取る側に混乱を与えるおそれがあることだ。災害予測情報によって社会がパニックに陥れば、困ったことになる。その辺の

「ところはなんとか調整する必要があると思っ」

有平はアイトキンソンの心配が分らないわけではなかった。だが事態はそんな段階を遙かに超えており、パニックをいくらか心配したところでのんの役にも立たないのではないかと思えて仕方がなかった。彼にはどんな対策もはや、すべて手遅れに思えた。と同時に、これからなにが起こるか見当さえ全然つかなかったことが、彼を一層困惑させ、追い詰めていたのだった。

「とにかく、これからどんなことになるか、考えうるすべてのケースについて詳細なシミュレーションを早急にやることにしよう」

有平は地軸の揺らぎが人類社会になにをもたらすことになるのか、一刻も早く知りたかった。この結果をできるだけ早く世界中に知らせなければならぬ。彼は自分の研究室に向かって走り出した。

37

大会議室に対策本部が設けられ、データ解析センターの中核としての活動がはじまった。

中央の大型スクリーンには地球探査衛星から送られてくる地球の画像が常時映し出されている。会議用の大テーブルにはディスプレイがところせましと並べてあった。

観測衛星や世界各地から送られてくる観測生データが大容量の並列型スーパーコンピュータシステムで瞬時に解析し、リアルタイムでディスプレイへ送られてくる。

有平はオンタイムで手元に届く解析されたデータを片っ端からチェックした。彼は南極大陸の棚氷の動きに注目していた。

地軸の揺らぎのデータチェックはジュディ・ワイズが引き続き担当した。ハンソンはモデルによるシミュレーションを手伝った。

「やはり不規則な揺らぎが増幅されていくようよ」

ジュディが有平の目をじっと覗き込んだ。彼女の目の奥が妖しげに光っている。彼はディスプレイに映し出されている雪氷のデータに目を据え付けたまま、彼女に目を向けようとしなかった。

「ユーヘーサン」

鼻にかかった声がして、耳たぶに彼女の唇は触れた。彼は邪険に彼女を押し返す。

「ねえ、もう帰りましようよ。夕食を一緒にどう？」

有平はようやくディスプレイから目を離れた。

「地軸の揺れには周期がない？ あの不規則な動きに周期が見られないかね」

地球は北極から南極に抜ける地軸（自転軸）を中心に左回りに自転しながら、太陽の周りを楕円軌道を描いて公転している。現在、地軸は太陽の赤道面に対して二三・四五度傾いているが、これは固定されているわけではない。そのため地軸自体が揺らぎ、先端が二万五八〇〇年の周期で回転軌道を描いている。

「周期？」

「そう、不規則な動きでも規則的であればいいんだが……。突然不規則に大きく揺れるときがないか、これが心配だ」

「不規則の動きの周期ね。一寸、待ってて」

ジュディはデータのコピーを持ってくるといって、自室に引き返していった。有平は彼女の後ろ姿を見送りながら、突然、不吉な思いに駆られた。ふいに、このままみんながでんでんばらばらになって二度と会えないような気がしたのだ。彼は急いでその思いを振り払うように、激しく頭を左右に振った。

有平は真有のことが気になっていた。あれ以来、メールも途絶えがちだった。ネルソンが設置すると約束したサッカーボール型の箱船タイプの観測ステーションの詳しい仕様を知らせてくるようになってやったのに、まだ返事がなかった。彼のほうでもそのあとメールを送っていなかった。ジュディとのがあつてから、彼は真有にメールすることが急に億劫になった。

南極大陸の海面に突き出ている棚氷がもうすぐ落下しそうだった。ロス棚氷と呼ばれる南極大陸の二大棚氷の小さいほうだった。

数日前、彼は根元近くにクレパスが走っているのを見つけた。それが徐々に広がっている。地軸が大きく揺れると、衝撃でロス棚氷が根元から折れて、海中に落下するにちがいない。

このことを早く真有に知らせておきたかった。「これが不規則な動きが見られるデータのコピーよ。周期らしい動きが読み取れるかしら」

有平はジュディが持ってきたコピーを作業用テーブルに広げていく。彼はテーブルに近づいたり離れたりしながらデータのコピーを眺めた。彼女も彼のそばでデータを覗いている。

時折、不規則な大きな揺れが見られるが、いくら吟味しても、それらはランダムな動きで、そこには周期らしいものは見当たらなかった。

「棚氷が危ない状態になっている。大きな揺れが来ると、崩壊するかもしれない。問題はいつ大きな揺れが来るかだ」

「棚氷？ ロスのほう、それともロンネ」

南極大陸に二つの巨大な棚氷がある。棚氷は棚のように海面の上にせり出ている氷床のことで、厚さが二〇〇メートルもある。ロスとロンネの双方で、面積が二〇〇万平方キロメートル近くになる。日本国土の数倍の広さだ。

「ロスのクレパスが大きくなってきたが……」

「ロスが落下すれば、ロンネも時間の問題ね」

彼女は暗い顔で、呟く。

「二つの巨大な棚氷が海中に落下すると、どうなるかしら」

「落下した瞬間、衝撃で何メートルもの大波が生じる。最悪の場合、数メートルから十数メートル海面が上昇することになるだろう」

「衝撃波は天津波のように各国の沿岸を襲うのかしら」

「そうなるだろう」

「それに、数メートル以上も海面が上昇すれば、海面下に没する国も出るわね。とにかく、早く、警報を発しなければならぬじゃないの……」

「いつ大揺れが来るかだ。早まってもらえないし……」

「でも、遅れてはどうにもならないわ」

有平はまだ躊躇していた。これまで十分騒ぎすぎた。これ以上騒ぎを起こして、また間違えば、今度は「狼少年」になりかねない。もう一度新しいデータをチェックしてからでも遅くないと思った。

「ダメよ。いまのうちに、第一次警報を出すべきよ」

ジュディの強い声に、彼はようやく重い腰を上げた。

二人は所長室に向かった。

38

有平とジュディは刻々と送られてくるデータを見ながら、地軸の揺らぎと南極大陸の棚氷の監視を続けた。

地軸に不規則な動きを続き、ロス棚氷のクレパスが大きく口を開けていく。

二人は固唾を吞んで、何時間も、ディスプレイを覗き込んでいた。画面に映し出される数値データと映像データが、刻々と変化していく。

大型スクリーンに南極大陸がズームアップされた。

地軸が一瞬不規則に揺らいだ。

反転する前に、一瞬、制止した。

そのとき、棚氷に新しいクレパスが走った。

ふたたび、地軸の揺れがもとに戻った。

その瞬間、棚氷が海面に向かって落下していった。

巨大な氷塊が海面で飛沫を上げて、ゆっくり海中に潜っていった。

しばらくして、氷塊の頭が海面に浮かんできた。

棚氷が海面に落下したとき、ふたたび浮いてきたときに、巨大な大波が生じた。

大波は巨大な津波となって海洋を疾走し、島々を乗り越えて全世界に広がった。

巨大な津波が沿岸部に広がる臨海都市をつぎつぎと襲う。

二〇数時間後、海面が一〇数メートルせり上がり、海面は急に広がった。やがて、ふたたび平静さを取り戻すと、海は何事もなかったように日々の営みを繰り返し出した。

だが、人間世界の大混乱はつづき、ますます混乱を極めていった。

瞬時に、三つの国が海面下に没し、百を超える国々が沿岸部から内陸にかけて広大な国土を失った。

数多くの臨海工業地帯や数千数万を超える沿岸都市が水浸しとなり、多くが水没した。交通が遮断され、経済がマヒ状態に陥った。広大な農地が水の底に沈み、失しなわれた。

世界中で、死者、行方不明者は数えきれない数に上った。

大波はニューヨークのマンハッタン島を呑み込み、林立している高層ビル街を海中都市に変えた。ほとんどのビルは地下の機械室が水浸しとなつて、エレベーターが動かなかった。それでもビジネスマンたちはどこ吹く風で、ビルからビルへ小型船やモーターボートで移動し、かろうじて非常用電源を確保したコンピュータにしがみつき、磁場嵐がたびたび起きて途絶えがちの衛星通信で情報のやり取りをした。

「災害がやって来るまで問題の存在を認めない」のはニューヨークだけではなかった。いや、目の前にしても認めがらないのだ。

東京湾では満潮時と重なった。南極大陸からはるばるやって来た大波は湾岸に張り巡らされた高潮対策の高い防潮堤をいともやすやすと乗り越え、大都市東京の都心深く侵入した。ゼロメートル地帯はもちろん、都心に掘

り巡らしてある地下街や縦横に走る地下鉄網は瞬く間に海水に満たされ、水の底に沈んだ。海中から突き出ている高層ビル群が都心や副都心のかつての位置を示し、満々と湛える水の底に大きな都市があったことを知らせていた。

水没を免れた高台は人の群れで溢れ返っている。また水中に点々と取り残された水没を免れた高層のマンションやビルの屋上は逃げ遅れた人々で埋まっていた。

海面の急上昇は河川水の排水を妨げるばかりでなく、逆に、河川水を逆流させ、内陸部にも思わぬ大洪水をもたらした。洪水は時間とともに広がり、水没地域を広げていった。これによって、被害区域が沿岸部に止まらず、内陸部へと予想外に拡大した。

世界中の河川が大なり小なりの被害を被ったが、とくに、ナイル川、ガングジス川、長江、黄河、メコン川、イラワディ川、インダス川、ニジェール川、パラナ川、マグダレナ川、オリノコ川、アマゾン川、ミシシッピ川、ポー川などの流域が酷かった。

ことにメコン河やセーヌ河のような勾配の低い河川の流域で被害が予想外に広がった。洪水が引かず、市街が出現した湖沼の底に沈んだ。

有平は真有と連絡を取ろうと何度も試みても返事がなかった。連絡がついているのか分からなかったが、それでも彼は毎日メールを送り続け、真有からの返事を待った。

39

「地軸がおかしな動きをしているわ」

ジュディが対策本部室に飛んできた。

棚氷の崩壊以来、有平は対策本部に入り浸りだった。

壁の大型スクリーンには地球の状況が刻々と映し出されている。

「ほら、変でしょ」

彼女はキーを打って、データを呼び出すと、ディスプレイを指さした。

有平はデータを読みながら、ふらふらしながら自転している地球を思い浮かべた。それはまるで酔っ払いがふらふらとあっちへ行ったり、こっちへ来りする様子に似ていた。

「南極大陸の氷床は……」

彼はモニターのスクリーンに映し出されている氷床の映像に目を向け、ズームアップしていく。

注意してみると、かすかに、南極大陸の氷床が滑り出して海面にせり出しているように見える。棚氷の大量崩落によって急に上昇した海面が氷床を広範囲にわたって下から持ち上げているのだろうか。

「ああ、まだ、棚氷落下の大波による世界各地の被害状況が十分把握できていないというのに……、つぎが始まるうとしている」

有平は絶句した。彼は気を取り直して、ふたたび、モニター画面に目をやりながら、受話器に手を伸ばしてアイトキンソンを呼んだ。

「数日中に、南極大陸の氷床が海中に滑落するかもしれない」

「本当か。じゃ、警報の手配をしよう。それでどんなふう……」

「一度に全部が滑落することはないと思うが、地軸の揺れが尋常じゃない

んだ。大きく揺れることがあるとどんなことが起こるか分からない」

有平は画面に目を釘付けしたまま、受話器を置いた。彼は南極大陸の氷床から目を離すことができなかった。

地球は北極から南極に突き通る地軸を中心に自転しながら太陽の周りを若干首を傾げたような格好で回っている。この地軸がふらつき出しているのだ。

地軸の新しい不規則な揺らぎが氷床の滑落を加速するのだ。棚氷の全面的崩壊・落下後、これによって水嵩を増した海水が太陽と月の引力で赤道付近に引っ張られ、地軸の動きに新たな外的力を追加していた。これが地軸の揺らぎに微妙な変化を呼び起こしているらしい。

その影響か、それとも海面の急激な上昇の影響か、世界の広い範囲で連続して微弱地震が発生した。

環太平洋火山帯が活動期に入ったように一斉に噴煙を上げた。アラスカではスパー、トリデント、カトマイが噴き、アリューシャン列島のグレートシトキン島、ハワイ島ではマウナロア、キラウエアが活動を始めた。カムチャツカ半島、日本列島、スマトラ島、ジャワ島、ニュージーランド北島などで火山性地震が観測された。

有平は手元のノート型パソコンでメールを開いた。棚氷崩壊後、まだ連絡が取れずにいた真有に一刻も早く氷床の危険を知らせたかった。

新規のメールが届いていた。真有からだった。

パパ

返事が遅れてごめんなさい。洪水は高台まで押し寄せて来なかったので、

お祖父さまは鼻高々といった調子でしたが、被災した方々が大挙押し寄せてきています。こんどはもっと大きい大波が押し寄せるといふ噂を耳にしてから、急に、真有の言うことを聞くようになりました。これまで見向きもしなかった箱船「マユ号」（サッカーボールのようで可愛いのですが、お祖父さまも清子おばさまも気に入らないみたい）に、夜だけです、三人で寝泊まりするようになりました。これで眠っているときに大波に襲われても心配がなくなりました。ご安心ください。

ではまた書きます。お体に気をつけてね。

真有

有平は何度も読み返した。

「真有と連絡ついたのね。よかったわ」

いつのまにか近づいてきたジュディが背後から覗き込み、腕を回した。

40

一瞬、地軸が大きく揺れた。

有平はモニターの大型スクリーンに目をやった。そこには南極大陸上空の探査衛星から送られてくるデジタルデータを画像化した南極大陸の氷床が映し出されていた。磁気嵐の影響か、ときどき乱れはしたが、映像が鮮明で、クレパスまではつきり目に見える。

南極大陸の映像が乱れた。揺れたようにも見えた。その瞬間、クレパスがさっと広がった。

南極大陸を覆っている巨大な氷床がインド洋に向かってゆっくりと滑り出した。

中央のクレパスが見る間に大きな口を開けていく。

有平もジュディもしばらく口を開け、呆然としてスクリーンを見ていた。

「あのクレパスは海岸から何メートルぐらい内陸部に入っているかしら」

「一五〇〇キロぐらいかな」

「あのスピードは？」

「かなり早い」

海中に落ち込み始めたのか、氷床の先端から水しぶきが立っている。

「時速数キロぐらいかしら」

「いや、もっと早い、それに徐々に加速している」

「時速一〇数キロぐらいになるかしら」

「うん」

「それじゃ、あの氷床がすっかり海中に落下するのは遅くとも一五〇時間前後ね。もっと早いかしら」

「南極大陸氷床の一部が滑落し出しています」

有平は連絡した。

「アイトキンソンが駆けつけてきた。」

「いま動き出しているのは……」

「東南極大陸の氷床の五分の一ぐらいかね」

「そうですね」

「残りは……」

「まだのようですが、これも時間の問題でしょう。海面が上昇しているの

で、広い範囲で氷床が海水に持ち上げられてかなり不安定になっていますが、すぐ滑り出すということはないでしょう」

「じゃ、滑り落ちそうなのは……」

「南極大陸の氷床は全体で約三〇〇万立方キロメートルですから、その

一〇分の一とすれば、約三〇〇万立方キロが海中に落下することになりま

す」

「それだけの量の海水が一挙に増える」

「海面への落下の際には、このまえの数倍の大波が発生するでしょう。これが巨大な津波となって全世界に伝播していくことになります」

「それで、いつ」

「それは滑落スピード次第です。多分、時速一〇数キロに達することでしょうから……」

「すると……」

「滑落する氷床の最後尾が約一五〇〇キロ奥とすると、落下し了えるのに一五〇時間前後かかることになりました」

アイトキンソンは受話器を取ると、抑揚を抑えた声で、いまのやりとりをかい摘んで、国家安全保障委員会の特別委員会へ報告した。報告を確認するように、有平はアイトキンソンの声に耳を傾けていた。

一五五時間後、南極大陸の巨大な氷床の塊は、まるで滑り台を滑り落ちるように、徐々に加速し、最後は三〇キロを超えるスピードでインド洋め

がけて海中に突入していった。これに引き摺られるように、断続して小規模な氷床の崩壊がつづく。

最後の衝撃で生じた巨大なエネルギーを秘めた大波は、海底地震によって発生した巨大津波のように、かま首をかかげたガラガラ蛇のような垂直に聳える波頭を押し立て、白い飛沫を散らして、インド亜大陸に向かった。

巨大なガラガラ蛇はまずオーストラリア大陸の沿岸を襲い、インドシナ半島、マレー半島、スマトラ島、ジャワ島をつぎつぎに襲った。さらに、インド、アフリカ東部海岸からアラビア半島、中東へと向かう。

マレー半島、スマトラ島、ジャワ島を乗り越えた大波はボルネオ島、フィリピン諸島を乗り越え、太平洋に出て、朝鮮半島、日本列島を襲い、呑み込んでいった。

一方、喜望峰を抜け、大西洋に出た大波は南米東海岸、北米東海岸を襲い、オーストラリア大陸の南端を抜けた大波は南米西海岸、北米西海岸を襲った。沿岸から上陸した大波はエネルギーを使い果たすまで、邪魔物をなぎ倒して内陸の奥深くまで侵入し、すべてを攫ってふたたび海に戻った。

大波に襲われた地域では沿岸都市や臨海工場地帯はもちろん、農地が根こそぎ攫われ、壊滅的な被害を被った。無数の死者、行方不明者が出た。もはや経済や交通は問題外だった。

しかしこれで終わりではなかった。大波の大きな余波が繰り返し襲った。波高や波力は次第に衰えていったものの、時折、大きい波が混じる。

世界の沿岸諸国は二度、三度と繰り返して大波の洗礼を受け、沿岸都市や臨海工場地帯が徹底的に破壊された。農地は瓦礫の荒地と化した。

南極の氷床滑落が引き起した大波は海面を一挙に一〇数メートル急上昇させて、沈静化した。再度の海面上昇で、バン格拉デシュやオランダなど、

いくつかの国々が海底に沈み、国土そのものを喪失してしまった。

インド亜大陸は激しく泡立ちのたうち回って直進する大波を真正面から受けた。大波は亜大陸全体を揺るがすような勢いで南端の沿岸を襲い、大量の水が平野を駆け、河を遡上して奥地まで押し寄せた。高原の壁に阻まれた大波は東海岸、西海岸へと周り、奥地を目掛けて上陸し、低地を駆け巡り、山へ登っていった。

バン格拉デシュとパキスタンの国境付近の平野部は一面海水に覆われた。海水はヒマラヤ山麓まで押し寄せていった。

大波は巨大な津波となつて、時間をおいて、すべての沿岸都市を何度も襲った。海岸沿岸に限らず、河川沿岸にも大波が押し寄せ、洪水をもたらした。多くの都市は大洪水に吞まれていった。

世界をくまなく尽くした大波は、沿岸部を中心に壊滅的被害をもたらした。人類社会に甚大な損失をもたらした。都市という都市のライフラインは寸断され、都市としての機能を瞬時に失った。さらに海面の急上昇によって沿岸都市の多くは水没の危機に瀕した。

まえの大波のあと、建て直し中だった国際金融システムは二度目の大波にとどめを刺され、一瞬にして崩壊した。

この出来事は地球システムに思わぬ後遺症を残した。南極大陸から巨大な氷床が滑落したことによって、地球システムのバランスが急速に崩壊していったのだ。

## 第四章

42

水床滑落によって生じた大衝撃波は巨大な津波となって世界中に広がり、世界各地で沿岸都市を壊滅させ、無数の被災者を生みだした。

最終的には、世界人口の五〇パーセントを超える何十億もの人々が直接被災し、犠牲者および行方不明者数は数億を超えた。

人口の爆発的増加とともに、世界的に都市集中傾向が強まり、都市人口はすでに全人口の六〇パーセントにおよんでいたが、人口が急増した都市の大半が沿岸部にあった。このことが大波による人的被害を予想以上に大きくしたのだった。

大型スクリーンに地球探査衛星のカメラが捉えた世界の大都市の画像が順次映し出されていく。

ニューヨーク 水没海都市化 全市機能停止

ワシントン 洪水 全市機能停止

サンフランシスコ 壊滅 全市機能停止（一部丘の上に移動）

ロンドン 洪水 全市機能停止

パリ 浸水 全市機能停止

シドニー 壊滅 全市機能停止

東京 壊滅 全市機能停止

有平は目を見張り、東京が大写しになった大型スクリーンのまえに釘付けになった。

東京湾に侵入した大波は白い波頭をそそり立て、防潮堤を乗り越え、市街を襲い、高層ビルやさまざまな建造物をなぎ倒し、八王子の奥まで突進した。

大波が去ったあとには、車、木材、冷蔵庫、壊れた家屋などさまざまな都市の残骸を浮かべた新しい海が広がった。ところどころに窓ガラスの壊れた高層ビルの残骸が水面から顔を出しているものの、都心はほぼ完全に水没し、見る影もなかった。

彼は目を凝らして真有が住んでいたあたりを探した。波に洗われ、すっかりのつぺりとなった高台が水面からわずかに姿を現し、かつて陸地だったことを示している。

「真有……」

彼はサッカーボール型箱船「マユ号」を必死に探した。どこにもそれらしいものは見当たらなかった。

箱船サッカーボールは猛り狂った大波の一撃に宙に浮き、山奥へ飛ばされて行ったのだろうか。それとも引き潮とともに無数の残骸ともども東京湾に引きずり込まれたのだろうか。東京湾を出て外洋を漂っているのだろうか。

彼は真有が「マユ号」に乗っており、箱船が無事であることをひたすら祈った。彼にできることはそれしかなかった。そのことが彼を一層苛立たせた。

彼は通信衛星を通して「マユ号」を呼びかけ続けた。だが応答はない。

「大変だわ」

ディスプレイのデータを見ていたジュディが、突然、大きな声を発した。

有平は上の空で反射的に応える。彼は内心、またはじまったと思った。彼女はなんでも大袈裟に表現するたちだ。彼女の「大変」は大したことではなく、いつも「小変」くらいなものだった。

彼はジュディを無視して、ひたすら「マユ号」を呼び続けた。彼には真有たちの安否のほうに気が掛りだった。夜通し必死で発信していたが、まだなんの反応もなかった。もしかすると「マユ号」は大波に翻弄され、木端微塵に碎かれ、完璧に破壊したのかもしれない。彼は気が気でなかった。

「地軸が傾いていくわ」

「え？ なんだって？」

「地球の自転軸（地軸）が傾き出しているのよ」

「本当か。元に戻らないのか」

一瞬、彼の脳裡に逆立ちゴマが浮かんだ。戦慄が走った。だがそんなことが現実起こりうるのだろうか。

「ええ、傾いたままだわ。だんだん大きく傾いていきそうよ」

有平は急いでモニター用のスクリーンにスイッチを入れた。地球観測衛星がとらえた地球の姿が映し出された。だが磁気嵐のせい、画像が乱れ、画面からは自転軸の傾きを見ることができなかった。

「それで方向は？」

「太陽の赤道面に水平の方向に倒れていきそう……」

「え？ 一体、どっちの方に」

「南極が太陽の方向よ」

「自転軸が回転しはじめているということか」

「いえ、地球は自転を続けながら、太陽の反対方向に倒れかかっている感

じなのよ」

「地球は自転しながら、ゆっくり傾いていっているということだね」

自転軸そのものが回転するとなると一体どうなるのか、有平には見当つかなかった。バランスが急に崩れた地球システムが急いでバランスを取り戻そうとしているのだろうか。それともカオスのはじまりだろうか。

「太陽の赤道面に対して傾きが増していつている」

「どの方向に傾いていくかが問題だ。もし、南極大陸を太陽に向けて倒れていくと、北半球がやがて暗闇の世界に入ることになる」

有平はまだ問題の重大さに気付いていなかった。取りあえず、アイトキソンに連絡を入れたが、氷床滑落後の大波被害の情報収集に追われているらしく、彼の反応も鈍かった。世界中がそうだった。それだけ大波の被害が全世界に甚大な被害を及ぼしていたのだ。

有平にしても地球の自転軸の傾きよりも、真有とまだ連絡が取れずにいることのほうが気になった。だが地球が逆立ちするようなことになればどうなるのか。ふと真有にもう会うことができないような気がした。

彼は不吉な思いを振り払うように、必死に真有を呼び続けた。だが昨夜から一睡もしていなかった彼を睡魔が襲う。彼は目をこすり頭を叩いて何度抵抗を試みたが、いつしか机にうつ伏せになり、眠りに落ちていった。耳から外れたイヤホンから微かな音が漏れた。

「こちら、マユ号。聞こえますか。応答願います……」

「……………」

「返事がないわ。パパ、どうかしたのかしら。それともこの装置の操作を間違えているのかなあ」

ザアーと雑音が漏れてくるイヤホンを外すと、真有はマニュアルを取り出した。それを見ながら、彼女はもう一度発信装置の操作を繰り返した。だが今度もなんの応答もなかった。

「真有、マユたつら、早くこっちに来て頂戴」

下の方から、清子の大きな声がした。

箱船「マユ号」の内部は四層の構造で、下の方から第一層が機械室とタンクや食糧貯蔵庫で、機械室には空調設備や動力機械のほかに、大容量のバッテリーや予備電源装置が収まっている。このバッテリーが箱船表面パネルに張られた太陽光発電モジュールから送られてくる電気エネルギーを蓄えるものだった。第二層は居住空間で、居間とキッチン、それに洗面室がある。第三層は第二層の中二階となっていて、ここが寝室であった。最上階の第四層は作業空間で、大きな作業機のうえに発信装置など通信機器と観測分析装置やコンピュータなどが設置されている。

「ハーイ、おばさま」

交信を諦め、真有は椅子から立ち上がると、首を伸ばして、頭上の透視ガラスのパネルから外を覗いた。

箱船は海の上らしく、長い手を伸ばすようにして襲ってくる白い波頭がパネルのガラスを打って散っていく。

真有は狭い階段を下りていった。居間の小さなテーブルに、祖父と清子が顔を突き合わせている。

「何時かしら、外は暗くなりかけているけど……」

真有は清子たちにはなんの用事もないことを知っていた。退屈すると大声で真有を呼ぶのが二人の気晴らしになっているのだ。

「まだ、起きたばかりじゃないの。もう暗くなりかけたなんて嘘よね」

「ホントよ。おばさま、上に登ってみたら」

「いやだわ、あんな急な階段をひとりで昇れないじゃないの」

第二層にある居間の部分は吹き抜けのようになって、天井が高い。第三層の寝室はベッドだけで、第二層にあるキッチンや洗面室の上の空間を利用してつくられていた。第二層から第四層へは一本の階段で結ばれ、直接第四層に登るようになっていた。

「真有、いつまでこんなところにいるの。お兄さん、誰かに迎えにきてもらえないのかしら」

「おばさま、手伝いにきてくれる人も迎えにきてくれる人も、ここにはいなのよ」

清子が昨夜の出来事にまだ気づいていないのかしら、とふと真有は思った。あの大波以来、母屋には親戚や知人が大勢押し寄せてきていたし、広い庭は避難者で溢れていたのだから、このところ清子は箱船に留まっている時間が長くなった。だがそれにしても昨夜襲ってきた大波の最中熟睡していたなにも知らずにいたとは信じられなかった。それに、口を利こうとしない洪一郎のことも気になった。

この二人は示し合わせて、二度目に襲ってきた大波のことを知らないふりをして押し通そうとしているのだろうか。それとも、こんなことが起こったこと自体信じたくないのかもしれない。こんなふうに思いながら、真有はなにやら奇妙な様子の二人の老人を不思議そうに見た。

「お祖父さま、この箱船はいまどの辺にいるのかしら」

真有は気を引き立てるように洪一郎に話しかける。だが洪一郎は相変わらず黙ったまま、じっと真有の顔を見つめるだけだった。

「どこって、真有。どうかしたの。本郷の高台に決まっているじゃないの」  
清子は怪訝な顔をした。

近ごろは狭いベッドにベルトで身体を括り付けて寝る習慣になっていたので、二人とも昨夜眠っているうちに大波にさらわれたことを本当に気付いていないのだ、と真有は悟った。まして二人が乗っている箱船が東京湾に流され、いま大洋の只中を漂流しているとは思ってもみないにちがいない。

真有はどう説明したらいいのか分からなかった。かといっていつまでも知らせないでおくことは不可能なことだった。

「揺れてるわ。地震かしら」

清子は本当に気付いていないのか、あまり揺れを気にしない。もっとも、箱船には揺れ防止が装備されていて、内部が激しく揺れることはなかった。それでも軽い揺れは続いていた。

「おばさま、昨夜揺れたのに気がつかなかった？」

「なんだか変な夢を見ていたようだけど」

「本当？」

「そろそろ母屋へ行こうかしらね。今日はどうしても誰も迎えに来ないのかしら」

「おばさま、本当に知らないの。昨日の夜のこと……」

「テレビを見ていないからね。地震でもあったのかい」

真有は洪一郎を盗み見た。箱船に寝泊まりするようになってから、洪一郎は次第に口を利かなくなっていた。

「お祖父さまもそうかしら」

洪一郎はあらぬほうを見て、真有と目を合わせようとしない。

「おばさまね、昨日の夜、二度目の大きな波が来て、お家もなんもかんもみんな海にもっていかれてしまったのよ」

「なんだって、お兄さん、本当……」

洪一郎は相変わらず、そっぽを向いたままだった。

「いま、海の上なの」

「え？」

清子は椅子から飛び上がると、部屋中を右往左往しはじめた。

洪一郎は清子の様子を面白そうに眺めている。真有は悲しくなった。

「もう一度、パパに連絡してみるわ」

真有は二人を残して、階段を登った。

「こちら、マユ号。応答願います」

真有はマイクに向かって、何度も繰り返した。

「パパ、聞こえる？ ね、真有を助けて」

真有はふと天窓越しに見える空が闇に包まれているのに気付いた。

44

「有平、起きて」

ジュディが叫んだ。

「自転軸が……」

有平は机から顔を上げ、目を擦った。瞼がついて離れない。

「……地軸がどうした」

「これを見て」

スクリーンに静止衛星から送られてきた地球の映像が映し出されていた。

「こんなに傾斜したわ」

有平は受話器に手を伸ばした。

「ドクターアイトキンソン、異常事態が発生……」

アイトキンソンが飛んできた。スクリーンを見て、彼はすぐ特別委員会と連絡を取る。

「この傾斜の動きは続いているのか。いつまで続きそうか」

アイトキンソンはスクリーンから目を離さずに、傍らのジュディに訊ねた。

「このまま自転軸が回転を続けるかどうかは分かりません」

「回転？ 傾斜しているのじゃないのか」

「ええ、これは自転軸そのものが極めてゆっくりと回転しているのです」

「すると、地球の自転軸（地軸）そのものも回りだしているということかね」

「そのとおりですわ」

「するとどういうことが起こるのかね、ドクター掃木」

「いまの早さで回転し続けるとすると、一回転するのに約七〇時間ほどかかることになりませぬ。現在、自転軸が太陽の赤道面にほぼ水平の方向へ倒れ掛かっていますが、このスピードで軸の回転がさらにつづくとなれば、太陽の反対側の陰の部分に入ると夜が三〇時間ほどつづき、太陽に面して

いる部分では三〇時間ほど明るい状態がつづくことになるんでしょうか」

有平はまだ完全に眠りから覚めていないような返事をする。

「ただそれだけか」

「太陽が南から……」

「……軸の回転がさらにつづくんだね……」

「さあ……、なぜ、地軸が回転しはじめたのか、原因を見極めなければ地軸がいまのままの形態で回転を続けるのか、それとも途中で止まってしまふのか分かりません。もし途中で止まるようなことになっても、その段階でどんなことが起こるかも分かりません」

ジュディは心配そうな顔をした。

「途中で回転を停止するということはあるのかね」

「分かりません。でも、傾斜の速度が徐々に遅くなってきています」

「え？ 本当？」

有平が素っ頓狂な声を出した。彼は逆立ちコマを思い浮かべる。

「もし、いまの状態が回転が停止すると……」

アイトキンソンはジュディをじっと見た。

「いまの傾斜は約八〇度です。太陽の赤道面に対しては一七〇度、ほぼ水平に近い状態で、地軸はほぼ太陽の方向を向いていますわ、南極のほうを向けて」

「すると、北半球は暗黒の世界になるのではないか。もう朝は訪れないのか」

アイトキンソンは考え込んでしまった。

二人は固唾を呑んでアイトキンソンを見守った。彼はなかなか口を開かなかった。

机のうえに投げ捨ててあるイヤホンから微かな音が漏れた。有平は右手でイヤホンを急いで耳に当てた。

「パパ、助けて……」

真有の微かな声が聞こえてきた。

「真有か、パパだよ。いまどこ」

「真っ暗な海の上……」

「じゃ、探しにいくから救助信号を出しておくように」

「うん、早くして。お祖父さまが変なの」

「もう、大丈夫だ」

「パパ……」

「真有、どうした……、マユ……」

急に出力が衰えたのか、真有の音が聞こえなくなった。

45

「どうした？ 回転が止まったのか」

アイトキンソンはディスプレイのデータを見ているジュディを振り向いた。

「ええ、ごくわずか動いているようですが、これまでの動きに比べれば、停止しているような状態と言っているでしょう」

自転軸（地軸）の回転速度が次第に遅くなった。傾きが八〇度を超えたところではほとんど止まりかけている。

「このまま停止してしまうと……」

自転軸（地軸）は南極を太陽に向けて八〇度傾斜し、九〇度までに一〇度ほど残しているが、太陽の赤道面にほぼ水平に近い。もしこの状態で地軸の動きが停止すると、北半球は太陽の反対側になって、太陽光線がほとんど届くことがないのだ。

アメリカやカナダの北米大陸にも、日本やアジア諸国、そして中国大陸にも、インドや中東諸国、それにヨーロッパ諸国にも、もはや太陽光線が射込むことがない。北半球のその他の諸国にも同じ運命が待っている。

これまで世界経済を牛耳り繁栄を誇った北半球の諸国は太陽エネルギーが届かない永遠の闇の世界に閉じこめられてしまうことになる。そしてやがて氷に閉ざされていくのだ。

一方、南半球の諸国、オーストラリアや南米の諸国、それに南部アフリカの諸国は真昼の世界となる。南極大陸は太陽が燦々とさす赤道直下の灼熱地獄となる。

二度にわたる大波の襲撃、そして海面の急上昇、と矢継ぎ早に襲ってきた世界的な大災難に世界中は息も絶え絶えの状態だった。そのうえさらに、北半球の諸国には暗黒と厳寒が、南半球の諸国には白昼と灼熱が追い打ちをかけるのだ。

「多分、近い将来、北半球は氷に覆われてしまうことでしょう」

「それでこんどは南半球が定番というわけか」

「いや、そう単純にはいかんでしょう。なにしろここは真昼の世界となつて、じりじりと灼熱の太陽が照りつけることになるかも」

「それは分からないわ」

「こんな議論をしているときではない。北半球が闇の世界からいかに脱す

るかだ。朝になっても夜が明けないとすると世界中はパニックだ。余裕は十時間しかない」

アイトキンソンは受話器を取ると、国家安全保障委員会の特別委員会を呼んだ。

「連絡がつかない。どうしたんだ……」

有平はアイトキンソンの怒鳴り声を聞きながら、水に浸かっているワシントン州を思い浮かべた。ワシントンだけではない。二度目の大波でほとんどの国の首都が甚大な被害を被っているはずだった。たとえ北半球が暗黒の世界になるとしても、これに対して大波の被害に追われている国々にどんな手が残されているというのか。彼は暗黒の海でなすこともなくただ救助を心待ちにしている真有を思い浮かべた。

「ああ、真有、どうしている。パパがきつと助けにいくから待っているんだぞ」

太陽発電もできずに、暗い海を漂っている箱船を思いながら、有平はこころのなかで叫びつづけた。

46

朝を迎えても、夜が明けなかった。

北極地方の長い夜になれた人々を除いて、北半球の人々は暗黒の世界で不吉な思いを抱きながら、なかなか昇らない太陽が昇るのを待った。だがいつまで待っても、東から太陽が昇る気配がなかった。

一日が暮れ、また、一日が過ぎていった。

大雨と二度の大波で痛めつけられ、やっとの思いで生き延びた北半球の人々は、さらに矢継ぎ早に襲い来る災難に不吉な思いに駆られながらも、はじめのうちはじつと太陽が昇るのを待っていた。だがいくら待っても太陽が昇らないことに気付くと、太陽を求めて、人々は先を争って南半球への脱出を試みた。

暗黒難民の数は、北半球全体で、二〇億人にも上った。カナダとアメリカでは政府が率先して南米諸国への移住を促した。アジアやヨーロッパからはオーストラリアや南部アフリカへの移住が多かったが、受け入れ側から歓迎されたわけではなかった。あまりの難民の数に恐れをなして国境を閉ざす国が出てきた。中国とインドの一〇億人にも上る難民をはじめ、多数の難民は行き場を失った。

暗黒の世界に置き去りになる難民は、やがて来る飢えと寒さのためにつぎからつぎに生命を奪われることになるだろう。

一週間が過ぎた。相変わらず、地球は揺れていた。微弱な地震が引つ切りなしにつづいているようだった。

有平はACARに立て籠もっていた。真有との連絡が途絶え、早く探しに行かなければと思いつつも、かといってどうしていいのかわからず、彼は気が気でなかった。それにまだ仕事が残っていた。

「ノアの大洪水」関連の観測データ類が世界中から自動的にまだ送られていた。これを解析してふたたび世界の関係機関に送り返すのだ。

大雨、それに二度の大波襲来で、ACARと連絡を保っていた世界の関係機関も被害を受け、歯が抜けたように減っていた。機器や回線の被害のほかに、肝心の電力が不足していたのである。

沿岸部の発電所が水没の被害を受け、供給力が大幅にダウンしたうえ、

暗黒の世界で照明用と暖房用の需要が急増したため、供給が追いつかなかつた。残っている発電所をフル稼働したものの、需要に追いつかず、過負荷に耐えずつぎつぎとダウンしていった。

ACAR自体も閉鎖の時期が話題にのぼりはじめた。だが、安全保障委員会をサポートする仕事だけは可能ながぎり継続することになっていた。

幸い、ACARには毎年十一月末からはじまる長い冬場に備えて、暖房用や非常用電源などための重油を大量に貯蔵できる大きなタンクがあった。それに二〇〇名を超える研究員や職員の胃袋を満たすためのさまざまな食料も豊富に備蓄していた。

アイトキンソンとジュディも頑張っていた。有平は残りの仕事を二人に任せて、真有を探しに出かけようかと何度も考えた。

「有平、このまま収まるのかしら」

「なにが……」

ジュディがなにを考えているか、分かっていた。だが彼は真有のことに気が奪われ、生返事してしまつた。

「ところで、真有もことだけど……」

彼は目を大きくして彼女をじつと見た。

「ネルソンに相談したら」

「……………」

「あなたがしたくなかつたら、わたしがやってもいいけど……」

彼も何度かネルソンに相談したいと思っていたが、まえの実験のこともあつて言い出しにくかつた。

「いいわね。今日中になんとか彼を掴まえるわ」

ジュディはそう言い残すと、本部から出で行つた。彼女と入れ替わるよ

うに、アイトキンソンが入つてきた。

「ようやく連絡がついた。で、地軸がこのまま動きを止めてしまうのか、それとも動き続けるのか、もし動き続けるなら、いつ、北半球が暗黒の世界から脱出するのか、至急検討してくれといつてきた。近々に、北半球の関係国会議を開くといつている」

大量の難民が押し寄せた南半球諸国が悲鳴を上げ、門戸を閉ざしだしているの、その対策を相談するのだという。早晩世界のエネルギーと食糧の備蓄が底を突くのは目に見えていた。早急の対策が待たれているのだ。

だがこれといった対策は見あたらなかつた。対策担当者らは一日も早く地軸が元に戻ることをひたすら祈つていた。

「地軸が回転し出したメカニズムを分析してみたのですが、やはり急に生じたインバランスが原因のようです」

それはネルソンが無断で世界規模でやった最後の「天の水門閉鎖実験」が引き金となつたのだ。これによって地軸に大きな揺らぎが発生したところに、大量の棚氷が崩落してさらにバランスを狂わしたのだつた。

それに地軸が大きく揺れ、氷床の滑落を招いた。これで地球システムのバランスが一挙に崩れ、地軸の回転を誘つたというのだ。

「多分、その通りだろうな」

有平の説明を聞いていたアイトキンソンが口をはさんだ。

「だが問題は、なぜ南極大陸を太陽に向けて自転軸である地軸の回転が停止したかだ」

「それは多分、地球システムが、いや、太陽と地球が新たな関係を模索しはじめている結果だと思えますが……」

「いやに哲学的表現だな。要は両者の重力と引力が均衡点を探り、 balan

「スを求めたからだということかね」

「まあ、そんなところですか……」

地球は太陽と月の引力の影響を受けてコマのような形になって自転している。太陽に対して地軸が垂直に立っているときは、赤道付近が引力を受けて膨らむ。これが南極大陸が太陽に向いた形で地軸が固定すると、南極大陸に引力が掛かり、その付近に海水が大量に引き寄せられることになる。これによって棚氷と氷床の一部を喪失した南極大陸がバランスを回復しようとしている、いや回復して地軸の回転が停止したらしい。

「なるほど、そうなるで一吋ややこしいな。これでバランスが取れたことになるよ、このまま地軸の位置が固定するかもしれない。これじゃ、困る。陸地の多い北半球が永遠に暗黒の世界と化してしまう。なんとか、バランスを崩す方法はないのか」

「アイトキンソンは腕組みをした。」

「そうだ。ネルソンにもう一度実験をやらせたらどうか。うまくいけば彼自身の名誉回復にもなるぞ」

「とんでもない。また、過ちを繰り返すだけだ……」

有平は激しい口調で言った。

不意に幼い真有が目には浮かんだ。自分は一体なにをしてきたのか。突然、涙が込み上げた。彼はじっと耐えた。ふたたび冷静さを取り戻すと、彼はおもむろにつづけた。

「……そんなことをしなくとも、多分、やがて南極大陸に大雨が降り出すことでしょう。それと北半球に雪が降り続き、グリーンランドにも新たな氷床が形成され出すことでしょう。そうすれば、ふたたび、地軸が回転をはじめるとは違いありません」

「それにはどのくらいの時間が掛かるのかね」

「多分、早くても一〇〇日、まあ、一年のうちにはふたたび動き出すでしょう。もっとも、元に戻るのとはかなり先にことになるでしょうが……」

「もっと早くできないか。例の実験で促進することができるかもしれない」「それは分かりません。急激なインバランスはなにを呼び出すかわかりません。かえって変なことになったら、今度こそ取り返しがつかなくなってしまう」

有平は箱船の真有を思った。彼の脳裏に、箱船が氷漬けになって、動きが取れず、暗黒の世界のなかで脅えている真有の顔が浮かんだ。一刻も早く救い出してやりたい。だがいたずらに手を出して取り返しのつかない事態を招いてしまつてからでは遅すぎる。地軸の回転もそうだ。地軸の揺らぎもそうだった。こうなったのも、ネルソンだけのせいではない。元を糾せば、すべて人間が小狡く振る舞った結果ではないのか。彼は自分を許せなかった。

「お嬢さんとは連絡がついたかね」

しばらくして、アイトキンソンはぼつんと言った。

「……………」

口を開けば涙がこみあげてきそうだった。

「委員会へはそのように連絡しておく。とにかく一〇〇日くらいは各国ともどうにか持つだろう。それでなにも起こらなければ、そのとき考えることにしよう」

彼は黙ったまま、アイトキンソンの後ろ姿を見送った。

有平は真有からの応答が途絶えてからも、箱船に向けて信号を送り続けた。彼はマイクに語りかけ、真有を励ました。彼は箱船が発信できなくても、受信することができるとも思えないと思いつづけていた。こう思うことで、ようやく彼の神経が平衡を保っていたのだ。

「ネルソンと連絡がとれたわ」

ジュディが飛び込んできた。

「彼は箱船には二通りの予備の電源があるはずだと言っていたわ。真有にそのことを知らせる方法がないのかしら」

「ありがとう。こつちから教えてやろう」

「え？ そんなことできるの……」

彼女はじつと有平を見た。彼女の目に悲しみが広がった。彼が狂ってしまったのではないかと思っているふうだった。

「もしかしたら……」

有平は受信の可能性があるかもしれないことを話した。

「そうかしら。そんなことってあるかしら」

彼女はまだ疑わしそうな目で彼を見ている。

「それから水も食糧も十分あるそうよ。一年は持つと言ってたわ。もっとも宇宙食のような非常食らしいけど。それと船のなかではよく身体を動かすことが大切だってよ。そうしないと、ただ……」

一瞬、彼女は暗い表情になった。

「うん、ただ、どうした……」

「毎日が夜となることは予想外だったというの。それがとても心配だと……」

…、なにか箱船を探し出す方法があるか検討してみると言ってくれたわ。そしてドクター掃木のためなら、なんでもすると伝えてくれと」

「そう。それは有難い。でネルソンはいまどこにいるんだね」

彼は複雑な気持ちだった。

「軍に戻ったらしいわ」

「らしいって？ それどういうこと」

ジュディは悪戯が見つかった子供のように、小さな舌をべろっと出した。

「実はハンソンに連絡とってもらったのよ」

有平は迷った。

真有の箱船は地軸がふたたび動き出すまで持ちこたえることができるだろうか。照明はどうしているのか。月や星が出ているだろうか。雲が月や星を覆い隠していないだろうか。もし照明がなければ、真っ暗なところで、三人はどうやって過しているのだろうか。

彼はますますにでも真有の箱船に飛んでいきたいと思った。だが手も足も出なかった。彼は真有たちが箱船で一〇〇日持ちこたえてくれることをひたすら祈った。

「パパだわ」

暗闇のなかで、真有は確かにパパの声を聞いたと思った。

真有は手探りで第四層への階段を探した。バッテリーモニタが残り少ないことを知らされてから、彼女はできる限り照明を控えていた。階段の手

すりを掴まえると、彼女は上を見上げた。

パネルにはめ込んだ透視ガラスを通して輝いている星が見えた。彼女は星を目印に階段を上った。

ガラスに額を付けて、真有は星をじっと見た。星は手に取れるように近くで瞬いている。だがそこには見慣れたいつも星座が見当たらなかった。地球から遠く離れた別の世界にいるような気がした。

大きな流れ星が長い尾を引いて流れていく。彼女はふと箱船「マユ号」が翼を広げて、天空めがけて飛び立ったような錯覚に陥った。

真有は思い出したように、椅子に腰を下ろし、受信装置のスイッチを入れた。バッテリーの出力が落ちていたが、スイッチを入れてから数分間なら受信ができた。このことがわかってから、真有はときおり起きだしてはスイッチを入れた。ザーという雑音のほかになにも聞こえないことが多かったが、かすかにパパの音が聞こえてくるときがあった。

こうして耳にしたことを記録し、明るる日、真有は洪一郎と清子に話して聞かせるのだった。彼女の話に洪一郎は相変わらず無表情であった。清子は大きく頷いたかと思うと大声を上げて泣き出した。それでも二人は真有の話を楽しみにしているふうだった。

「もうじきお日さまが顔を出すそうよ」

真有には二人の老人に一〇〇日間待てとは言えなかった。幸いなことに、老人にはもはや日の観念はなかった。身体だけは慣れたサイクルをなかなか忘れようとしなかったが、夜だけの毎日を過しているうちに、意識から一日のサイクルが遠のいていった。

「まだなの」

清子は思い出しては真有に聞いた。

そのたび、彼女は「もう少しよ」と応えた。

五〇日目を過ぎたころから、洪一郎が急に衰え出した。意識も時折朦朧としはじめていた。

真有は有平の言葉の端々から、何度か救助に来たらしいが、見つけ出すことができずに引き返したらしいことを薄々知った。真有が落胆することをおそれて言い出すことができずにいるらしかった。

真有は過ぎた日を数え、太陽が出る日を待つ以外ないと諦めかけていた。

49

「箱船は雪氷に包まれてしまっているらしい。もはや探し出すのは困難だろう」

ネルソンはハンソンを見た。この男はいつのまにか掃木有平の虜になってしまったらしい。この男にせつつかれて、彼は三度目の探査飛行から帰ってきたところだった。

「まあいいだろう」

ネルソンは心の中で呟いた。

「雪に埋もれても大丈夫ですか。あの箱船は」

「まあ、問題がないが、あまり深く埋もれるようになると問題だが……」

もし降雪があればまだ海水が氷結するまで冷えきっていないのかもしれない。彼はいちろの望みを抱いた。

「もう八九日目だ。なにか動きはないかね」

アイトキンソンは大会議室を転用した対策本部兼データ解析室にずっと入り浸っていた。

「地軸の回転は完全に停止していませんでしたが、いまはほとんど停止状態にあることに変わりありませんわ」

ジュディの目の回りに黒いクマができています。

「ジュディ、少し休んだらいい。きみは疲れている」

有平は優しく声をかけた。

「ありがと。でもじっとしておれないの。真有は大丈夫かしら。北半球にはすでにかなりの積雪があつてよ。彼女のいる海の上はどうかしら」

「うん……」

「ハンソンだわ」

彼女は席を立って、ハンソンと話をはじめた。

「ドクターアイトキンソン、雨が降り始めたようです。大雨が南極大陸に……」

ディスプレイのまえで送ってくるデータをチェックしていた有平が声を張り上げた。

地軸の回転によって真っ正面から太陽光線を受けていた南極上空の成層圏（上部）がようやく昇温したらしい。そのため成層圏や中間圏で氷晶化し集中集積していた氷粒子が溶け出し、冷たい大量の降水となって南極大陸に落下しはじめたのだ。

アイトキンソンが飛ぶようにして、有平の席に寄ってきた。ジュディが、そしてハンソンが近づいてきてディスプレイを覗く。

「おお、グレート。計算通りか。ドクター掃木、コングラチュレーション」

アイトキンソンは両腕をひろげ、有平に抱きつく。

「南極大陸の上空に雨雲はないかね」

念のために、彼は訊ねた。

「快晴ですよ」

ハンソンは即座に応えた。

「間違いありません。中間圏からの降水です。氷粒子の雨ですよ」

大雨は一週間降り続いても止める気配はなかった。

その間中、有平はジュディと地軸の揺れを監視続けた。

さらに、一週間が過ぎた。

「兆候はまだか」

アイトキンソンが苛立ちを隠し、心配そうに二人の肩越しにディスプレイのデータを覗いた。

そのつぎの一週間が過ぎるころ、大雨が突然止んだ。そのとき、水から出たばかりの犬が身を振るわせて、ずぶ濡れの毛から水滴を飛ばすように、一瞬地球がブルと振れた。

50

「地軸が動き出したようよ」

ジュディが微妙な動きに気付いたらしい。

「本当？」

有平は椅子から飛び上がった。

地軸が回転を止めて北半球が暗黒の世界と化してから、すでに一〇〇日をとつくに過ぎていた。彼は気が気でなかった。

真有には一〇〇日待つようにと言っていた。だが一〇〇日目過ぎてからすでに一〇日も経ってしまった。真有がすっかりしているにちがいない。こんな仕打ちをする神が恨めしかった。このときばかりは彼は自分の計算の誤りを棚に上げて神を恨んだ。

有平の恨みを恐れたのか、地軸がふたたび回転をはじめたのだ。

地軸は極めて鈍い速度で動いている。

「まえと同じ方向へ回りだしているね」

「そうね。逆転して、まえの状態に戻っているのじゃないわね」

「すると、地軸がほぼ垂直の方向から、現在太陽の反対方向に八〇度傾斜しているのだから、太陽の赤道面に対しては一七〇度でほぼ水平だったけど、完全に水平になるまでまだ一〇度残っているね。同じ方向に回転するとすれば、まず残っている一〇度をクリアして水平になって、それから徐々に地軸が垂直の方向に向い、九〇度回って一度逆さになってから、さらに一八〇度回ることになる。それまではかなりの時間がかかるなあ」

有平はジュディの顔を見た。

「そうね。もし元に戻るとすればね。何日かかるかしら」

「急に動いて回転が止まらなくなっても困るが……、いつになったらゴールインするのか分からないのも困る」

「そんなことにはならないでしょ」

「どうして……」

「地軸が回転しはじめたのもバランスが崩れたからよ。だから、バランスがとれるところで地軸の回転はふたたびストップするはずだわ」

「じゃ、きみはどうなればバランスがとれると考えているんだい」

「南極大陸の氷床が滑落してバランスが狂ったから、それを調整するために回転し出したけれども、南極大陸が太陽の方向に向いたとき、バランスが回復したので停止したのよ。ところが残っている氷床が溶け、中間圏に集中集積した氷粒子が大雨となって落下した結果、また、バランスが崩れ、地軸の回転がはじまった。これが今回地軸がふたたび動き出した理由ね」

「それに北半球に大量の積雪があった」

「そうね。それもバランスを崩すひとつの原因と数えるべきかも」

「ではつぎはどこでバランスがとれるようになるかと考えられるかだ」

「動きがゆっくりしているから、ほんの微調整というところかしら。多分、地軸がさらに四分の一回転して、太陽の赤道面に対してほぼ垂直の位置になったところで一端動きがおさまるんじゃないかと思うわ」

51

地球は自転しながら、ゆっくり地軸（自転軸）を回転させた。

一日五度ほどの速度だった。それは自然の変動からみればかなりのスピードと言ってよいが、真有のことが気掛かりな有平にはカタツムリがこういうな鈍さだった。

三日目が過ぎて、ほぼ予測通りに動いていることを確かめると、有平はじっとしておれなくなった。彼はなんとかして真有を探したい。地軸の回転がそのまま続くと、これからの二週間ぐらいは北半球に太陽光線が射込む。それが過ぎても回転が続くとすれば、ようやく陽光が射込み出した北

半球も灼熱地獄を経てふたたび暗黒の世界へ逆戻りすることになる。箱船の調査はいまがチャンスだった。

「ジュディ、真有の箱船を探しに行きたいんだ。その間、わたしの代わりにしてくれないか」

「わたしも連れて行って」

「ここが空っぽになる」

「ハンソンが代わりをするわ。それにアイトキンソンもいるわ」

「そうだ。わたしがいる」

いつ来たのか、アイトキンソンが彼女の背後から顔を出した。

「まあ、いついらしたのかしら」

ジュディは驚いたふうに、大きな声をあげた。

「ドクター掃木、実はジュディから新しいプロジェクトのプロポーザがあった。いままで暗黒の世界だった北半球の状態を早急に調査しておきたいとね。地軸の今後の動きを予測するにもこのデータが必要だと言うのだよ。きみはどう思うかね。わたしは是非必要だと思ってるんだが……」

「……そうですね」

彼女はしきりに片目を瞑って、合図を送ってよこす。

「そのデータがあれば、いまよりも確度の高い予測が可能となりますよ。きつと」

合図に気付いた有平は急いで付け加える。

「そうだろう。そこできみにも専門家として調査に参加してもらいたい。明日、サンディエゴ沖から調査船が出ることになっている。軍の船を使うことになっているが、港が水没してしまっているの、沖に停泊している調査船にはヘリで乗り込むことになるらしい。明日、ネルソンが迎えにく

るそうだ。ついでに、お嬢さんの箱船も探してくるといいだろう」

アイトキンソンは片目を瞑ってウインクすると、急ぎ足で去っていった。

明るる日、ネルソンは研究センターに有平とジュディを迎えにきた。彼は近くの空軍基地から自ら小型ジェット機を操り、二人をサンディエゴ近郊に運んだ。そこで大型ヘリコプターに乗り換えた。

調査には南極調査に用いられた大型の砕氷船が用意されていた。

ネルソンも二人の後についてヘリコプターから降りてきた。

「どうも発信装置が不備だったようで……。それに地球の磁場も変わっているの、電波が影響を受けてしまっただけで交信がうまくいかないらしい」

甲板に立つと、ネルソンは有平に改まった口調で言う。

「それに雪を被っていたらしい。強力な照明器を用意したが、結局、見つけることができなかった。申し訳ない。一年間分の水と食糧は積んであるはずだが、毎日が夜となるとは予想していなかったの、電源が足りなかったかもしれない。それが心配で早急に探し出したかったのだが……」

ネルソンは有平が目を伏せたのに気付いて、言葉を切った。

「太陽が戻ってきたので、こんどこそ見つけますよ」

ネルソンは力強く言って去っていった。

調査船は有平たちを待っていたように、すぐ、動き出した。

太陽が戻ってきたといっても、まだ二、三時間しか顔を出さない。すでにあたりは薄暗らかった。肌を切るような冷たい風が吹き出した。

有平はジュディを誘って、キャビンに入った。

二人は用意されたデータ解析室のドアを押しした。

ディスプレイに電源を入れる。

「予想通り回転しているわ」

しばらくキーを押し、データを読み出していたジュディがいつもの声で言う。

モニタースクリーンに薄明かりの海が映し出された。照明を受けて小さなきらきらしたものが無数光っている。砕けた氷片が海面に浮いているらしい。真有が乗っている箱船がそばに浮いているような気がして、有平は必死にスクリーンを見回した。

来る日も来る日も同じ海だった。日に日に、日は長くなっていく。しかし変わったことはなにも起こらなかった。変わったことといえば、日が延びた分、海がスクリーンに映し出される時間がだんだん長くなっていくことだけだった。

有平は深い不安に襲われた。なにひとつ手掛かりとなるデータもないのに、真有の箱船をどうやって見つけたさうなのか。ネルソンは単なる気休めを言っただけなのか。

ときおり、ヘリコプターが飛び立つことがあった。レーダーに写る正体不明の物体を目視で確認にするためだ。

有平とジュディはディスプレイでデータをチェックしているときでも、ヘリコプターの爆音がすると、甲板に飛び出した。

無駄だった。雲が低く垂れ、強い風が吹く悪天候のため、ほとんどの場合、なにも発見できずに引返してきた。

なんの手掛かりもなく、こんなに広い海原を探し回ること自体無意味なことにはちがいない。この調査船には暗黒が明けたばかりの北半球の観測という仕事があったから、まったく無意味な暇つぶしのような箱船探しができたのだ。そうでなければ、とっくに諦めていたことだろう。

だがネルソンは執拗に箱船探しを続けた。太陽電池のパネルが陽光を浴びるようになれば、箱船は息を吹き返すにちがいない。発信器が目覚め、声を出しはじめると確信していたらしい。

52

「まだ動いているわ。そろそろ停止するはずだけど……、どうかしたのかしら」

ジュディはディスプレイに目を据えたまま、呟く。

「え？ そうか。地軸は太陽の赤道面に対してほぼ垂直になっているはずだな。そろそろペースダウンしてくれないとなあ」

有平はディスプレイを覗きながら、湧いてくる不吉な予感と闘っていた。その日が暮れても、地軸の回転は続いた。

「アイトキンソンに連絡しなければ……」

もう半回転すれば元に戻る。だがこのまま地軸が回転を続け、北半球と南半球とが交互に何週間の周期で昼と夜の世界をもつというのか。

「もう一日様子を見たら」

有平はジュディに従い、アイトキンソンへの連絡を一日延ばした。

ネルソンは二人の説明を聞いて、箱船捜査を精力的に進めた。彼は有平に休みなく真有への呼びかけを続けるように言った。

有平は真有に語りかけた。語りかけながら、もしかしたら、箱船の三人の息が途絶えてしまっているのではないかという思いに駆られた。彼はその思いを必死に打ち消した。彼は自分の生命を送り込むように、真有を呼

び続けた。

また一日が過ぎた。

「まだ、回転しているようね……」

ジュディはディスプレイの読み出したデータを丹念にチェックした。

「……アイトキンソンにそろそろ知らせなくちゃ」

「そうだな……」

有平はのろのろした手つきで、マイクに向かって、アイトキンソンを呼び出した。

「一寸、待って」

ジュディが叫んだ。

「……回転の速度がダウンし出しているのかしら、それとも……」

「え？ どうかした」

「このデータを見て、ミスかしら……。それともやはり……」

彼は彼女のディスプレイを覗く。

「いま何度？」

「一〇五度を超えたところよ」

「じゃ、一一〇度前後か、もしこのまま回転速度が落ちていくとすれば、停止するのは……」

「約二〇時間後頃かしら」

有平はアイトキンソンを呼び出すと、地軸の動きを報告した。

「了解。こんどはこのまま静止するのだな。で、しばらくしてふたたび回転することはないんだろうな」

「それは分かりませんよ。なにしろ気まぐれな自然が相手ですから」

「ところで、箱船が見つかったそうだね」

「え？ 本当ですか」

「あ、いけない。確認してからじゃないと、きみには知らせちゃいけないのかな。ネルソンに怒られるな」

有平は急いで回線を切ると、ジュディを引っ張って甲板に出た。

調査船がスピードを上げた。上空前方からヘリコプターの爆音がした。

旋回しているらしい。

調査船はさらにスピードを上げていく。

「あれかしら」

有平は目を凝らして彼女が指さす方を見た。波間になにかが浮いているようだった。

調査船がぐんぐん近づいていった。

サッカーボールのような多面体が海面に浮いている。まるで海坊主が海から頭だけをのぞかせているふうだった。知らず知らずのうちに、手すり握っている手に力が入る。

調査船はスピードを落とす。

ヘリコプターが近づいてくる。

激しい風が巻き起こった。空中で一端停止して宙に浮いてから、ヘリコプターはおもむろに甲板に降りた。

ネルソンが降りてきた。

「ドクター掃木、箱船から全然応答がないのです。お嬢さんが乗っているか、まだ確認できないのです」

「……………」

有平は黙って頷いた。

「とにかく、甲板に引き上げることになります。少し、時間がかかるかもしれないが、そうするほかないのです。海中でハッチを外から開くことは危険ですから」

彼はふたたび黙って頷くほかなかった。ジュディが腕をとって彼を支えた。彼女の腕に力が入った。

箱船に真有が乗っているはずだ。だが応答もできないとは一体どういうことなのだろうか。箱船のなかの三人は大丈夫なのだろうか。

調査船がふたたび動き出し、海面に浮いているサッカーボール型箱船に静かに近づいていく。近くに接近したところで、スクリューを止めた。

ウエットスーツで身を固めた二人の男が海に飛び込んだ。男たちにワイヤーが渡された。それをもって男たちは箱船に近づき、ワイヤーが掛けられた。

クレーンが下ろされた。ワイヤーの端をもった一人の男がクレーンのフックにワイヤーを掛けた。クレーンがワイヤーをたぐりだす。ワイヤーがぴーんと張って、一瞬ブルツと震えた。

直径一〇メートルほどの大きなサッカーボールが引き上げられていく。海中から離れる瞬間、ワイヤーがふたたび震えた。つぎの瞬間、ワイヤーが切れて飛んだ。

有平は一瞬、心臓が破裂したと思った。

サッカーボールは水中に沈んでいった。彼は手すりから身を乗り出した。追いかけて水中に飛び込んでいきそうになった。

サッカーボールはおもむろに浮いてきて、しばらく揺れた。

切れたワイヤーの先端はバラバラにほぐれていた。別のワイヤーが用意され、ふたたび作業が繰り返された。

こんどは慎重に作業が進められた。何度もチェックが繰り返され、大丈夫と確認されてからつぎの作業へと移っていく。

作業は順調に進んだ。だが時間がかかりかかった。照明が点された。

サッカーボールが甲板に運ばれた。甲板のサッカーボールはすぐハッチ開放の作業に取りかからずに、そのまましばらく放置された。

作業の手順をめぐって検討が進められた。

問題は四ヶ月間も暗黒の世界で狭い空間に閉じこめられていた人間をどのように扱うべきかについて、随行の医師にも明確な判断が下せなかった。というのも、内部との連絡が不能で、三人の様子が全然不明であったからである。

53

「有平、地軸の動きが止んだわ」

甲板に戻ってきたジュディが彼の耳元で囁いた。彼女は作業についての検討がなされはじめたとき、データのチェックのためにデータ解析室に一端戻ったのだった。

「本当か。よかった。本当によかった」

彼の目はサッカーボールに釘付けになったままだった。

「こちらのほうは……」

「まだ、なんの応答もない」

彼もサッカーボールのそばに行つて、何度も叩いてみた。だがなんの反応もなかった。

口の中が空からだった。彼は言いようのない不安に襲われていた。

「ハッチを開けてみたらいいのに」

「ハッチは外から簡単に開けない仕組みになっているらしい」

「……………」

「なかの様子を見るために、いま、吸気口から赤外線モニターカメラを差し込んでいるところだ」

「なにをそんなのんきなことを……、もしものことがあつたらどうするの」  
彼女は有平の苛立ちが感染したように、いらいらして叫んだ。

「なかの様子が分からないまま、ハッチを開けるわけにいかないというんだ」

「一体、なんのつもりよ。まるで宇宙船のような扱いじゃないの。四ヶ月も閉じこめられていたのに、一刻も早く助け出してやらなければならないんじゃないの」

「真有ら三人は長い間狭い空間に閉じこめられて心身ともに弱っていると思われというんだ。それで急に強い刺激を与えるのは危険だと言って、医師がハッチの開口を制止しているらしいんだよ。それで皆が慎重になっているんだ」

ジュディは有平の手をぎゅっと握った。

「待っておれないわ、早くしてもらいましょようよ」

ハッチの開放作業がはじまった。

いつでもハッチを開くことができるように、酸素バーナーでハッチのボルトが切断された。ハッチのパネルのすき間を覆っている貝殻などの海の付着生物が取り除かれた。

赤外線カメラから送られてきた最初の映像には船内で動いている人の姿

はなかった。カメラを下方に移動していく。横たわっているような人影が見えた。

早速、ハッチが開放された。

マスクをした白衣の医師が乗り込んだ。レスキュー隊員が続いた。

しばらくして、意識のない痩せ衰えた老人、眠り続けている太った老婆、ときおり意識が返ってくるらしくそのたびに頭を持ち上げようとする少女が抱きかかえられて、つぎつぎにハッチから出てきた。すぐ甲板で用意された担架に移され、医務室へと運ばれていった。

「真有、マユ」

有平は担架の少女に呼びかけた。真有は薄目を開けたが、すぐ閉じてしまふ。彼は担架に寄り添い、後を追った。

## エピローグ

地球は自転しながら、地軸を太陽の赤道面の方向に約四分の一ずつ、二度回転した。

地軸を半回転ほどして、北極を南に、南極を北にして止まった。

太陽がふたたび昇った。

北半球の長く続いた暗黒の夜は完全に明けた。逆さになった地球では左回りが右回りになり、太陽は西から昇り東に沈んでいったものの、相変わらず同じスピードで自転をつづけていた。だがこのまま回り続けるのか、それとも左回りになるのか分からなかった。それよりも地軸がふたたび回転をはじめるとは思えなかった。

暗黒の北半球に降り積もった雪氷が海面を若干低下させたが、南極大陸に降った大雨によって帳消しになったが、地軸の回転で、南半球となったかつての北半球に降り積もっていた雪氷の一部が溶け出した。これによって、海面はさらに幾分上昇気味となった。

大規模な氷床落下の際に発生した大波に襲われた沿岸都市はほとんどがいまもって水面下か水浸しのままだった。

南極大陸に残っている氷床の海中落下が依然として収まらず、海面上昇がつづき、海がじわじわと広がり、陸地の沿岸部の広い範囲に水が浸入していた。

表面上、地球システムは一応落ち着きを取り戻したものの、大波と急激

な海面上昇につづく地軸の回転によって人類社会は崩壊の危機にあった。

大波によって破壊された沿岸都市から脱出した人々や内陸部で水難を免れた人々が復興に向けて早々に動き出していたところに、続いて襲った地軸の回転による北半球の暗黒の氷の世界、南半球の白昼の灼熱地獄が人類社会に対して決定的な打撃を与えた。とくに四ヶ月以上におよぶ暗黒の支配に北半球の諸国は再起不能なダメージを被った。

開発途上の多くの農業国では大波以前から大雨や干ばつといった異常気象に度々悩まされ、農業生産が著しく減退し、食糧事情がかなり悪化しているところに、四ヶ月もの暗黒の支配によって今年の穀物生産がほとんど期待できない状態に陥った。

飢餓が襲い、飢饉難民が溢れ、食糧略奪が横行した。食糧と水を巡るつば迫り合いや紛争がいたるところで頻発した。暗黒を脱した後になっても勢いは止まらず、ますます激しさを加えていた。高齢者と幼児に餓死するものが続出した。

また、先進諸国においても、食糧事情は極度に悪化し、大波被害後、かつての所得水準や生活レベルからは想像もできないほど惨めなものになった。経済活動は停滞し、生産活動もごく低いレベルに止まっていた。エネルギーが不足しているうえ、原料の調達もままならず、ほとんどの業種にわたり回復できずにいた。重要な生産拠点も大波の被害を受けたまま放置され、そのまま朽ちていった。生産が再開されても、まだまだ小規模なものだった。大体、需要そのものが期待薄の状態だった。

賭博的マネーゲームで賑わっていた世界の金融マーケットは再開の目処が立っていないかった。

大波や大雨の被害を免れた地域でも生活レベルの低下は避けえなかった。

食料はおろか、電気、ガス、水道の供給が途絶え、衛生状態が最悪だった。社会は無秩序な状態で、闇取引が横行した。近傍から流れ来る大量の飢餓難民によって、社会が攪乱され、治安がさらに乱れ、一般の生活レベルは日に日に低下を余儀なくされた。

一方、暗黒の支配を免れた南半球でも食糧やエネルギーが十分だったわけではない。ここでも大波による被害が痛手となった。夜がない昼だけの世界だったとはいえ、復旧活動が進捗したわけではなかった。ここにも大量の大波難民が流れ来た。社会の治安が乱れ、生活レベルが極度に低下した。

真有は若いだけに回復が早かったが、洪一郎は回復することがなかった。一度、意識が戻ったとき、そばで見守る有平に「わしが間違っていた」とぼつたり言った。それから急に安らかな顔になって、息を引き取った。

神経症の後遺症が残る清子はまだ病院で療養を続けている。

有平はACARのあるポルダで、真有と一緒にの生活をはじめた。これまでの分を取り戻すように、彼はできるだけ時間をつくって娘と一緒に過ごした。だが二人の間にはまだ堅苦しさが残っていた。

「パパ、どうしてこんなことになったのですか」

近くを散歩しているとき、真有が有平の顔をじっと見て、改まった調子で訊ねた。

彼には目の前にいる大人になりかけている少女が講演会の席から連れ去られた幼い真有だとはどうしても思えなかった。よく見ると、幼いころの面影が残っているが、この十数年の歳月のせいか、それともこの数ヶ月の想像を絶する試練がそうさせたのか、すっかり大人びいた顔になっていた。

「急激な二酸化炭素の増加によって温暖化を皮切りにさまざまな現象が連鎖反応を起こして地球システムが狂いだし、暴走したということだろう……、すべては地球を食いものにしてきたわれわれのせいだが……」

彼は答えにならない応えをした。脳裡に、夜光雲の出現から地軸の回転までの一連の出来事が蘇った。

「パパが警告したとき、それにしたがって温暖化に対する十分な対策を行なっていれば、こんなことにはならなかったのですか」

「さあ、真有はどう思う？」

有平は真有に目を向けたまま、十分な対策をしようとする人間社会に苛立つて過ごしていた日々を思い浮かべた。

世界中が際限ない経済成長に明け暮れ、大量生産大量消費に溺れ、エネルギーや資源を浪費していた人々には、襲い来る地球温暖化の脅威を予想することはできなかった。ましていつどんな被害をもたらすのか判然としない状況で、これを未然に防止するために、経済成長を抑制し、消費を手控え、自らの生活程度をダウンすることは期待できないことだった。目先の欲望に躍らされた人々に、欲望を抑える対策など決してできるわけはない。

「……………」

真有は黙ったまま、じっと父を見つめている。

「……真有らの未来の世代に負の遺産のみを残すようなことはすまいと努力したのだが、いくら警告を発しても誰も真剣に取りあわず、誰もが見て見ぬふりをしてダメだった。土台、人間は『目の前に災害がやってくるまで問題の存在さえ認めようとしない』ものだからね」

欲望本位の現代文明を謳歌する現代人が目先の甘い蜜にだけに群がり、

やがて確実にやって来る酸っぱく辛い部分には見向きもしない。その結果、もろもろのマイナス面が放置され、負の遺産が肥大化していった。その最大のものが地球温暖化などの地球環境問題だった。人類は自らの生き残りがかかっていることに気付こうとさえしなかったのだ。

「真有、でもパパは根本のところの間違ってしまっただけ……、自然相手に小手先だけの対策を試み、取返しの付かないことを仕出かしたのだ」  
有平が必死に修復を試みたものの、一度狂い出した地球気候システムを元に戻すことができなかった。悪魔との契約も辞さず、いくらもがいても、不可能だった。

「狂いだした地球気候システムをなんとか元に戻そうとして必死の努力したけど、結局、ダメだった……」

彼は真有の困惑した表情を見て、口を閉ざしてしまった。

この地球には現代科学技術で解決できない問題が山ほどある。今回の問題もそのひとつだった。

それなのに、現代科学技術文明はいたずらに巨大化高度化大量化の限りを尽くし、有限な地球を貪り食い、人類の生存すら危うくする極めて有害な存在となりつつある。このことをはからずも実証したのが今回の出来事であった。

「パパは思い上がって大きな間違いをおかした。なんとか『ノアの大洪水』を防ごうとして、かえって取り返しの付かないことを仕出かしたんだ。そのため、何日も真有たちを箱船に閉じ込める結果になってしまった。地球の自転軸を回転させて北と南を逆転させ、地球を台無しにしてしまったのだ」

彼の耳奥で大波に攫われた何億何十億人の阿鼻叫喚が湧くように響く。

あのとき、なぜ中間圏の氷晶片を人為的に取り除けうると考えたのか、なぜ急に現地実験を実施する気になったのか、いままって理解できなかった。あんな小手先の対策で「ノアの大洪水」を防ぐことはできるはずがなかったのに、なんとかして「ノアの大洪水」を防ぎたいという思いだけだった。だがいま思えば、人間が自然を支配できるという思い上がりがあったとはいえない。いや思い上がりそのものだった。

このような思い上がりが人類をして地球を滅ぼし、自ら墓穴を掘るような現代科学技術文明をつくりあげてきたのだ。このことに気付いているつもりでいた自分が「ノアの大洪水」をまえにしてとんでもない間違いをおかしてしまっていたのだ。

二人は丘の上に出た。

午後の傾いた陽光に映え、ポルダールの市街が眼下に広がっていた。あの暗黒の世界のなかでじっと息を殺していたとは思えないくらい、華やかに見える。

「ここにいると、あんなことがあったとは思えないわ。でもわたしたち人間はいつかまた、同じことが繰り返えすのかしら」

真有は大人っぽい目をして遠くを見たままつぶやいた。

「でも太陽が昇り続けるかぎり、わたしがあの日々を忘れることは決してないと思うわ」

有平にはなぜ地軸がふたたび回転しはじめたのか、不思議だった。もしもう一日、もう一週間、地軸が停止したまま暗黒の状態が続けばどうなっただろうか。箱船に暗黒の世界に耐えうる力が果たして残っていたのだろうか。

清子や洪一郎には箱船のなかでの生活に耐えうる力がなかった。船酔い

予防の薬を飲み続け、意識が朦朧としていた真有も限界だった。

有平は目を向け、生気を取り戻した真有をじっと見た。

空に薄い雲が広がっている。

有平は真有の肩を抱え、いつまでも空を見上げていた。

(完)

(この物語はフィクションであり、登場人物および団体名は実在するものと一切関係ありません。)

地球逆転―現代文明の毒唾 3

生野以久男

二〇〇六年八月二〇日第一版発行

(c) Ikuo Ikuno 2006

発行所 [kindkpress.com](http://kindkpress.com)

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一―一 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 [www.kindkpress.com](http://www.kindkpress.com) 内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウト+デザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN なし

